
不良騎士とひとりぼっちの魔術師

雑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不良騎士とひとりぼっちの魔術師

【Nコード】

N3534T

【作者名】

雑

【あらすじ】

じじ様が死んで、ひとりぼっちになった。

淋しいことはいっぱいあったけれど、それはじじ様がいなかったからで、ひとりだからじゃない。

『3年たったら帝都で学ぶように』
それがじじ様の遺言だった。

その3年がすぎ、帝都へ行く準備をしようとしていたある冬の日、
私は『彼』と出会った。

アーネスト・エレザール「リュカディア」シュレイヤーン
蜂蜜にも似た金の髪、新緑の緑の瞳を持つ、昔絵本で読んだ王子様
みたいな騎士。

「いいか、ちび、言っておくぞ。肉をよけるな、レバーを残すな、
魚を俺の皿に移すな！！おまえは、好き嫌いばっかしてるから、ん
なにガリガリなんだよ！！」

「……………いない」

「ちびっ！」

「知らない」

「このクソガキっ！！」

……………でも、中身は小姑だと思う。

プロローグ

「……候子っ」

視界の端に映るクライスの顔が、大きく歪む。

いつも冷静で冷やかな男のそんな表情を、見たことがなかった。

（なんだ、そんな顔して）

笑える、と思いつながら、顔の筋肉がうまく動かせないことに気づく。

灼けるような痛み。

アーネストは、血臭に眉根を寄せる。

それが己の血だと気づき、同時に腹に刺さるそれに気づいた。

彼の身体を貫いていたのは魔力を帯びた青白い刀身……帝国を最強たらしめる力のその源。

護国騎士クル・レグザータの持つその刃が、彼の腹から生えていた。

刃を握っている男の顔は、泣き出しそうに歪んでいる。

（ウィル……）

無防備だった。

自分が狙われていることは知っていた。というよりは、ずっと狙われ続けていたから、それが日常だった。

けれど、この男が自分の敵になることだけは想像をしたことがなかった。

どんな最悪な想像の中であっても、彼だけはアーネストの味方だったからだ。

『親友』

誰もが自分たちの関係をそう言い表したし、アーネストもそう思っていた。きつと、ウィルだってそう思っていただろう。

こんな風に裏切られるなどは一度として思ったこともなく……なのに、なぜこうなったのかは即座にわかってしまった。

(バカな奴……)

脳裏に浮かんだ女の顔をアーネストは思い出せなかった。どころか、その髪の色が黒だったのか金だったのか……それすらもあやふやだった。

(ほんと、バカだな……)

きつと、もう二度とこいつは安らかに眠ることができないだろう、とアーネストは思う。

優しく……、だからこそ弱いこの男は、アーネストを裏切って普通の日常を送れるほど心が強くない。

ケホツと小さく咳き込むと、器官に血が逆流した。

数多の戦場を経験した武人として、また、仮契約とはいえ、ウィリアムが手にしている刃をかつて手にしていた経験からも、アーネストは自身が決して助からないだろうことを予感していた。

「……だからって言うても、やられっぱなしは俺の流儀じゃねえな」

渾身の力をこめて、自身に逆手にもった剣をつきたてる。

竜の尾から出てきたという謂れのあるシュレイヤーン候家に伝わる魔剣ガルディアは、アーネストの身体を突き抜け、背後のウィリアムにまで達した。

確かな手ごたえ。

ウィリアムの表情が見られないことが残念だった。

（護国騎士クル・レグザータでもこの距離なら、傷くらいつくだ
る）

せめて一太刀浴びせられればそれで良かった。

魔剣でついた傷だ。どれほど腕の良い治療師を雇ったとしても、
きつと生涯、その痕はのこるだろう。

（しかし、つまらん最期だな……）

視界が白い光に埋め尽くされる中でぼんやりとそんなことを思い、
そして、アーネストはそのまま意識を失った。

北の大賢者の養い子（1）

老人が息をひきとったのは、月のない夜だった。

スィールはたった一人でそれを看取った。

枯れ木のように乾いた細い手を握り、自分のぬくもりを、命の炎を分け与えるかのように力をこめた。

そして、この世界を作ったという女神エシユリーダにずっと祈り続けたのだ。

……その祈りが届くことはなかったけれど。

（……ゆめ）

そう。夢だ。

ぼんやりとした思考の中で、スィールは反芻する。

あの夜の冷たい空気を。

闇に塗り込められた夜の昏さを。

そして、たった一人になってしまった孤独を。

寝台の上に起き上がり、周囲を見回す。

室内は薄暗かったが、スィールは夜目がきく。特に問題はなかった。

た。

「おはよう」

小さな部屋に寒々しく声が響く。

誰かの返答などあるはずがなかったが、これはスイールの決めた習慣だった。

せめて朝の挨拶くらい声をださなければ、しゃべり方を忘れてしまいそうでこわかった。

厚い羊毛の部屋履きを履いて寝台を抜ける。

スイールが寝室に使っているのは屋根裏で、ここに綿を詰めた厚い敷布を敷き、羊毛の毛布と水鳥の羽を詰めた布団に包まって寝ている。

呪を織り込んだ布団は真冬でもふんわりと暖かで、ここ数年の間に作成したさまざまなものの中でスイールの一番のお気に入りだ。

隅のほうにいている衣装函から着替えを取り出し、ゆったりとした前開きの寝間着を脱ぐ。

ふと衣装函の裏蓋についている鏡を見れば、ガリガリに痩せた眼だけが大きい顔色の悪い子供が映っていた。

(……かわいくない)

じじ様は、いつも『かわいいスイール』と口癖のように言ってくれたが、それはじじ様が血がなくなっていなかったとしてもスイールの親だからだ。

客観的に見て、スイールはかわいくもないし、美人でもない。まあ、物好きがいればもしかしたら百人に一人くらいは可愛いといってくれるかもしれないが。

(なんか、自分で考えてて落ち込んできた……)

スィールにだって理想はある。

ふつくらした色白の薔薇色の頬をした、きらきら金髪に青い瞳の絵本に出てくる女神の御使いのような少女だ。

でも、鏡の中の自分はといえば、頬はコケてこそいないがふつくらなんて夢のまた夢、肌の色は白いをとりこしてどちらかといえば青白く、眼だけが大きく見えてアンバランスだ。

やっと腰の長さにもまで伸びた髪の色は金髪などほど遠い漆黒で、瞳の紫だけは青じゃないけれど、唯一スィールが気に入っているところだった。

今年で14歳になるうというのに、腕も足も折れそうに細く、身体つきはがりがりであるやかさのかけらもない。

ずっと髪が短かったせいも、麓の村ではいつも男の子に間違えられていて、もはや否定するのも面倒でそのままにしているくらいだ。

8

この地方では、これくらいの年齢の子供の衣服はあまり男女の区別がない。

まず上下に分かれた肌着、その上に簡素な綿のシャツとタイツ。

そして、男女ともに幅広のズボンを身につけ、その上に冬ならば厚い羊毛の長衣を身につける。

その長衣の色合いや刺繍の柄などで男女の別はだいたいわかるが、幼いとはいえ魔術師であるスィールの場合は、純粹に好みだけで着衣を選ぶことはなく、そうするとどうしても暗めの色合いが多くなるから余計に少女には見えなくなる。

『おまえは蕾だからまだ焦ることはないんだよ、可愛いスィール』

『でも、また坊主って言われた……』

『安心おし。年頃になれば、花開くように美しくなるよ。今から目に見えるようだ』

『それはじじ様の欲目』

『いやいや。おまえには誰もがひざまづくに違いないよ』

『誰もじゃなくていいんだけどな』

じじさまはそんなスイールに優しく笑った。

その笑顔を思い出しながら、身支度の終わったスイールは梯子で階下へと降りる。

一人で暮らしていても、そこそこに彼との思い出がある。だからスイールは、孤独に凍えてしまうことがない。

居間に使っている部屋の窓際の厚いカーテンを勢いよく開くと、強い日差しが降り注いだ。

(お日様だ)

この季節には珍しい晴天だった。

真冬の最中とはいえ、陽光があれば空気は柔らかかだ。

「いい天気」

こんなにいい天気だと、何か良いことがあるかもしれない、とスイールの心は小さくはずんだ。

北の大賢者の養い子（2）

スイールが住んでいるのは大陸最大の版図を誇るエシユリア帝国の北の果て。

その土地の貧しさから帝国直轄領とされているシュアーズ地方の最も北に位置するイーガ山脈の奥深く、『沈黙の森』と呼ばれる森の中だ。

獣すら通わぬ地といわれるその場所を、只人が訪れることはない。冬でなければ月に一度か二度、麓の村まで買い物に出るが、それ以外はスイールも森から出ることはない。

『じじさま』とスイールが呼んでいた養い親の老人は、この森の端にある小さな小屋で世捨て人同然の暮らしを送っていた。

麓の村では都のえらい学者の先生が都の貴族に嫌われて隠れて住んでいるらしいと噂されていたが、時折買い物に来るスイールと老人がその当人だとは思っていなかっただろう。

老人がどういう過去を持っていたかをスイールは知らない。だが、えらい学者の先生だったというのはおそらく本当だろうと思っていた。

何しろ、小屋の中には書物があふれている。

識字率がそれほど高くない辺境の村では、書物など、村長の家や金持ちと言われる人間の家に聖書と流行の小説が数冊あるくらいがせいぜいだ。

なのに、小屋の書物は一般的な読み物というわけではなく専門書。それも、魔術や歴史に関する書物がかなりの割合を占めていた。他を知らないスイールでさえ、ここにある書物はかなり貴重なものなのだとはんやりとわかっていたほどだ。

そして、何よりも……。

(じじさまは、魔導師だった)

この世界において、『魔導師』は特別な存在だ。

完全な身分社会の中にあいながら、『魔導師』は『魔導師』となつたその瞬間から、自国の王にすら頭を下げる必要がなくなる。また、その前身が何者であるかすら問われることがない。

王侯貴族のような権は持たぬが、世界を揺り動かす力を持つ。

それが、『魔導師』である。

世界にたつた七人しかいないルーリンディアの杖の主……

- 北の大賢者 ヴィラード・ルウ。

それが、スイールがじじさまと呼ぶ養い親の老人の名だった。

スイールは、捨て子だ。

この沈黙の森の奥深くにある星の泉のほとりに捨てられていたのを、老人が拾ってくれた。

「私も一人で暮らすことが寂しくて淋しくてたまらなかつたんだよ。きつとエシュリーダ女神がそれを哀れんでくださったのだろう」と老人は静かに笑った。嬉しくなって抱きつくと、いつも優しく頭を撫でてくれた。

スイールは、老人が大好きだった。だから、捨てられたことにす

ら感謝した。

(じじさまに出会う為に捨てられたというのなら、それでいい。…
…うっん。それがいい)

両親の揃っている立派な家庭であったとしても、スイールには必要なかった。

スイールの家族はじじさまだけで良かった。

もし、自分で選べるのなら、スイールは何度だって捨てられることを選ぶだろう。

(だいたい、親ってよくわからないし……)

じじさまとスイールは、一時期、街で暮らしていたこともあるから、その時に親子というものを見たこともある。

けれど、あんまりよくわからなかった。

仲良しになった近所の兄妹には『お父さんとお母さんがいなくて可哀想』と言われたのだが、大好きなじじさまをバカにされたような気がしたことと、勝手に可哀想な子にされたことに怒りを覚えて絶交した。その時だって『親』についてはどうでもよかった。

そもそも、スイールに親の記憶はまったくないのだ。記憶がない以上、恋しいと思うはずがなかった。

北の大賢者の養い子(3)

老人に拾われた時、スイールはまだ生後1ヶ月たつたたないかという幼さであったという。

包まれていた祝福布と握っていた指輪、それが、スイールが持っていたすべてだ。

祝福布は白の絹地に女神エシユリーダの聖句が銀糸で縫い取られ、指輪には小さいとはいえ魔石がきらめいていた。どちらも、到底一般人では用意できない品である。

(たぶん、ちゃんとした貴族の子とかなんだと思うけど……)

それは別に願望というわけではない。

魔石というのは、同じ大きさの最上級の無色のダイヤモンドと比べてさえも価格がゼロ一つ違うと言われるほどに貴重なものであり、また、聖句を縫い取った祝福布は多額の喜捨をするだけでは手に入らない特別な品である。

そんなものを生まれてくる子の為に用意できるのは、決して一般市民ではないだろう。

貴族の家では、魔力は尊ばれる。魔力を持つからこそ貴族なのだから当然だ。

だが、自身の魔力を制御できなくなれば別だった。

そして、赤ん坊のスイールは溢れる魔力をよく暴走させていたのだと、じじ様は言っていた。

スイールが泣くと雨が降ったり、風が吹く。あまりにも激しく泣くと暴風雨だ。

……家の中で。

赤ん坊のスイールは、何回小屋をふっ飛ばしたかわからない、というのがじじさまの苦労話の一番最初である。

勿論覚えていないのだが、その話をされるとスイールは正座をして神妙に拝聴せざるをえなかった。

魔導師たるじじさまでさえ、赤ん坊の彼女を抑えるのには相当の力を必要としたというのだから、ただの魔術師や魔法士にそれができたと思えない。

魔力を暴走させる人間は大概、『悪魔憑き』などと言われて、隔離される。

（隔離、なら、まだマシだ）

手に負えないとみなされれば、闇に葬られることもある。

スイールは、自分がそういう風に処分されるはずだった子供なのだろうと思っていた。

赤ん坊ゆえに殺すに忍びなく、代わりに捨てられたのだと。

だが、自分で寝返りも満足にうてない赤ん坊を真冬の森に……それも、こんな沈黙の森の奥深くに捨てるのだ。それは、積極的に手を下していなかったとしても殺すのと同義だっただろう。

（運がよかった）

じじ様に拾われたのは、自身にとってこの上ない幸運だったのだとスイールは思っている。

それが、全てだ。

親に捨てられたということは、スイールの中ではとっくにどうで

もいいことに分類されていた。

スィールはスィール・ルウであり、ヴィラード・ルウの……じじさまの養い子だ。他の何者でもない。

それがスィールの『誇り』であり、『絶対』だ。

一人ぼっちの孤独の中であっても、じじ様との記憶を思い出せば、スィールはいつだって柔らかな気持ちになれる。

『いいかい、スィール、おまえの魔力はあまりにも強いんだから、力の使い方には気をつけなきゃいけないよ』

『どのくらい、つよいの？』

『……うまくやれば、竜をぶちのめすくらい強い。人間なら世界最強だな』

『せかいさいきよーってなあに？』

『この大陸中で一番強いってことだ』

『いちばんつよいと、なにかいいことある？』

『嫌なことをしないでいいし、術を上手に使えるようになれば、大事な人を守るよ』

『じゃあ、じじさまをまもってあげる』

『おやおや。じゃあ、がんばって修行してもらわないとな』

『はあい』

優しい記憶。

じじさまは、暖かなそれをたくさんくれた。

そして、自分の持つ知識と術とすべてをスィールに与えてくれた。彼はスィールにとって家族であるというだけでなく、師でもあつ

た。

じじさまのおかげで、スイールは常人よりかなり多いだろう自分の魔力におびえることもなく、恐れることもなく向き合うことができたのだ。

今では、スイールにとって魔術を使うことは息をするのと同じくらい自然なことだったし、それは自分の特技だとも思っていた。

北の大賢者の養い子（4）

（魔術が使えなければ、そもそもこんなところで生活できないと思う）

深い森の奥にありながら、こうして窓から陽光が差し込むのは小屋が崖の端に建つからだ。

窓を開けたその下は目もくらむような谷底で、見ようによっては絶景と言えなくもない。

よほど目が良くなければその底を流れる川面は見えないだろうがこの小さな谷川が、帝国最大の穀倉地帯であるグラード・アルゼイ地方に流れ込み、レテ・フィオ（フィオ河）となる。

スイールは谷に干していた洗濯物を飛ばしてしまつて、何度も（転移の術で）取りに降りたことがあるし、魔術が使えなければ、ここでは火を熾すのも、水を汲むのも恐ろしいほどの難事業となる。

ただ歩いて麓の村にたどり着くことさえ、スイールの体力では不可能だ。

（道なんてないから！）

獣道すらないのだ。たとえ道があつたとしても、距離的にも不可能だと思われる。

だいたい、スイールが一番最初に転移の魔術を覚えたのも、日々の生活に必要なだったからだ。

必要なものはよく覚えるし、得意にもなる。

水と火と転移、これがスイールの三大得意分野だ。これが使いこなせれば、きつとどこでだって生きていくことができるだろう。スイールは、そこが人が生きていくに足る環境であるならば、どんな辺鄙な土地でだって暮らせる自身がある。

(でも、きつと水汲みや火を熾するのが得意でも、魔術師としてはまったく評価されないだろうなあ……)

帝国貴族はその能力の多寡はあれど魔法を使えない者はないし、その大半が魔術を使える。

帝国貴族の帝国貴族たる所以は、その魔力に、あるいはその血に息づく魔術にこそある。

だから、スイールの魔力が強大だと言っても、そんな生活に密着したような術が得意なだけではきつと誰も見向きもしないだろうし、魔術で身をたてることはできないだろう。

(いいんだ。私はじじさまの研究を継いで、古代遺跡の研究をするんだから)

もっとも、スイールは魔術師として生きていくつもりはなかった。親を探すことを拒否したスイールに、老人は、『3年間は自分の死を秘し、その後、小屋を処分して帝都で学ぶように』と言いついた。

その約束の3年がもうすぐ終わろうとしている。

春になったら、スイールは老人の遺言に従って帝都ランティアに向かう予定である。

老人の遺言どおりにランティアで学ぶとすると、スイールには三つの選択肢があった。

『魔術院』か『私塾』か『学院』だ。

『魔術院』は、卒業すれば自動で国家魔術師として認められるが、貴族の子女以外が入学するには、相応の人物の紹介状が必要であり、

かつ、授業料がべらぼうに高い。

『私塾』は、塾を主催する人間によってレベルがさまざまだ。だが、スイールは、じじさま以外の誰かに私淑するつもりはなかった。教師として受け入れることはしても、師匠とするのはただ一人だけ。それがスイールの誰にも言わない誓いだ。

(だから、やっぱり、学院院だね)

学院院は、広く平民にも門戸を開いている総合的な教育研究機関だ。

学べる学問もさまざまだ。魔術に特化している魔術院と違い、農業について研究している者もあれば、医学を研究している者もいる。教師の数も質もさまざまだったが、奨学金制度もあり、自分さえその気になればあらゆることを学ぶことができる。

それだけでもスイールが学院院を選ぶ理由になるのだが、更に、帝都ランディアの学院院にはニーザレスの大図書館と呼ばれる世界有数の図書館が付属している。

(きつと、いろいろな地図とか古文書とかもあるはず！)

卒業のあかつきには、大陸中を旅して古代遺跡の現地調査をするという野望を持つスイールにとって、この大図書館の存在は極めて重要だった。

専門書は基本的に高価だ。無制限に購入できるものではない。

だから、この小屋の書物の大半を読破してしまったスイールは、春になるのを密かに心待ちにしているくらいだった。

(でも、こんな風に考えられるようになったのは、今だからなんだろうな……)

老人を失ったばかりだったら、決してここを出ようなんて考えなかっただろう。

遺言で示された3年という期間は、もしかしたら、スイールが老人の死を少しづつ無理ない形で受け入れる為の猶予期間だったのかもしれない。

北の大賢者の養い子(5)

山の冬は厳しい。

とはいっても、冬籠りのしたくが万全ならばそれほど恐れることはない。

冬が厳しいのは日々の糧を得る手段が限られているからで、食料や燃料の確保がちゃんとできていればそれほど心配することはなかった。

春から少しづつ準備をしていたから、山が雪で閉ざされてもスイールは特にあわてることもなかった。一人になって3回目の冬ともなれば要領もいろいろわかってくる。

(今年は運が良かったし……)

自然と頬がゆるむ。

森の奥深くで半ば自給自足のような生活を送っているスイールだが、勿論自足できないものはある。

それらを購入する為に、春と夏は森で薬草を摘み、これを乾かしたものに調合したものを麓の村やちよつと離れた街に売りに行く。

これはじじさまと一緒に暮らしていたときからの習慣で、スイール達の持つていく薬はよく効くと評判だった。

それから、罨をしかけたり、狩りをして獲った獲物の毛皮や牙なども売る。

ものによっては魔術の触媒となるものや、魔力を込めることのできるものがあり、そういったものは高く売れる。

とはいえ、元々がスイールが育てていた野菜に悪さをする獣を取る罨にかかる獲物だけなので量はたかがしれているのだが、今年は何にも見ることのない純白のウサギが罨にかかって、その毛皮がび

つくりするほどの高値で売れた。

そのおかげでちよつとだけ贅沢をして、スイールは南の国でとれる白い砂糖を買った。

夏になれば森では豊富なハチミツがとれるし、甘草が群生しているところも知っている。それでもやはり砂糖は特別だ。茶色い砂糖に比べて、白い砂糖は雑味が少なく、甘さが濃い。

秋口にその砂糖で作ったベリーのシロップ漬けがそろそろ食べごろになる。

冬に新鮮な果物はなかなか食べられないから、スイールはずっとそれを食べるのを楽しみにしていた。

（おやつにしようか、それとも夕食の後のデザートの方がいいか…）

そう迷うのもまた楽しいひと時だ。

ぐーと小さな音でおながなる。誰も聞いていないのに、ちよつとだけ恥ずかしく思う。

（その前にあさごはん、つと）

手早く暖炉に火をいれた。暖炉に火をいれるくらいの術は呪文も何もなしですぐに熾せる。

暖炉のストーブの上には、いつもスープ鍋がかけてあつて、都度、塩漬け肉を足したり、野菜を足したりしながら、切らさないように煮込み続けている。

朝食はこのスープに卵と青菜を落としたものと、この地方ではムナと呼ぶ小麦粉とデイラ粉を水でこねたものを薄く延ばした薄焼きパンで簡単に済ませる。

冬は野菜が不足しがちだが、野菜好きのスイールは氷室に大量の野菜を保存している。貯蔵のための最適な温度だってちゃんと研究

済だ。

都の方では、密封できる箱に魔方陣を刻んで保存用の箱にしているそうだが、こんな場所では自然がその代わりをしてくれる。最新の道具はなくとも、自分の使える術を工夫すればそれなりに便利に生活できる。

「今日は、屋根の雪を片付けちゃおうかな……」

3日に1度は屋根の雪を片付ける。……もちろん、魔術を使っただ。

これをさばると、場合によっては雪の重みで小屋が潰れる。スィールは魔術でほとんどの日常の大変な作業を代用できるが、それにも限度がある。

例えば、屋根の雪を落としたり溶かしたりをするのは問題ないが、魔術で小屋を強化して雪を片付ける回数を減らそうとするのは危険だ。雪の重みが強化の術の限界を越えた瞬間にぺちゃんこだ。

魔術は万能ではないし、己の魔力や術の限界を越える事はできない。

無から有を生み出すことはできず、有を無に帰す事もできない。

簡単に言ってしまうえば、魔術というのは『自身の魔力で、あるべきもののカタチを変えること』だとスィールは思っている。

自然法則に則り、精霊達の力を借りて発動するのが『魔法』で、陣や呪を組み、あるいは式を構成し、ある種、自然法則に反することを可能にするのが『魔術』だ。

混同されることも多いが、魔法と魔術は似ていて非なるものだ。

とはいえ、『魔法』が使えない魔術師は存在しない。

『魔法』は『魔術』の基礎と言ってもいい。『魔法』を学び、使いこなすことができなければ、『魔術』には到達できない。

実のところ、『魔術師』になれるのは、『魔法士』のうちの一割にも満たない。

魔力がどれほどあり、どれほど自在に魔法を使っても、魔術師になれない者もいる。

そして、一口に『魔術師』といっても、個々の能力は千差万別だった。

魔力の質や量もだが、術との相性の良し悪しもある。それゆえに『魔術』の探求には終わりが無い。基本を修めた後は、自身でそれを深めていくしかないからだ。

自身で深めていくにせよ、同じ師について学んだ者の術は似たようなクセがあったから、その術の構成を読み取れば、だいたいどの系統で学んだのかが特定できる。

現在、魔法・魔術の世界で最も勢力をもつのは、リスティア・スラードを祖とするスラード派だ。

スラード派は、実践魔術を標榜する一派で、そもそもが戦場で利用する集団魔法から発達しているため、その術には攻撃的なものが多い。

逆に、教会の奉仕活動から生まれたアディリア派は、教会魔術を基としている性格上、癒しの術が多くある。

(私のは、じじさまの術だから……)

スィールは何派の術であると呼べるような高名な術はほとんど知らない。

老人は、術そのものを教えるよりも、術を生み出すための根本的な考え方や、魔術言語や古魔術語を理解することに重点をおいてスィールを教えた。いわば、基本を徹底的に仕込んでくれたのだ。

だから、スィールは教えてくれる老人が亡くなった後も、自身で学習を続け、今では幾つもの独自の術を編み出していた。

北の大賢者の養い子(6)

食後の運動にと、屋根にのぼる。

空気は冷たいが、太陽の光は温かい。

目を閉じる。

そうすると、目を見開いているときよりもずっと世界が鮮やかになる。

(この地には、まだ神の息吹が残る……)

神の息吹……濃密な力の塊。それは、ただ純粹な魔力だ。

精霊と呼ばれるほどの意思を持たず、ただそこに在るだけ。だが、それはスィールのような人間にはとても心地よい。

(あれ……?)

何かがちりりと神経のどこかを灼いた。

(何か……)

清冽なこの地に相容れないもの。

そして、怒りにも似た強い感情を発するもの。

スィールは、ためらいもせず、屋根からふわりと飛び降りる。呪文など口にせずとも、風は柔らかく抱きとめてくれる。

(何だろう?)

こんなところにまで届く強い魔力の波動など、これまで感じたことがない。

スィールは風に乗って走った。

「……人？」

森の一番奥の泉。清冽な水をたたえるその場所は、最も力が濃い場所でもある。

そこに、人が居た。

居たというのはあまり正しくないだろう。ぷかりと水に浮いていた。

いわゆる、土佐衛門状態だ。

（転移の術、失敗したのかな？）

神の息吹の残るこの地では、よほどしっかりと術でなければ濃密な魔力に散らされてしまう。術に失敗して森に墜落する人間は何人もいた。

じじ様に言われて、そのたびに救出するのはスィールだったから、そういう事態には慣れている。

いつものように、軽く手を振って風を起し、その身体をすくいあげた。

（雪の上だけど、この際、我慢してもらおう）

ごろんと降り積もる雪の上に転がして、息を呑んだ。

見てわかるほどにぱっくりと開いた腹、背まで達しているのでは

ないかと思うほど無残な傷にスイールは顔をしかめる。

(剣だけじゃない……)

魔法の傷だ、とスイールは思う。

魔術と魔法は違う。

間違えやすいけれど、『見える』スイールにはその違いは顕著だ。魔術の残滓と魔法の残滓は色が違う。

傷は、既に絶命していてもおかしくないほどだったが、血の臭いはほとんどしていなかった。

慌てて呼吸を確かめる。

(……ダメだ)

息はない。

だが、まだ死んではない。

(おかしい……なんで、死んでないんだろう)

男は生きているわけではない。

死んでいないというだけだった。

北の大賢者の養い子（7）

スイールは、男をまじまじと観察した。
年のころは二十代半ば過ぎ。

瞳の色はわからないが、髪ははちみつのような金色だ。
身につけている外套や衣服の感じから言って、かなり裕福な階級に属している。

（たぶん、貴族だ）

「……っ」

男の身体に触れようとして、指先に火花が散った。

「護符？」

意識を凝らす。

男の身体を淡い光が覆っているのが視えた。そして、複雑に絡み合った呪が彼の身体を覆っている。

黄金色に輝く呪……それは、血に宿るものなのだと本能的に理解する。

「初めて見たかも……『血統呪』」

血に宿る呪、それこそが、帝国貴族が守る『血統による固有の魔術の源』だ。

帝国は、その根幹に魔術を置く。

『魔法』しかなかった世界に『魔術』を生み出したのは帝国だった。

魔法と魔術は明確な区分がしにくいことも多々ある。場合によってはその過程や結果も、まったく変わらない場合とてある。が、魔術のほうに、魔法以上に術者の意思が反映されているとスィールは考える。

魔術は、いわば技術なのだ。

人が生み出し、人が磨いてきた技術。

その一つの頂点が目の前にある『血統呪』だ。

そつと呪に触れる。

スィールほどの魔力があれば、どんな呪にもまず侵されることはない。触れた呪のすべてを読み解くことはできずとも、だいたいの構造くらいはわかる。

その複雑かつ膨大な式を持つ呪、さらにその血統呪にまた別種の魔力が絡み合っている。

(うわ、眩暈しそう……)

脳裏に押し寄せてくる光、そして膨大な呪とその式。

「……古き剣……古き血……か」

彼の剣は、特別な剣だったのだと理解する。

古い剣は、特別な謂れを持つ、力あるものがある。『魔剣』とか『聖剣』と呼ばれるようなものは皆そういふ剣だ。剣という無機物に、魂が宿るのだ。

年経た魂は、人格すら持つものがあるという。剣が主を選ぶと言われのはその為だ。

剣は、この目の前の男を主としていた。それは、剣のカタチを失

くし、己が魂をただの魔力と化して主の命を繋いでいた。彼が死んでいないのはそのせいだ。

(……あ)

ゆらりと空気が揺らぐ。

スイールが彼に触れたことで、剣の魂とも言つべき精霊が、姿を現した。

向こう側が透け見えるその姿は、まるで幽霊だ。

そして、幽霊も精霊もたいした差はないのかも、とスイールは頭の片隅でチラリと考えた。

『そこにおわすは、魔術師殿とお見受けいたす』

「……まだ、誓いをたてて3年にしかならないけど」

『年月ではござらぬ。貴女は、魔術師だ』

剣の精は朗らかに笑う。

主の姿を映すのか、剣の精は、色こそ違えど、倒れている男と良く似た容姿をしているようにスイールには思えた。

褐色の肌に、漆黒の髪、そして、瞳の色は黄金だ。

「あなたの名前をお聞きしても良い？」

スイールは注意深く名を尋ねた。

礼儀という意味で言うならば、まず先にスイールが名乗るべきだ。だが、スイールは魔術師で……魔術師にとって、名を名乗るということは特別な意味を持つ。今は、かつてほどの強い意味をもたぬ行為であったが、それでもスイールはあらゆる理由をつけて、決して自分から先に名乗ることはしないに違いなかった。

『我が名は、ガルディア』

「……漆黒の竜王ゲーディア？」

『魔術師殿は物知りだな』

いかにも、というようにガルディアはうなづいた。

(うわー、すごい、すごい、すごい!!!)

漆黒の竜王は、吟遊詩人のうたう『創世の詩』にも出てくる伝説の存在だ。

『ガルディア』とは帝国風の発音で、一般的にはゲーディアとして知られている。

魔術師の端くれとしても、普通の人間としても、それはかなり驚愕する事実だ。

スイールはかなり興奮していたのだが、スイールは感情を表に出すということがよくわからない。なので、実際には目を大きく見開いただけで、ガルディアにはスイールのその驚きと興奮はまったく伝わらなかった。

「私はスイール。スイール・ルウ」

『ルウ……それでは、貴女は光の杖の流れであるか？』

「秘密。だって、あなたは主に話してしまっから」

『そのようなことはせぬよ……。おそらくは、我は、もうこの世界に留まることができぬから』

「？」

スイールはきよとんとして首を傾げた。

ガルディアは、美しい所作で膝をつき、そして、スイールの手をとる。

『我、かつて竜族を統べし者、世界の理を担いし獣。魔導師スイール・ルウに伏して願う』

「ガルディア？」

ガルディアの口から流れ出るのは、神代言語。神と語るための最初の言葉と言われるそれは、最高の魔術言語だ。

じじさまの知識のすべてを継いでいるスイールにはその言葉が理解できる。

(言葉が……)

彼が紡ぐ言葉が、世界に響いている。

『我が命を糧とし、我が友にして我が主、アーネスト・エレザール
「リュカディア」シュレイヤーンを救うことを』

「!」

ガルディアは誓いの証にスイールの手に軽く口付ける。

淡い光。それは彼が己が魂の全てに賭けて誓ったその証だ。

スイールは言葉を失った。

主に全てを捧げるガルディアに驚いたこともあるし、自分に願うというのにも驚いた。

『無理、なのか?』

不安げなガルディアの表情。

不足なのか?と問われたような気がして、スイールはぶんぶんと首を横に振る。

「代償には足りる、と思う。あなたは、濃密な魔力の塊そのものだ
し」

『魔術は、術を行使する代償を必要とする』

これは、世界の律だ。

無から有を生み出すことはできず、有を無に帰することもできない。
ゆえに、それを行うためにはそれに代わる代償が必要となる。
彼を癒すための魔力はガルディアが、自身を捧げると言った。

これ以上の代償をスィールは知らない。

それは、目の前の男を癒すに充分だろうとスィールは判断する。

「……でも、私には誓約があるから」

『世界の天秤を守ること、か……』

「そう」

スィールはうなづく。

魔術師は魔法士と違い、学校があるわけでもなく、公的な資格制
度があるわけでもない。

そのために詐称する者も多いのだが、本当の魔術師というのは実
はとても希少だ。

魔術師とは、師より魔術師としての名を与えられ、自身の杖を得
ることができて初めて『魔術師』と名乗る。そして、普通は名を与
えられる時に必ず『誓約』をたてる。

魔術を使えば魔術師なのではない。

杖を持っていてもそれだけでは魔術師としては認められない。

魔術師とは、世界に『誓約』をたてた者を言う。

「世界の天秤を守ること」は、魔術師を魔術師とする全てだ。

『アーネストの生命を救うことは、世界の天秤を乱さない、と我が保証してもだめか？』

「シュレイヤーンなのにな？」

スイールだってシュレイヤーンという姓が帝国に12ある選定候家の姓だということくらい知っている。

帝国の中枢近くにある者を助ければ何らかの大きな影響があるのではないか、と考えるのが普通だ。

『これは、正妻腹の三男に生まれたせいか、何事にもおおらかで大概のことに興味のない剣術バカでな。政治とは無縁だぞ』

「ずっとそうかはわからないよ。人間は変わる生き物だからってみんな言ってる」

生憎、スイールにはそう言い切るだけの人生経験はない。

サバを読んだとしてもまだたった14年しか生きていないのだ。

ゆえに、スイールは聞いたことのある他者の話を総合してそう口にする。みんなというには、いささか数が少なすぎるが。

『確かにそうではあるな』

(どろしよじ……)

「世界の天秤を守る」

それは、世界の均衡を守るという意味だ。

過去には、世界を壊さなければ何をやってもいいと解釈して好き放題した男もいると聞いた。

(でも、あれは見本にしちゃいけないって言われたし……)

スィールは悩む。

（力は、ある……）

ガルディアをちらりと見る。

主である男の生命をつなぐのに、その存在の半分以上の力を費やし、剣としてのカタチをもちや失ってはいても、おそらく足りるだろう。

（技も、ある……）

スィールの中に息づく術がある。

できる、という確信がスィールにはある。

けれど、見ず知らずの、その為人もよく知らない帝国の大貴族の息子などを助けてしまったら、世界を変えてしまうことになるのではないかと考える。

（でも、ガルディアがいて……、そして、私がいたというのは、彼が最高に幸運だっただけなのかも……）

スィールは、年齢以上に聡明な子供だ。

魔術師である以上、思慮深いほうだと言ってもいい。

そして、その基本はかなりのプラス思考だった。

（そうだよな。だから、助けてあげて、それで、悪いことしないように見張ればいいんだ！）

どうせ自分は春から帝都に行くのだ。

この男もきつと帝都の人間だろうからちよつと良い、とスィール

は考えた。

「……闇に煌くはじめの竜よ、我が名はスィール・ルウ。北の大賢者の養い子にして、その全てを継ぎし者。そなたの望みを叶えよう」

思いつくと、それがものすごい名案のように思え、自然、にこりと笑顔がこぼれる。

笑うと、スィールは可愛らしい。普段無表情な分、余計にそう見えるのかもしれない。

ガルディアははっと目を奪われ、そして我にかえると再びその手の甲に口付ける。

『貴女に、我が最高の感謝を』

実際のところ、ガルディアとて半信半疑だった。

魔術師の技は年齢によらぬ。ましてや、ルウを名乗る魔術師なれば、幼くともそれなりの術師であろうとわかっている。更にスィールが内包する、強大な魔力も感じ取れる。

だが、それでいてもスィールは幼い。

これほどに幼い魔術師をガルディアは見たことがなかった。

「はじめます」

だが、スィールがそう告げ、そして、その手を掲げると、世界が柔らかに震えた。

北の大賢者の養い子（8）

スィールの手に、杖が現れ出でる。

ガルディアは、まずその杖に驚いた。

「妖精族の……」

一口に杖と言っても、その形状は千差万別だ。

一般的に人々が思う杖というのは木で作られた歩行の助けとなる棒状のものだろう。だが、魔術師の持つ杖というのは魔術の基点となるべきものであり、歩行の助けとなる道具ではない。

その為、実際のところはカタチはどんなカタチでも構わない。また、素材も多種多様で、木でつくられたものもあれば、金属で作られたものもある。

ようは、その魔術師が一番力を発揮できる素材、形状であればいいのだ。

杖の条件はただ一つ、魔石を核とだけしていることだけだ。

「友達がいるの」

スィールは、その妖精族の友達と二人で杖を作ったのだと言い、その相手を思い出して小さく笑った。

『妖精族に、友達？』

「うん」

躊躇う様子もなく普通になつづく。

「ヴィ・デイルー、知ってる？」

『生憎と知らぬ。私の知る妖精は鏡の森のディーザ・リユーンが血族のみ』

「でいーざ・りゅーん？会った事ない」

『で、あろう。あれは人間嫌いだ』

「妖精は、みんな人間嫌いだよ」

事も無げにスイールは言った。

妖精族は基本的に人間を好まない。

長命種である妖精族にとって、短命種の人間はあまりにも儂く、それ以上にいるさく騒がしいからだと言われているが、そればかりではない。

繰り返された争いの歴史が、妖精と人とを決定的に隔てたのだ。

『そなたも人間であろう』

「スイールはスイールだって。ヴィ・ディルはそう言うよ」

スイールはくるくるとその不思議なカタチをした自分の腕くらいの長さの杖を回す。

妖精族の造形物であると一目でわかる、曲線を多用したその形状を説明するのは困難だった。

金属のような光沢を持つ不思議な質感。まるで流体をそのまま杖としたかのような形状をしている。

『それは随分と特別扱いされたことだ』

「仲良しだもん」

スイールは嬉しそうに言った。

だが、本人が思っている以上に、妖精族に『友』と呼ばれることは重い意味を持つことをガルディアは知っている。

長命種である妖精族は、長命種であるがゆえに繁殖力が弱い。
長く生きていく為に必要だからなのか、彼らは非常に安定した精神を持ち、その為に人のように恋をしたり、誰かを熱烈に愛したりという感情に流されることがない。

そんな彼らにとって『友』とは、最上級の存在だ。
血を分けた家族よりも大切だと認める至上の存在。
それが、妖精族にとっての『友』だ。

「……本当に、いいの？」

『何がだ』

「ここで、終わること」

『私の肉体はもうとうに滅んだ。ここにあるは、魂と記憶の一部だけだ』

自身の肉体が失われた瞬間を、ガルディアは覚えている。

神と人との間に生まれし子にその首を落とされた。そして、次に目覚めたときは、自身は剣に封じられていた。

竜身であった時に比べ、その力はいえぬほど減じられていて、苛立ちを覚えることもあったが、そのうちに忘れた。

剣であることにも慣れた。

それほどに長い長い時が流れ、いつしか、『魔剣』と呼ばれ、その身は何人もの人手に渡ってきた。

最も、彼が認めるほどの使い手はそれほど多くはない。

アーネストは久しぶりに彼が認めた使い手である。

「でも、ガルディアは、ガルディアだわ。その身が、剣でも、竜でも、ガルディアっていう意思があればそれがすべてだと思う」

スィールは違うの？と小さく首を傾げる。

『……違ういな』

ガルディアはおかしかった。

気が遠くなるほどの時間を経た身でありながら、こうして、まだ幼い子供といってもいいほどの年齢の人の子にさとされ、それに説得されてしまっている己がひどくおもしろかった。

こんな新鮮な気持ちになった事など、久しく覚えがない。

『そなたのような珍らかな存在と出会えたのに、ここで終わるのはひどく残念であると思うよ』

目の前のこの若い魔術師がどのような道に行くのか、何になるのか、ガルディアには興味があった。

「じゃあ……じゃあね、私の守護者になるといいと思う」

スィールは、にこやかに提案する。
目が期待できらきらと輝いていた。

『守護者？しかし……』

ガルディアは、それほど心が揺れる提案をされたのも初めてのことであった。

魔術師の守護者とは、魔術師とその命を共にする存在だ。
術を行使している最中、無防備になる魔術師を守護するのが役割で、共に生き、共に死ぬ。

幻獣種や精霊種の高位の存在が求められることが多く、友愛の絆と聖約と呼ばれる誓言によって結ばれる。

『それは、とても素晴らしい申し出だとは思いますが……しかし、私はアーネストを救いたい』

アーネストは、ガルディアをただの剣だと思っている。

素養がありながらも、それをまったく磨いていないアーネストは、ガルディアの存在にすら気付いていないのだ。

もっとも、こんなことでもなければ、剣に封じられていたこともあり、姿を現すこともなかっただろう。

『いい加減で、女好きで、どうしようもないが、気持ちの良い男なのだ』

我を友と呼び、幾多の戦を共に戦ったのだ、とガルディアは静かに言う。

「全部は無理かもだけど、足りない分は、私が埋めるよ」

事も無げにスイールは言った。

『なぜ、そこまで？』

アーネストを助ける、という一事ですら、スイールにはボランテイアのようなものだ。

なのに、自身の魔力ないし、それに代わる代償を差し出してまで、ガルディアの存在を残そうとする。

「私はこの森しか知らない。でも、ガルディアはいろんなところを知ってるでしょう？……それに、一人じゃ淋しいもの」

ガルディアがいてくれれば、どこに行ってもきつと淋しくないと

思うの、とスミールは笑った。

「だから、私と一緒にいこうよ。……世界中を見る」

その屈託のない誘いに、ガルディアは痺れた。

北の大賢者の養い子(9)

「はじまりは、真白き光>イリユー・ルーディア<……」

その唇から滑らかに流れ出るのは、神代言語だ。人には難しい発音を、スイールは難なくこなす。

だが、スイール自身はさほど難しいとは思っていなかったし、難しいとされていることも知らなかった。

そもそも、スイールは、神代言語を『言葉』として最初に覚えた。いわば、神代言語が母国語であり、自身の基本言語である。

はじめ、じじ様とスイールの会話は神代言語で行われていた。これでは、社会復帰ができなくなるとか何とかじじ様が言い出して、ある時期から、大陸公用語も使うようになったが、スイールの場合、大陸公用語の方がずっとあやしい。

神代言語は、はじまりの言葉であると言われる。

神とすら意思を交わすことのできるそれは、いわば、広義の意味での世界共通語だ。

妖精族をはじめとし、精霊族や数多の幻獣達にも通じる。ゆえに、魔術師はまず神代言語を学ぶことから勉強をはじめめる。

単に、世界共通語というだけでなく、神代言語は、魔術言語としての側面を多分に持つ。それが世界共通語であった古と違い、今では、言葉そのものが魔術の一種となるほど。

同じ呪文構成でも、それが神代言語によるものだというだけで威力が増すのだ。

「光の中で輝く光>ルーディアス・エディア・ルーディア<、闇

を焦がす黄金>ニユイーシアス・ルディエ<の……」

スイールは、歌うように呪を紡ぐ。

手にしている杖は発動状態にあり、先ほどとはその形状をまったく異にしていた。

流体のように見えていた形は、今は永遠を意味する二重螺旋を描き、複雑な造形でもって空に伸び、スイールの頭一つ分高いところで緩やかな弧を描いている。

それは、スイールの腕の中に抱きしめられるようにして存在し、同時に、その伸びた杖はスイールを守るように広がっている。

それはひどく不思議な光景であり、その光景を言い表す適切な言葉をガルディアは知らない。

だが、その美しさを誰かに伝える言葉を自分を持たぬことを、ガルディアは少しだけ口惜しく思った。

(紛れもなく、この子供は、ルウの名を継ぐ魔術師であるのだ……)

どれほどに幼くとも、目の前の子供は魔術師だった。

かつてガルディアが肉体を持って生きた時代であっても、これほどの魔術師がいたかどうかと思えるほどの。

ぞくりと、背筋に震えとも喜びともつかぬものはしる。

ガルディアは、もはや、アーネストの生命の心配をまったくしていなかった。

澄んだ柔らかな声が、歌うように術を紡ぐ。

その杖先からこぼれおちる光が呪を描き、静かに世界に働きかける。

幾つもの音と、光と、それによって紡がれた呪が幾重にも重なり、

アーネストの身体を包み込んでいる。

スィールは息を整え、そして、歌い始めた。

世界に捧げる 輝ける生命の祷告 じゅかを。

歌を聴いていた。

歌詞は聞き取れないのに、それが歌であることだけはなぜかわかった。

「目、覚めた？」

アーネストが最初に見たのは、夕闇を思わせる紫の瞳。

それから、次に見たのはパタパタと飛ぶ羽の生えた不思議な生き物。

「……君は？」

意識がぼんやりとしていた。

その問いに、子供は軽く首を傾げ、謎の生き物の方を見る。

パタパタと小さな羽で飛ぶその生き物は、子供の肩にとまった。

がりがりで痩せっぽっちの子供には、それがひどく重そうに見えた。

「……人に名を問う時は、まずは自分が名乗ってから」

子供は、それが当たり前！というように、ぶっきらぼうに言う。

「ああ……すまない。私は、アーネスト・エレザール・リユカディ
ア・シユレイヤーンという。帝国の黒竜騎士団に所属している軍人
だ」

「こくりゅつきしだん？」

子供は聞き慣れない、というように首を傾げる。

「帝都を守る騎士団の名だ」

「ここがどこかはわからぬが、随分な田舎なのだろうとアーネスト
は推測する。

帝都やその周辺に住んでいるのなら、黒竜騎士団の名を知らぬ人
間はまずいない。

どんな子供だって、帝都の治安維持を担う黒竜騎士団の名とその
主だった騎士の名くらいは知っているものだ。

「そう」

子供は、特に興味がなさそうになついで、そして告げた。

「私はスイール。スイール・ルウ。」

「……………」

アーネストは、スィールの言葉を待つ。

(田舎の子供の割には、整った顔立ちをしているんだな……………痩せてるが)

「……………」

(黒髪に紫の瞳というのも悪くない……………頬がもう少しふっくらすればな)

「……………」

(もう少し太らせなきゃ、だめだろ、これ。栄養失調じゃねーの)

「……………」

目の前の子供が、軽く首を傾げる。

「……………なあ」

たまりかねて口を開いた。

「なあに？」

「……………それだけか？」

最高級の紫水晶のような瞳が、他に何を知りたいのかというようにきょとんと見開かれていた。

北の大賢者の養い子（10）

「つまり、死に掛けていた俺を助けたのは、君、ということだな？」

アーネストを助けたのは、スイール・ルウという子供だった。

堅苦しく話すのもどうかと思ったので、言葉は少し砕けている。

元々、アーネストは儀礼やら言葉遣いやらにうるさい方ではない。

驚くべきことに、この目の前の子供は、3年前に祖父を亡くした後、この山奥の小屋で一人暮らしをしているのだとアーネストに告げた。

（よくこんな山奥で一人……いや、山奥だからこそ、か）

よくぞ食料を得る手段があった、とアーネストは感心する。

それと同時に、こんな子供が売られもせずは無事でいられることにも。

きつと、滅多に人など踏み入りそうにもない山奥だからこそ、この子供が一人で暮らしていられるのだとアーネストは思った。他に人がいなければ、騙されることも、大人たちに食い物にされることもない。

「スイール」

君、という呼び方は嫌らしく、子供は、名を呼ぶように促す。

「すまない。……死にかけていた俺を助けたのは、スイールなんだな？」

アーネストは慎重に確認した。
彼にとってそれはとても重要なことだった。

「そう。私が術を使った」

こくとスィールはうなづく。

「それと、「死にかけてた」じゃなくて、「死んでなかった」だけ」

運が良かった、と大真面目な表情で付け加える。

アーネストは知らぬことだが、ガルディアによって仮死状態になつていなければ……それすらも、奇跡のような偶然によるものだったが……たとえスィールとて、どんな代償があつたとしても助けることはできなかっただろう。

何も知らないアーネストは、あんまりにもあつさりと自分がほぼ死んでいたのだと言われて、頬を軽くひきつらせた。

（だが、運が良かったのは確かだ……）

助かるとは思わなかった。

正直なところ、我が事でありながらそれがアーネストの本心だ。

護国騎士の剣は、魔術兵装の一種だ。

使い手によつては、その一振りで山を砕き、地を割るとも言われるほどの威力を持つ。

それで貰かれた己の命がこうして今も在ることは奇跡に等しいと思つ。

「……スィールは、治癒の術が得意なのか？」

「別に」

ふるふると首を横に振る。まるで小動物が何かのような仕草だと思ひ、微笑ましく思う。

「でも、術で治したって言っただろっ？」

「私は、魔術師だから」

大概のことは術でできる、スイールは淡々とした様子で告げた。

「……魔術師？」

アーネストは思わず声をあげた。

思っていた以上にその声が響いて少しだけ驚く。

聞こえるのは川の音と、時折、甲高く響く鳥の声くらいのもの。

アーネストは、そのどちらにもすぐに慣れてしまいまったく気にならなくなっていたので、自分の声が必要以上に大きく聞こえた。

「そう」

「真正正銘の魔術師？」

「三年前に誓いをたてたばかりだけど」

「……すごいな」

アーネストは、心底、感心した。

「そうかな？」

「……魔術師の誓約はこの世界との誓約だ。き……スイールの誓約を世界が認めたのだろっ？」

「そう」

「ならば、それは誇るべきことだろっ」

『世界と誓約する』と一口に言うが、誓約を立てることが既に魔術的行為である。

それは、魂に刻まれる誓約であり、成立すること自体が最高の魔術とみなされる。

そして、認められた瞬間から、魔術師は誓約に反することは絶対に出来ない。

(それは、『世界』と交わす契約だから)

それに反した瞬間、その魂は消滅する。

欠片も残ることなく、転生の環に入ることもない完全な消滅……死後、エシュリーダ女神の御手に抱かれて魂は浄化され、転生の環に入り再び生まれ来るのだと信じられているこの世界において、魂が消滅するというのは、単なる刑罰を越えたところにある絶対の断罪だ。

「ああ、そうだ。十歳にも満たない身で……三年前なら尚、幼かつただろう。きつと、俺が知る限り、最年少の魔術師だ」

歴史上には幾多の例外がいるが、それは例外中の例外だ。

エシュリアは、魔術を礎に建国された帝国である。なので、かつて、エシュリアの皇家には、生を受けた瞬間から、魔術師と呼べるような規格外の子供が生まれることがあったともいうが、現在では、魔術師自体がそれほど多くはない。

「??????」

スィールが首を傾げる。

「そんなに幼いのにたいしたもんだ」

褒められることに慣れていないのだろうか?と思ったアーネストは更に付け加える。幾分、リップサービスも含まれていた。

「幼い、幼いというけれど、何歳に見えてる?」

不思議そうな表情でスイールが問う。

「十歳くらいだろうか?」

スイールはふわりと笑った。

(……笑うと、可愛いな)

アーネストは、のんきにそんなことを思う。

「もう一回、言って」

そんな風に言われると、何かねだられているようで悪い気がしない。

「十歳くらいだろうか?」

既に、スイールに対する庇護欲にも似たものが、アーネストの中には芽生えていた。

「そう……そんなに小さく見えるんだ」

(……あれ?)

何か違う、とアーネストの勘が、警鐘を鳴らしていた。

「気にすることはないぞ。子供なんだから小さくてもこれから成長する。男の成長期は、だいたい、十四、いや、十五歳を過ぎてからだからな」

アーネストは笑顔を見せて言った。もちろん、フォローしたつもりだった。

だが、そのフォローはまったく的外れだったらしい。

「ばかつ」

まったく構えていなかったアーネストの顔面をクッションが強襲し、怒つたらしいスミールは出て行ってしまふ。

「……あれ？」

どこが間違つたのか？と首を傾げたものの、アーネストには思い当たる節はまったくくない。

(ばか、か。……何か、可愛いな)

そんな風に思ってしまうのだから、始末に終えないと自身でも思う。

だが、こういう場合、異母弟やら、同母兄やらの場合は、「死ね」の言葉とともに、剣やら短剣やらが飛んでくる。

クッションというのかわいければ、「ばかつ」というその言葉やその響きもかわいかった。

異母、同母合わせても兄弟は男ばかり、しかも、武をもって帝国を支える一族ともあれば、自然、家内は殺伐としている。

そんな中で育ったアーネストにしてみれば、スィールのそれは『可愛い』以外のなにものでもなく、更に、庇護欲めいたものをそえられる結果でしかなかった。

彼の乳兄弟であるクライフがここにいたらきつとお決まりのセリフを言ったに違いない。

眉間にシワをよせて、『また、アーネスト様の悪い癖が……』と。

そう。アーネストは『小さくて可愛い』ものが好きだった。

それも猫かわいがりして、可愛がる対象からはウザがられる。

子猫、子犬、子ウサギ……アーネストが可愛がってきた対象は多岐に渡る。

……人間は、初めてだった。

「もうすぐ14歳なんだから」

まだ怒っているんだぞ！という表情のスィールだったが、アーネストには、そんな様子も子猫が毛を逆立てている時のような可愛らしさしか感じられない。

勿論、それを口に出さないだけの良識はある。

「それは、すまなかつたな」

だが、それにしても幼い、とは口には出さなかった。

十歳ももつすぐ十四歳も、アーネストの感覚からすれば大差なく『子供』だったが、それは口にしてはいけなйдらうことくらい鈍いと言われるアーネストにも察しはついていた。

じじ様とスイールが呼ぶ相手は、どうやら実祖父というわけではないらしい。

3年前、保護者だったその老人が死んだときから、スイールは誰に庇護されるわけでもなく、一人で生きてきたのだという。そうやって、一人で生きてきた者を子ども扱いするのは確かに失礼だろう。

(だが……)

アーネストは真面目な顔をして、スイールに向かう。

「スイール」

「何？」

「真面目な話をしてもいいかな」

「……どうぞ」

きょとんとしながらも、うなづいて先を促す。

「まずは生命を救われたことに礼を言う」

ありがとう、とアーネストは頭を下げる。

「……どういたしまして」

スイールも頭を下げ、肩のところにとまっていた謎の生き物が膝の上に落ち、それを抱きとめる。そして、大切そうに優しい手つきでそれを抱きしめた。

アーネストは寝台から起き上がり、そして、寝台の脇の椅子に座っているスイールの前に膝をついた。

「……………アーネスト？」

「我、アーネスト・エレザール・リュカディア・シユレイヤーン、十二候家の候子にして、黒竜騎士たる者。我は、我が命を救いし魔術師スイール・ルウにこの生命を捧げる。我が真名はヴィルディア。魔術師スイール・ルウ、どうか我が名をとられよ」

きよとんとした表情が、更に困惑を増す。

『認めるが良いよ』

声がした。

柔らかく響く落ち着いた男の声。

「……………でも、ガル」

『認めてやらねば、彼が困る。……………いい加減なところもあるとはいえ、彼は騎士だ。騎士は、生命の借りは生命で返す。それが掟。彼の真名を受け取るが良い』

声は、スイールに抱きしめられた謎の生き物から発せられていて、アーネストは軽く目を見開いた。

「……………わかった」

スィールはこくりとうなづく。
真剣な表情。不意に、既視感がおそった。

(どこかで見たことがある……?)

誰かの面影が重なった。

それが誰かを思い出せないまま、スィールの発する言葉に意識が奪われる。

「エーデ・ヴィルディア、そなたのすべては、光の杖の担い手たる
ヴィラード・ルウが後継 スィール・ルウが物。今、この時をもち、
汝が生命は我が物である。我が命なくして、その剣ふるうこと許さ
ず。我が許しなくして、死すことあたわず」

流れ出す誓いの言葉は、神代言語によるもの。選定候家に生まれ
たアーネストは当然それを学んでいる。自身ではほとんど発音でき
ずともその意味するところは理解できる。

元より、騎士による『生命の誓い』は神聖なものである。
だが、今、彼が誓うこれほどに神聖な誓いはないだろう、とアー
ネストは感じた。

神代言語による誓約など、古の物語の中の騎士のようだと感じ、
まるで子供のように自分がそれを喜んでいることに気付いた。

スィールは椅子から立ち上がる。そして、そっとアーネストの額
に口付けた。

口付けられたその部分が熱く、同時に、その部分から熱が生まれ
る。

それはまたたくまにアーネストの全身を侵し、そして、それまで

のすべてを壊してゆく。

(ああ……)

これは、歓喜だ、とアーネストは思う。

身体に、心に、歓喜が満ちてゆく。

細胞の一つ一つ、あるいは、神経の一つ一つにいたるまで喜びが浸透してゆく。

「アーネスト・エレザール」リユカディア「シュレイヤーン、そなたを我が騎士として認めます」

涼やかに響くその言葉に、アーネストはうつとりと聞きほれた。

この日、アーネスト・エレザール「リユカディア」シュレイヤーンはスィール・ルウの騎士となった。

北の大賢者の養い子（11）

「いろいろと聞きたいことがあるんだが……」
「どうぞ」

気負って尋ねるアーネストをスイールは不思議そうに食卓に誘う。
ちようど夕食の時間だから、食べながらということらしい。

夕食は簡素なものだった。

干し肉が少しと野菜がたっぷり入った汁に蒸した芋、まるやかな
チーズに野苺の砂糖漬けを添えてあるのがささやかな贅沢なのだろ
う。

そして、きちんと食卓に席をしつらえられた謎の生き物の前にも
同じものが並べられていた。

別に、謎の生き物と自分の扱いが同じだからといって拗ねるなん
てことはない。そう、何といてもアーネストは成人をすぎたれっ
きとした男であるのだから。

「その、まずはそのことなんだが……」
「ガルのこと？」
「あ、ああ」

見れば見るほど不思議な生き物だった。その目の瞳孔の形からい
って、爬虫類には違いない。トカゲというわけではないが身体は鱗
で覆われている。

（いったいどういふ生き物なのか……）

黒光する鱗は金属のような光沢を帯びている。そして、おそらく

は金属以上の硬度を持つだろう。

(まるで、竜のような……)

そう考えれば、そのカタチも確かに竜にそっくりだ。竜を手のり……というか抱きしめられるぬいぐるみサイズにすると、ちょうどガルになるだろう。

器用そうな前肢としっかりと地を踏みしめる後肢をもち、開いた口の中には鋭い歯が並んでいる。

(あるいは幻獣種か……)

普通の獣と違い、存在それ自体が魔的要素を持つ生物を総称して幻獣種と言う。一般的によく知られる竜や一角獣も幻獣種の一つだ。とかく幻獣種には不思議な生き物が多い。

(だとすれば、あんな羽で飛べることも納得がいく)

ガルの羽はそれほど大きくない。あの羽で飛ぶことは、生物学上の見地から言えばありえない。

だが、幻獣種ならば話は別だ。例えば、天虎などは、翼も持たぬのになぜか空を翔ることができる。

幻獣種と一般の動物はそれほどまでに違う生き物で、普通の生物とは一緒にできない。

「ガルは私の守護者>ディ・ルターザ<」

「ディルターザ？」

「そう。知ってる？」

「魔術師を守護する生き物、だったか？」

アーネストはかつて学んだ教科書の一文を思い出す。

「うん。……使い魔と混同されることが多いけど、守護者と使い魔は全然違う」

どういつ風に違うのかと問いたかったが、スイールがいただきます、と手を合わせ、あまりにもおいしそうにスープを飲むのでやめた。

代わりに自分もそれに習って手を合わせ、そのスープを口にす。

「……うまいな」

薄い塩味だけのスープだと最初は思ったが、煮込まれることで干し肉と野菜の旨みがひきだされていて、口にいれると何とも言いがたい野菜本来の豊かな味が感じられた。

アーネストは十二候家の子息であるので、最高に贅を尽くした食事をすることも多かった。

だが、今この瞬間に口に行っているスープほどおいしいものを口にすることはないと感じる。

「うん。おいしい」

スイールの食べ方は一言で言えば、丁寧だ。

しっかりと味わいながら、楽しみながら食べる。

それを見ているだけでも心楽しく感じられたし、自分も一緒に同じものを食べているのだと思うと、一層おいしく感じられた。

「誰かと一緒に食べると、おいしいって気持は倍になるんだって」

「じじ様がそう言ってた意味、今わかった」とスイールが柔らか

く笑みをもらす。

「それは？」

どういう意味なんだ？と首を傾げる。

「あのね、一人でもおいしいものはおいしい。……でも、おいしいものをおいしいねって言い合って食べると、もっとおいしく感じるなって思ったの」

あまりにもストレートなその言葉に、アーネストは気恥ずかしさを覚える。

「……ガルがいたんじゃないのか？」

スィールにとって、ガルは単に守護者を越えた存在だろうとアーネストは思っている。

自分が使役するモノというのではなく、もっともっと大切な分がちがたい存在なのだ。

この謎の生物とスィールの間にはそういう絆が感じられるのだ。

「ガルとは契約したばかり」

「……そうか」

ああ、と気付く。

スィールは一人で生きてきたといったのだ。ガルがいれば、きっとそうは言わない。

だとするならば、文字通り一人であったのだ。

その孤独を思い、アーネストは何となくしんみりとする。

だがそれと同時に、決してもう一人にしたりはしない、と心の中

で思う。

(もう、俺の主なんだから)

彼が常に傍にいて守ることに不都合はまったくない。
むしろ、主を一人にすることこそ罪深いことだろう。

「ガルは人参、気に入ったの？」
『ウム。甘いからな』

滑らかな大陸公用語だった。

不思議と響く声は、壮年の男の声のようにも聞こえるし、青年の
声のようにも聞こえる。

目を閉じて聞けば、声の主が人ではないとは思わないだろう。

「……あのな、ガルは何ていう生き物なんだ」

「ガルは、ガルだよ」

「いや、生物の……種族的な意味で」

んー、とスィールは考え込む。

「それは、ガルが私の守護者になる前ってことだよな？」

「そうだ」

「んー、ガルの一番最初はね、竜」

スィールは何でもない口調でさらりと言った。あまりにもさらり
と言ったので、その重大さをあやつく聞き逃しそうになる。

「そうか、竜か。……え？竜？」

「そう。竜」

スイールはその様子に気付かずにこくりとうなづく。

「竜……」

アーネストは、スープ皿に顔を突っ込んで干し肉にかぶり付いて
いる生き物をまじまじと見つめる。

「……これは、卵から孵ったばかり、とか？」

「ううん。このサイズには頼んでなってもらったの」

だって一緒にいたいんだもん！とスイールは言い切る。

「ガルの本来の大きさだと、この小屋よりも大きいから」

スイールは、これはずっと一緒にいる為のジャストサイズなんだ
よ、と胸をはる。

「……本来の大きさって？」

「アーネスト、竜、知らないの？」

竜ってこの世界でもかなり大きい生き物なんだよ、とスイールは
言う。

「いや、知ってる。知ってるんだけどな」

ただ、認めがたいだけである。

竜とは、この世界の生命の頂点に位置する生物だ。

……それが、人語を解するとはいえ、食卓に座り込み、人參にかじりついている。

これを認めることは、アーネストの中で何かを失うことになる。

「……ガルは人身をとることができるのか？」

おそろおそろ尋ねた。

竜にもいろいろな種がある。

人語を解するものはもちろん高位に属する。だが、竜の中で最高位に位置するのは、竜身だけでなく人身も持つ古代種とその眷属だ。

『勿論だ』

ガルは、我はかつて偉大なる竜族を統べし身であったのだぞ、と胸をはった。

「……これが、竜」

それも、竜族の王であったという。

別に、疑っているわけではない。

ただ、認めがたいだけだ。

目の前の生き物は、スイールの手から甘いマディアの実を受け取り、嬉々としてかじりついた。

その姿は、あの強大な……魂の底から震えるほどの……万物の頂点に立つ生命体の、その威容のカケラも感じられない。

「ちがうよ、ガルはガル。かつては偉大なる古代竜の王であったけれど、今は私の守護者」

そうだよね、と、言うスィールに、ガルはにっこりと笑って……
アーネストは不思議とそれが笑っているのだとわかった……言った。

『勿論だとも。世界のすべてよりも大切な我が主よ』

その言葉に、軽い苛立ちを覚える。

アーネストは、その苛立ちが何であるか、まだ気付いていなかった。

北の大賢者の養い子（12）

（困った……）

スィールは、真剣に悩んでいた。

アーネストが目覚めて一週間あまり、思っていた以上に食料の減りが早かった。

（雪が溶けはじめるのは、まだ2ヶ月以上も先なのに……）

スィール一人分だけだったら、節約すれば半年はもつくらいの食料だったが、たった1週間でこの冬を越せないかもしれないと心配しなければいけない状況になっている。

（男の人って、いっぱい食べるんだなあ……）

アーネストの食事風景を初めて見たとき、スィールは思わずぽかんとし、次いで、しげしげと観察してしまった。

それくらい、勢いがすごかった。だからといってがつついていっている感じはしなくて、見ていて気持が良かった。豪快な食べっぷりだとも思った。

裏で罨にかかっていたアヴェラ鳥の蒸したものを出した時などは、肉が胃におさまっていくその勢いのすごさに思わず見入ってしまったほどだ。

（じじ様とは違うんだ……）

老人で、更には、限界まで極めた魔導師であったスィールのじじ様は、あまり食べ物を口にしない人だった。

魔導師は、魔術師以上にずっと直接的に世界の一部なので、実際にはまったく食べなくても良いのだよ、と笑っていたが、一人だとスィールが何も食べないので、いつも「スィールと食事をする」為だけに自分も一緒に食べていた。

そんな老人と比べる方が間違っているのだが、スィールは比較対象とするべき人間を他に知らないので仕方がない。

（ちょっと、おもしろい）

じじ様のいない淋しさを埋められるわけではない。

けれど、アーネストが居るから、淋しいことを忘れる時間が多くなったと思う。

大好きなじじ様を忘れられるはずがないが、ただ、じじ様がいなくても笑えるようになった。

誰かが傍に居る、ということに、慣れつつある自分が少し怖い。

（アーネストはじじ様よりうるさいし……）

老人は、わりと放任主義だった。

放置、というわけではない。スィールはどこにいても、いつもじじ様が見守ってくれていることを感じていた。

だが、ぎりぎりまで決して手は出さないし、これはダメとかあれはダメとか、何かを禁止されたこともなかった。

難しい術を練習するときだけは、必ず声をかけるようにと注意をされたことはあるが、毎日の細かなことに何か言われたことはなかった。

だが、アーネストはひどく口うるさい。

（もっと食べる、もっと食べるって、いっつも！）

自分がよく食べるからって、スイールまであんなに食べられるはずがないのである。

スイールは自分がおいしく食べられる量だけで充分だ。人より少なくなつて、まったく問題ない。

食事時には三割増しうるさくなるアーネストを思い出して、スイールはちよつとだけ顔をしかめた。

『どうしたのだね、我が主よ』

「ガル！おはよ」

ぱったぱつたと少し間の抜けた羽音をさせてやってきたガルディアはちよこんと肩にとまった。

見た目どおりの重さがかかっていないので、スイールにはほとんど重さを感じない。

『おはよっ』

ガルディアにとって、この新たな主は何とも愛おしい存在だった。言葉を交わせるからということもあるかもしれないが、それ以上にスイールは特別だった。

(心が、揺れる)

とうの昔に失ったと思っていた心が、まだ自分にもあるのだと気付かされる。

スィールが自分の感じ取れる範囲にいなければ、きっと自分は、生まれてはじめての恐怖というものを感じるに違いないとも思う。

「あのね、どうやってたらアーネスト、うるさくなくなるかなあ」
もっと食べるって言うの禁止にしようかな、とつぶやく。

『ああ、あれがあんなにうるさい男だとは我も思わなかった』
ガルディアは小さく笑う。
そんな他愛のない言葉のやりとりが楽しい。

そう。楽しいのだ。
そんな風を感じたことなど、これまで、一度たりともなかった。

彼は、この世に生まれ出でた時より、王であった。
竜を統べし者……かつて、それは世界の全てを統べし王と同義であった。
彼に手に入らないものはなく、彼にできぬことはなかった。

だが、今だからこそ思う。
あの時の自分は、ただ在っただけであったと。
『漆黒の竜王』その名を持つだけの、ただの存在であったのだと。

『ああいつのを小姑というのだ』

「小姑……」

『そうとも』

ふーん、とスィールは感心したようにうなづく。
それはスィールの知らない単語だった。

これまで剣に封じられていたガルディアは、何人かの主を持った。
剣であったからして、そのすべてが武人だ。一人の例外もない。
選ぶ基準は一つだけ。

彼を扱うにたる腕があるかどうか、だ。
戦場で共に戦うにふさわしい主。それが、これまでの彼の主であった。
た。

だが、スィールは違う。

(守りたい、と思うのだ)

だから、新たなカタチを選べることになった時、剣に戻ろうとは思わなかった。

どんなカタチでも良い。彼が彼の意味でスィールを守れるカタチになりたいと思った。

(我の一番の願いは、既に叶っている)

守護者と魔術師は、同じ命を生きる。だから、彼は決してスィールと分かたれることがない。

だから、彼が願うのは、スィールを守ることだ。
その為にかつての姿を取り戻したいと思い、そして、彼の対となるべき魔術師であるスィールには彼のその願いを叶えるに足る魔力があった。

スィールは、巨大な竜身ではいつも一緒にいられないと言って小さくなることを願ったので、結局のところ今の姿に落ち着いたが、今のところ特に問題はない。

この姿であつても、ブレスは吐けるし、意思一つで竜身も人身にも変じることができる。何よりも剣であつた時と違い、魔法が使えるというのも大きい。

彼が使う魔法の為の魔力はスィールのものだったが、おそらく、スィール自身が魔術を使い、彼が魔法を使ったとして、よほどのことがない限り、その魔力が枯渇することはあるまい。

(よく考えると、恐ろしいほどの魔力量だな)

竜を基準に考えてさえも類稀なと思えるほどである。人の身であることを考えると、空恐ろしいものがあつた。

(だが……ルウの名を継ぐのであれば道理やもしれぬ)

『ルウ』それは、特別な意味を持つ名であるのだから。

「あのね、今日はね、デヤーゴのシチューだよ」

肉も魚もさほど好きではないスィールの食事は、基本が菜食である。

デヤーゴというのは、芋の一種で甘みが強い。ほぼ一年中とれるし、痩せた土地でも作ることが出来る優秀な作物だ。

一番良い時期の春先のデヤーゴは、お菓子を作るのにも使われるほど甘みが強いのだが、今の時期はだいぶ甘みがおちる。貯蔵してあるものはやや甘みが強くなるものの、ある一定の時期をすぎると逆に甘さがほとんどなくなってしまう。それでも、雪に閉ざされる冬には、いろいろな形で食卓に登場するご馳走だ。

スイールは、このデヤーゴで作るシチューが好きだった。半分はつぶしてそのまま煮溶かし、半分はなくならないように後から入れる。

ほんのりと甘いこのシチューは、じじ様の得意料理だった。手伝いながらいつも見ていたけれど、最後に入れるかくし味が何なのか未だにわからなくて、今でも研究を重ねている一品である。

『それは旨そうだな』

「おいしいよ。ほんのり甘いの」

でも、またアーネストがうるさそう、と小さく溜め息をつく。

『案ずるな。またうるさいようならば、我が黙らせてやる』

「うん。ありがとう」

良かった、とスイールは嬉しそうに笑った。

「スイール、もっと食わなきゃ大きくなれないぞ。戦場でものを言うのは結局、最後は体力だからな」

もうおなかいっぱいだし、戦場に行く気はないし、体力がないのは承知の上だが、もっと食べたからといって体力がつくとは到底思えなかった。

言いたいことはいろいろあったが、スイールが口に出したのは

一言だけだ。

「……もういい」

「スィール……」

非難を帯びた声で名を呼んだアーネストが更に続けようとする、ちよつとシチューを食べ終えたガルディアが呆れたような声音で言った。

『うるさいぞ、小姑』

瞬間、室内をブリザードが荒れ狂い、絶対零度の凍気を満たして時を止めた。

そこに他の誰かがいたとしたら、あまりの事態に逃げ出すことも出来ずに、ただそこで氷の彫像と化していたに違いない。

(ガルは、すごい！)

だが、当事者である二人を除けば、そこにいたのはスィールだけだった。

そして、スィールはその空気をまったく気にしなかった。

一人ぼつちで暮らしてきたスィールに、周囲の空気を読むなんていう芸当ができるはずもない。

いや、空気が変わったことには気付くのだ。だが、それを気にしない。それがスィールだ。

スィールは、むしろ、ガルディアがアーネストを一言で黙らせてしまったことに尊敬の念を抱いたくらいだ。

その日、スィールの脳内辞書には『小姑』という単語が新たに追

加された。その実例は、勿論、アーネストだ。

アーネストがそれを知ることがなかったのは、幸いと言つべきだ
っただろう。

北の大賢者の養い子（13）

「アーネストは、家に帰らなくていいの？」

スイールがその問いを口にしたのは、アーネストがスイールに真名を捧げて十日が過ぎてからだだった。

この沈黙の森での生活を、アーネストは心の底から満喫していた。食事は素朴だが、おいしく。スイールはそれほど豊富ではない材料を工夫して、飽きないようにメニューを工夫していた。

冬の間は雪で何も出来ないのだとスイールは言ったが、ただ日常を過ごすというだけでもやらなければいけないことはたくさんあった。

洗濯や掃除、それから、屋根の雪下ろしや水の運搬……暖炉も灰をこまめに掻き出す必要がある。そして、灰を捨てに行くというただそれ一事をとってしても、なかなか大変な作業だった。スイールはそういった作業の幾つかを魔法や魔術で行うことで効率化をはかっていた。

（魔術師でなければ、ここでは暮らせないな……）

もし、アーネストがここで一人で暮らせと言われたら、おそらく一冬越すことすらできないに違いない。それほど、日常のささいなことがここでは過酷な労働になるおそれがあった。

アーネストは、毎日、小さな身体でくると働いてまわるスイールに後につき、力仕事ならば自分が代わるし、できそうなことがあればすかさず手を出した。まだ成長しきらないスイールには困難でも、大人のアーネストならば楽に出来ることはたくさんあった。

(居候みたいなのだからな)

軍属のアーネストは従卒としての生活もこなしてきているので、一通りのことは何でも自分で出来る。だいたい、主であるスイールが働いている時に自分がダラダラとしていているわけにはいかなかった。なのに、アーネストが手伝ったびに、スイールは目を丸くして、それから、はにかんで礼を言う。

そんな様子はとてもかわいらしいもので、それが、アーネストにとって何よりも嬉しいことの一つになりつつある。

「……あのな、俺はおまえに真名を捧げたんだぞ。それとも、俺がいるのは迷惑か？」

「ううん、そんなことない」

アーネストが居ると毎日楽しいよ、とにこつと笑顔を見せる。その笑顔に、心が和んだ。

子供だから、ということもあるかもしれない。あるいは、ただ無知なだけなのかもしれない。

だが、アーネストがシュレイヤーンの血族であることを知りながら、それをまったく利用しようとはしないスイールに、アーネストは安堵した。

スイールにとって、アーネストは、ただのアーネストだ。
シュレイヤーンの候子でもなく、魔剣の使い手でもない。

(まあ、口うるさいとは思われてるかもしれないが……)

既に口うるさいの域はとっくに通り越していたのだが、幸いなことにアーネストはまだその事実を知らなかった。

「……何か、今でも、助かったことが不思議でならないんだ」

アーネストは、独り言のようにつぶやく。

ここでの生活が、あまりにも穏やかで……そして、あまりにも充ち足りているから、余計にそう思えてならない。

(これは、夢なんじゃないかってな……)

「そんなことない。……アーネストが助かったのは、代償が良かったからだし」

「代償？」

「そう。魔術には代償がいる」

法則に従いそれに則って使われる魔法はある意味自然だ。だが、魔術は自然法則を曲げることすらできる。

アーネストを救う為に、スイールは法則を大きく曲げたはずだ。その為の代償が必要となったのだ。

「それくらいは、それほど詳しくない俺だって知っている。常識だろ」

それでも、アーネストは十二候家の一員だ。一級の魔法士でもある。

「そう。常識」

スイールは、ごくごくとうなづいた。

肩の上のガルも同じ様にうなづいている。

良く似たしぐさがおかしくて、アーネストはわずかに笑みをもら

す。

「でも、そんな代償なんて俺はもってな……………」

持つてなかった、と言いかけて、アーネストの脳裏の片隅で、何かチカリと光を放った。

「……………もしかして……………」

顔色がさーっと変わったことを自分でも自覚する。

「ん?」

スィールはどうしたの?というように見上げた。

「……………あんまり聞きたくないんだけどな」

ものすごく嫌な予感がしていた。

「うん」

素直にアーネストを見上げる様子は非常に可愛らしいと感じられる。だが、今はそれに気を取られるよりも何よりも、大事なことがある。

「……………その代償ってのはだ」

間違えてはいけないと慎重に言葉を選ぶ。

「うん」

アーネストのその様子に、スィールも真剣な表情でうなづいた。嫌な予感ほ更に大きくなっている。まるで警報がなるように耳の奥でガンガンと響いていた。

「その……」

背筋をつつと冷たい汗が流れる。

「もしかして……」

だが、それでも彼は聞かねばならない。

「……代償つてのは、俺の剣、か？」

剣がないことには気付いていた。

だが、ここでの生活に剣が必要となることはなく、そして、アーネストはスィールが剣を持たない自分を受け入れてくれていることが嬉しかった。

魔剣の使い手と呼ばれることにも、アーネストは倦んでいたのだ。だから、あえて自分の剣の行方を問わなかった。

シュレイヤーン候家に伝わる魔剣ガルディアは、文字通り『魔剣』である。

それも主を選ぶタイプのものだ。この類の魔剣は、使い手でなければ鞘から抜くことすらできず、アーネストが生きている限り、アーネスト以外の人間には無用の長物と成り果てる。

それに、ガルディアほど有名な剣であれば、他者の手に渡ってもどうしようもなかった。

シュレイヤーンのものであることが明らかなら、

彼の手には戻らずとも、どうせすぐにシュレイヤーンに戻るだろう
と思っただけだ。

だが……剣が失われたとするならば、それは話が別だ。

アーネストの嫌な予感を、スイールはあっさりと肯定した。

「うん」

「……………」

その瞬間、アーネストは声にならぬ叫びをあげた。

叫びではなく、悲鳴だったかもしれない。

どちらにせよ、それは音にはならなかった。

「？」

『どうしたのだ？』

一人と一匹は、そんなアーネストを見て、そっくり同じ角度で首
をかしげていた。

「まだ、怒ってる？」

「怒ってない」

アーネストはやさぐれていた。

元々碎けてきていた言葉遣いは、今や素に近づきつつある。

「でも、機嫌悪い」

「別に悪くない」

別にスイールのせいではない。わかっている。……わかってはいるのだ。

自分の命を助けてくれたことに感謝もしている。

生命と比べれば、たかが剣。だが、されど剣、でもある。

失われてしまったことをすぐに納得しきれないのは仕方がないことだった。。

「でも、さつきからずっと怖い」

「別に、おまえにじゃねえよ。気にするな」

『主に対し、言葉が過ぎるぞ、小僧』

冷やかな声がした。じろり、と黄金色の縦に瞳孔の長い瞳が睨めつける。

「すまん」

アーネストは素直に謝った。確かに主に対する言葉遣いではなかった。

できたてで、まだどう接するのが正しいのかがわかっていないし、自身の立ち位置をはかりかねている。だが、それでも目の前の若い魔術師に真名を捧げたのは事実だ。

自分の態度は、確かによろしくないものであるとアーネストは反省する。

『言葉遣いには気をつけるが良い』

「ああ」

うなづいたはいいものの、そもそも、アーネストは口が悪い。

男兄弟の中で育ち、更には、軍での生活でそれがさらに助長された。

「騎士なのに、不良みたいね」

スィールはくすくすと笑う。

『不良騎士か、言いて妙だな』

ガルが小さな前肢を組み、こくこくとうなづく。どこか人間臭い仕草が妙におかしい。

「勝手なこと言ってるじゃねえよ」

「でも、今のほうがいいよ」

「は？」

「大きな声とか出されると怖いけど、でも、今のほうがずっといい。

……無理してない感じがする」

『主は、趣味が悪いのう』

「……そういうわけじゃないけど」

ちょっと乱暴でも、普通にしてくれればいい、と静かに言う。
スィールは時々、驚くほど大人びた表情を見せることがあり、なぜかそんな表情を見せられるとアーネストは不安を覚える。

「……自分の騎士が、不良でいいのかよ」

半ば、からかうような気持ち混じりに問いかける。

「うん」

スィールは躊躇う様子もなくあっさりとうなづいた。
そして、言った。

「アーネストが、アーネストなら、それでいいよ」

その言葉に胸が熱くなる。

「なんだよ、それ。謎々じゃねえんだぞ」

わけわかんねー、なんて憎まれ口を叩いたが、スィールが言わんとしていたことはわかっていた。

それが嬉しくて、あまりにも嬉しくて……だが、そんなこと口に出せるはずがない。

ちっぽけだろうと、それが男のプライドというものだ。

そんなアーネストの様子など気付く風もなく、スィールは更に告げた。

「アーネストが不良騎士でも、そうじゃなかったとしても、私の騎士はアーネストだよ」

その言葉に、アーネストは言葉を失った。
何も言えなかった。

口を開いたら、何を口走るかわからなかったのだ。

『いやはや、主は最強だな』

「?????……じじさまも、私は最強になれるって言ってたよ」

『いやいや、おそらくそれは意味が違っただろうよ。我を口説いたときといい、主はなかなかタラシだな……小僧、顔が赤いぞ』

「うるせー」

「よくわかんないけど、ダメなこと?」

『いや。そんなことはあるまい。そうであろう?小僧』

「あ、ああ」

小僧と呼ばれることに同意をしたわけではなかったが、相手は竜である。仕方がないと半ばアーネストは諦めていたので、ただうなづくだけにとどめる。

自身が赤面している自覚もあった。

(……………俺としたことが)

だが、そうは思いながらも、アーネストは、今の自分を悪くない
と思っていた。

北の大賢者の養い子（14）

「あのね、大事な話がある」

「何だ？」

『うむ』

夕食後は団欒の時間だ。団欒といっても、何をするというわけでもない。

スイールは口数が多いほうではなかったし、アーネストは口下手というわけではなかったが、これくらいの年齢の子供と何を話題に話してよいかはまったくわからなかった。

だいたいの場合、スイールはガルを抱きしめながら本をめくり、アーネストもまた借りている本をめくる。言わば読書の時間となることが一番多い。

アーネストが驚いたのは、この小屋にある本の充実ぶりとその希少性だった。こと、古代魔術分野において言うならば、この小屋にある文書類は帝宮図書館の秘文庫を凌ぐだろう。

（ティンがいれば、目の色を変えるに違いない……）

ティン……クウィンティン＝リューディ。

アーネストの3歳年下の異母弟は、帝国の国家魔法士の一人にして、魔術師の卵だ。

シュレイヤーンの名を捨て、リューディの名を与えられた。魔術師とまだ呼べぬのは、彼が誓約をたてていない為だ。

ティンの一件があるから、アーネストは人より少しだけ魔術師について詳しい。生真面目で二言目には規則だの決まりだのを持ち出す異母弟をうざったいと思っていたが、今は密かに感謝していたり

する。

『それで、大事な話とは何なのだ、主よ』

「うん。これからのことなんだけど……」

スイールは膝の上にガルを座らせ、本を閉じる。

「まず先に聞いておくけど、アーネストは、家に帰りたくない？」

スイールは、アーネストをまつすぐな瞳で見上げた。

もの見事に直球と真ん中。遠まわしにたずねるとか、修辭的技巧だとか、言葉を飾るとかは一切ない。

「いや、そういうわけでもないんだが……」

(嘘だ……)

即座に心の中で否定する。

先日、家に帰らなくて良いのかと問われた時、帰りたくないとも、もう帰らないとも言いつける事ができなかった。

ここが居心地が良いというのは確かだが、現実逃避をしている部分があることもまた事実だ。

「でも、おうちの人が心配してると思うけど……いや、死んだと思われてるかも……」

スイールの視線はアーネストの腹部あたりをとらえている。その傷を思い出しているのだろう。

「たぶんな」

(クライフはきつと、俺が死んだと報告しているだろう……)

アーネスト自身が、自分は死んだと思ったのだ。

彼に誰よりも忠実なクライフは、アーネストがウィルの刃に斃れたのを見ている。遺体がなくとも、彼の口からその時の情景が家に伝われば、彼は間違いなく死んだと思われるはずだ。

「死んだままのが、いい？」

「いや……そういうわけじゃないんだが……」

歯切れが悪い自分に苦笑する。

いつも即断即決。誰に何を言われようがわが道を行くのがアーネストだった。

そんな彼の隣を一步後ろから苦笑しながらついてくる、それがウィルで……アーネストが切り捨ててしまうような細かなことも、ウィルがすくいあげ、うまくやってくれていた。

(支えられていた……)

自分がどれだけのものを返せていたのか、今となってはわからない。

もしかしたら自分だけが支えられていたのかもしれない、と思う。その不均衡こそが、あの瞬間につながったのかと。

そして、殺されかけた今でも、アーネストはウィルを……ウィリアムを憎むことができなかった。

『親友』……その単語の持つ響きに満足し、自分は何を見逃していたのだろうか。

不意に、鼻先をねっとり甘い南国の花の香りが通り過ぎたような気がした。

本当にその香りがしたはずがなかった。この居心地の良い小さな小屋の中で、そんな不自然な香りがするはずがない。

ただ、思い出しただけだ。

その香りを纏う、ウィルが、一目で恋に落ちた相手を。

(デイサ・エリーナだったか、エラーナだったか……)

アーネストの記憶力には偏りがあった、どういうわけか、女の顔やら名前やらがまともに覚えられない。

十年來の婚約者の名前すら毎回間違える始末で、その婚約者には二年前、思いつきりフラれて婚約を破棄された。最も、互いに納得づくだ。

彼らは互いに恋したこともなければ愛し合ったこともなく、ただ、互いに義務と義理と親の期待によって結ばれていたにすぎなかった。

「あの傷は、おうちの人が？」

スィールが、軽く首をかしげて問う。アーネストが答えにくそうなのを、身内が絡んでるせいかと考えたらしい。

「いや違う。俺を殺しかけたのは身内じゃない。」

身内以上だと思っていた友だ、とは口に出さなかった。

(殺されかけてなのに、友って言っても説得力ないよな)

本当に、不思議なくらいに憎しみはわかかった。

自分は裏切られたのだと思い、だが、それ以上に裏切られてなどいないという気もした。

「話して」

夕闇色のアメジスト……アーネストは初めてスイールの瞳を見たとき、そう思った……その、不思議な翳りが揺らぐ瞳が、アーネストをまっすぐと見ていた。

「……正直、何から話せばいいかわからないんだけどな」

アーネストは苦笑をこぼす。

自分でもまだ整理しきれていないのだ。他人にうまく説明などできるはずがない。

「あの傷は、誰が？」

スイールは、知りたいことを自分から問うことにしたらしい。アーネストもその方が気楽である。

「ウィリアムっていう俺の友人だ」

「……………友達に殺されかけた？」

「……ああ」

「それ、ほんとに友達？」

半ば予測はしていたが、スイールは、疑わしいのではないかという眼差しをしている。

「ああ、そうだ。俺とあいつはそれこそこんなちっこいころからの親友なんだぞ」

手で、幼い頃の背丈を指し示した。

思い出すことなら幾らでもあった。実の兄弟よりもよっぽど彼ら

は時間を共有していた。

『そう思っていたのはおぬしだけではないのか？小僧。人は思い込みが激しい生き物だ』

「……うるさいぞ、黒トカゲ」

『我は偉大なる竜族であるゆえ、愚かなそなたの暴言は聞き流してやろう。……主よ、小僧の分の茶菓子は我がもらっぞ』

「ん」

スイールは、アーネストの言を暴言と認めたらしく、そのまま茶菓子の皿をガルの前に置く。

「……ちび、何気に俺に厳しいだろ」

「ちびじゃない、スイール」

ちびなんて言う人にはお茶あげないよ、といいつつも、ちゃんとアーネストの分も淹れるのがスイールだ。

アーネストの見たところ、もうすぐ14歳というわりにはスイールは身体が小さい。

本人は少し気にしているのか、ちびと呼ぶとちょっとムキになった表情をするので、その表情見たさについつい『ちび』と呼んでしまふ。ただし、加減を誤ると、主大事のガルと戦争が勃発するのでほどほどにしておかねばならない。

「あのな、スイール。……俺とウィルは、確かに殺しあったわけだが……いや、俺は殺せるとは思ってたから、俺は一方的に殺されかけたんだが、でもな、だからって、俺とあいつが友であった事実は変わらないと思うんだ。それって、おかしいか？」

「……当事者じゃないからよくわからないけど、別に思うのは自由」

スイールの言葉は、淡々としていた。特別な思い入れもなく、過剰に同意するわけでもない。だが、アーネストにはそれが良かった。

「ありがとよ。……それでだ。俺が家に帰ると、この件に決着つけなきゃならなくなるんだ。当然だが、あいつが俺に刃を向けたことは明らかになつてるだろうし……あいつがどんな理由をつけても、俺がシュレイヤーンの候子である以上、あいつが許されることはない」

「よく、わからない」

アーネストの言わんとしていることが、スイールにはわからなかった。

実はスイールは、アーネストがシュレイヤーンの候子ということを知っていても、それがどういう意味を持つのがよくわかっていない。

こんな辺境の果ての地で、候子だの貴族だのといったところで何ができるというわけでもない。

何よりも、魔術師というのは、ある種、身分制度の枠外に位置づけられている存在だ。

「……俺には、帝位継承権があるんだ」

アーネストは、ゆっくりと告げた。スイールの様子を窺うように。

「ふーん」

スイールは、たいして感慨もなさそうになつていく。その反応の薄さに思わず問う。

「……帝位継承権ってわかるか？」

「皇帝になる権利ってことでしょ」
「ああ、そうだ」

知らないわけではなく、どうやらそのあたりの興味が薄いだけらしい。

「十二選帝侯家の正室から生まれた嫡出の子供は、帝位継承権を等しく持つ。……例えば、皇帝に子供がいてもな」

選帝侯家が十二家と呼ばれ、帝国貴族の中で特別な地位を占めるのはそのためだ。

皇帝を選ぶ権利を有する家なのではない。これらの家から皇帝を選ぶのだ。その為の『選帝侯』家である。

そして、だからこそ、侯家の候子なり候女と呼ばれる人間は特別だった。

「他の国で言ったら、王子様だね」

「……そうかもしれないな」

「全然、王子様らしくないね」

スィールは何を思い出したのかくすくす笑う。

「何だよ」

「ううん。何でもない」

「気になるだろ」

「だめ、内緒。……それで、帝位継承権を持つ人間を殺しかけるとどういう罪になるの」

スィールは話を元にもどす。

「良くて、当人のみの極刑。帝位継承権者は、一般の法では裁かれない。ただ、皇帝陛下のみが裁く権利を持つんだ」

「アーネストはそれが嫌なの？」

「……ああ。俺は、今でもあいつを友だと思ってる……いや、思いたいからな」

「ふーん」

スイールはそれについて、特に何も言わなかった。

ひとりぼっちのスイールには、アーネストが『友』に持つその過剰とも思える思い入れや気持ちがよくわからなかった。

「おうちに帰らなくてもいいけど、春になる前に帝都に行くから」

スイールは、さらりと告げた。

『ふむ』

「……帝都に？春になってからの方が良いのではないか？急がなければいけない理由があるのか？」

冬の旅は他の季節に比べ数倍過酷だと言われている。

アーネストは実体験としてそれを知っている。

「……ここで冬を越せるほど、食料の備蓄がないの」

少しだけ困ったような表情でスイールは言った。

『……すまぬ』

「悪い」

良く食べる自覚のある一人と一頭は、バツの悪そうな表情で謝る。

「ううん。いいの。遠慮とかしてほしいわけじゃないし……。どうせ、帝都に行くことには変わりがないんだから」

予定外だったけど、楽しいからいい、とスイールは笑う。

『そう言ってもらえると、気が楽になる』

「じじ様はよく言ってたよ。「何でも予定通りなんて、つまらんよ、スイール」って」

「……ありがとうな」

気遣わせまいとするスイールの頭を、アーネストはくしゃりと撫でた。

「ううん」

はにかんだように笑うスイールに、アーネストも笑みを返す。

（俺が、守る）

ごく自然にそう思った。

主だから、とか、命の恩人だから、とかではない。アーネストは、ただ、この笑みを守りたかった。

だから、自分にその権利があることが嬉しかった。

そして、気付く。

（俺はもう何にも手加減する必要がない……）

解き放たれたことに気付き、アーネストは薄く笑った。

「どうしたの？」

「ん？何がだ」

「今、ちよつとこわい笑い方してたよ」

「そうか？」

「うん」

「……たいしたことじゃない。何だかんだ言っても、俺は今までのようなものに縛られてたんだな、と思つたんだよ」

それらのすべては最早、何の意味も持たないが。

「せけんのしがらみってヤツ？」

「まあ、そんなとこだ」

アーネストはもう一度、くしゃりとかきませるようにスィールの頭を撫でた。

ヴィ・デイルーの剣(1)

「はい、これ」

ある天気の良い日に、スイールに渡されたのは、変わった形をした袋状のものだった。

「準備しなきゃいけないから、じじさまの貸してあげる」

スイールいわく、旅の支度はとっても天気の良い日にはじめなければいけないものらしい。それが、この家でのルールで、スイールにとっての常識なのだった。

(まあ、常識ってのは人それぞれなんだけどな……)

常識は絶対ではない。立場や階級でも違えば、時代でも変わる。つまるところ、それは、自分なりのものさしだ。

「これ、何だ？」

灰色の丈夫な帆布でできているそれは、袋であることはわかる。だが、一般的な旅人が利用する肩掛け袋とはまったく違っていた。

「背囊。袋部分が背中にぴったりとするから、重いものも入れられるし、疲れにくい」

「へえ」

「あててみて。ベルトの長さ調節するから」

アーネストに与えられているものは、着ているものはもちろんの

こと、何から何まですべて、スイールがじじ様と呼ぶ育て親の老人のものだ。

この地方では、服の仕立てはやや大きめなのが一般的で、そのおかげで服は多少サイズ直しをただけでアーネストが着られるものが多く、スイールはそういったものをすべてアーネスト用に直してくれた。

ボタンつけくらいなら、アーネストでも何とかなるが、さすがにサイズ直しとなると見ているほかない。スイールはとても器用で、肌着などもすぐにその場で何枚か仕立ててくれたほどだった。

本人は何でも自分でやる必要があるから、必要に応じて覚えただけとそっけなかったが、特技には違いない。

「あと、これが外套」

旅行用のフードのついた灰色の外套は、寝具代わりにもなれば、兩具代わりにもするという万能な一品だ。これで少し高級なものになると裏打ちに毛皮がつかわれていたりもする。

「肩のところ、少し余裕があったほうがいいね」

「大丈夫だぞ？」

多少キツさを感じるが、別に動きがそれほど阻害されるわけでもない。

「でも、いつ剣を使うことになるかわからないし……」

「それはそうなんだが、これくらいはたいしたことないし……だいたい、剣を使うって言ったって、そもそも、ここに剣があるのか？」

アーネストの目に付く範囲にはなかったような気がする。

「頼んである。……剣が届いたら、ここを出るつもり」

「頼む？」

「友達に何か貸してって」

そういえば、何日か前に何か手紙のようなものを書いていたっけ、とアーネストは思い出す。

「……友達が、いるのか？」

アーネストのその言は、聞きようによっては大変失礼なものだった。

「あ、いや、別にスイールに友達がいるのがおかしいって言ってんじゃないぞ。ただ、こんなところでよく友達になるような『人間』がいたなと思ったんだ。この森で、他に暮らしてるような人がいるのか？」

別にスイールが嫌われるようなタイプだからというわけではない。純粹に『友達』になれる『人間』の存在をうたがっただけだ。

「ううん。人間はいない。だって、ここは沈黙の森だもの」

たぶん、普通の人は住めないと思う、とスイールは自身を棚にあげて言う。

「……じゃあ、友達って？」

「ヴィ・デイル」

それはいったい何の名前だ、とアーネストは思う。

スイールもそれだけでは足りないと思ったのだらう。少し考えて

付け加えた。

「北の果てのガラドリエに住む妖精族」

「ガラドリエ？」

「この森の……泉の近くにある門から行ける妖精の国。ヴィ・ディールはそこに住んでるの」

「妖精の、友達……」

人間ではないかもしれない、という予測はしていたが、妖精族と言われるのは少し予想外だった。

(てつきり、竜か何かかと……)

北は竜の生息する地域だ。古代竜の数は激減しているが、それでも、鳳凰のように伝説となるほどではない。

スイールのことだから、竜族に友達の一人や二人いてもおかしくないと思っていたのだ。何しろ、スイールの守護者はガルで、ガルは竜族なのだから。

「妖精って人間嫌いだろ？」

「うん。ヴィ・ディールは人間大っ嫌いだって」

「……おまえは人間だろう」

「私は友達だから特別って。……ガルもそれおんなじこと聞いた」
スイールはおかしげに笑う。

「いや、妖精族の人族嫌いは筋金入りだからさ」
「そうだけど」

(……あれ？妖精って確か……)

記憶の片隅を、何かがかする。

何かすごく大事なことを思い出しかけたような気がした。

だが、その思考は確かな輪郭を結ぶ前に、さらりと消えさる。

「そろそろ、昼ごはんにする？」

「そうだな。……ガルはどうしたんだ？」

いつも、スイールにべつたりの黒い影がどこにも見えない。

「旅に出る前にこの周辺をちょっと見ておきたいんだって。散歩に行っただけ」

「散歩、ね……」

「ガルは飛べるから大丈夫だよ」

「……まあ、そうなんだけどな」

アーネストが、そのことを思い出したのは、三日後の夜のことだった。

「人の子よ、スイールの騎士を名乗るなら、まずは私と手合わせ願おうか」

凍った冬の空のような青灰色の瞳がアーネストを見て、冷ややかに嗤う。

初対面であるというのに、静かな殺意がそこにはあった。

(そういや……妖精にとつての『友達』って、すげえ特別だったんじゃないかったっけ……)

アーネストは、それがどれほど特別なのかを強制的に体験することになった。

ヴィ・デイルーの剣(2)

ヴィ・デイルーを初めて見たとき、アーネストはまるで冬の化身のようだと思った。

クセのない長い髪は銀系の雨、肌は白く、どこかひんやりとした空気を纏っていて、何よりもその視線が氷点下を思わせるほどに冷たかった。

一目でそれがスィールの言っていた妖精族なのだとわかった。

身につけているものは人間とそれほどかわらない。だが、丁寧にほどこされた刺繍やところどころに意匠のあしらわれた衣服は、さすが妖精族と思わされる美しいものだ。

ヴィ・デイルーのそれは白と銀を基調にまとめられ、当たり前のことだが、目の前の男にこの上なくよく似合っていた。マントが光を浴びるたびに鈍い光を放つのは、妖精族の織姫の手になるものだからなのだろう。

「ディー！」

「おいつ、あぶなっ」

男を見るなり、屋根にいたスィールはふわりと飛び降りた。

危ない、と言い掛けて、スィールは大丈夫なのだどと気付く。魔法だか魔法だかわからないが、ほとんど意識することなくそれらを駆使しているスィールにとって、この程度の高さは何ほどのことでもない。

だが、身についた常識が邪魔をして、アーネストは毎度そのたびにヒヤヒヤするのだ。

スィールのように魔法も魔法も使えないアーネストは、おとなしく梯子をつたって下に下りる。ずっと使われていなかった梯子はぎ

しぎしと音をたてていて、今にも壊れそうだった。

「デイが来るなんて思わなかった」

駆け寄ったスイールに、男は膝をついて軽く見上げる。

「そなたが旅立つのだ。これを見送らねば、友とは呼べまい」
「ありがと」

スイールは、その言葉に嬉しそうに笑う。

「今日、泊まって行ける？」

「ああ」

「ごちそうにするね」

「それは楽しみだ」

男は、柔らかな笑みを見せる。

そうすると驚くほどにその気配が変わった。まるで冬そのものような冷ややかさが、柔らかな光を帯び、春の訪れを思わせるあたかさを漂わせる。

「デイ、手紙でも書いたけど、アーネスト、私の騎士。アーネスト、彼がヴィ・ディール。私の友達」

「……よろしく」

アーネストは軽く目礼し、手を出す。

差し出した手を一瞥し、男……ヴィ・ディールは言った。

「私は人間が嫌いだ。おまえがスイールのモノであるとはいえ、そ

れには変わりがない」

「……あー……」

握手を求めた手が行き場をなくす。

とはいえ、これくらいのは驚くに及ばない。妖精族の人間に対する対応としてはかなりマシな方だ。

「アーネスト、気にしないで。デイも、普通にして。そのうちきつとお互いに、こいつ、案外悪くないってわかるから」

スイールは、気にした風もなく言う。

「スイールがそう言うなら」

「スイールがそう言うのなら」

お互いの言葉が、綺麗に重なった。
思わず互いに顔を見合わせる。

「ほら、きつと仲良くなれるよ」

スイールは、おかしげに笑った。

夕食は思っていたよりも和やかなものとなった。

ヴィ・デイルは、最初に宣言しただけで、それ以上は何かを言

おうとはしなかったし、アーネストが口を開いてもそれを否定したり、殊更つつかかってくるようなことはなかった。

（大人、なんだろうな）

妖精族も同じように言うのかはわからないが、大人な態度なのだろうと思う。

嫌いだと宣言されたときにはどうしようかと思ったが、これくらいなら全然許容範囲だった。

（妖精族が人間を嫌うのは、理由のないことではないしな……）

かつては、大陸中のどこであつても妖精族の姿を見ることができたという。だが、今では妖精族は、ほとんど自領……妖精国から出ることがない。

妖精国はこの世界と界を異にしていると言われ、『妖精の環』と呼ばれる門からしか入ることができない。もちろん、常人にはその門を開くことが出来ない。

気まぐれな月の魔力のせいで迷い込む以外には、普通の人間が妖精国に辿りつく術はない。

時々、変わり者の妖精が人間界に住み着いたり、人間界に出てきて旅をしたりしている以外は、何らかの仕事の為にこちらに来ている者しかおらず、ほとんど鎖国状態にある。

基本的に、妖精族は人間と関わることを好まないのだ。

「アーネスト、もつと飲む？」

スィールは、老人が秘蔵していたという火酒の緑色の瓶を目線で

示す。

「いや、このくらいにしておく。明日は早いんだろう?」

「ううん、そんなに早くない。明日は、麓の村で一泊しようと思っ
ているから、昼ちよつと前くらいで大丈夫」

「そうか。なら、もらおうかな」

手にした杯は、美しい細工のなされたもの。妖精族の作った硝子製の品で、光に透かすとテーブルの上に美しい模様を描いた。それこそ、王侯貴族の屋敷で飾られているような品だったが、この小屋では当たり前のようにそれが使用されている。

食器は素朴な土焼きのものばかり。ただカトラリーにはこだわっていて、銀の美しい細工がされているものを使っていた。

素朴な手作り感がいっぱい的小屋の中で、そういった繊細な細工物は不釣り合いのように感じられるかもしれないが、スィールの育て親だった老人には一定のこだわりがあったのだろう。杯もカトラリーも不思議とこの小屋にじっくりと溶け込んでいて、亡くなった老人の美意識の高さが感じられた。

「いっぱい飲んで。どうせ、持っていけないんだし」

デイモ、と、スィールは、彼の手にする杯に惜しむ風もなくたくさん注ぐ。

先ほどから出される酒、出される酒のすべてが、酒好きのアーネストが、これは!と思う逸品揃いである。こんなにも大盤振る舞いして良いのかと、つい他人事ながら気にしてしまうほど。

(まあ、まだ子供だからな……)

この酒の価値がわからないのだろうと思う。きっと、大人になつてそれを知った時に後悔するに違いない。

「うまいな」

ヴィ・ディルーがつぶやく。それに、アーネストも同意だというようにうなづいた。

備蓄していた食糧をいつもより豊富につかつたスイールの心づくしの料理は、彼らにとっては、どんな山海の珍味にも勝つたので、更に酒がすすんだ。

アーネストとヴィ・ディルーは、何か会話を交わすというわけではなかった。だが、同じ空間で過ごしていても特に気まずさを感じることではなく、そこには、不可思議な静謐さがあつた。

「ここはどうするんだ？」

どれだけ飲んでも、ヴィ・ディルーの端正なたたずまいが崩れることはなかった。

妖精は、小人族ほどではないが酒を好む。麦酒などよりも果実酒等をより好むと言われていて、葡萄酒の名産地では妖精が変装して買いに来たという逸話が数多くあるほど。ヴィ・ディルーもその例にもれないらしく、薦められる酒は断らない。

「んー、全部、燃やしちゃおうかなって思っていたんだけど」

「燃やすだと？」

「……ちよつと待て」

ヴィ・ディルーが信じられないことを聞いたというような表情をし、アーネストはぎよつとする。

そして、互いに視線を合わせ、少し気まずい思いをしながら、何

事もなかったようにそらした。

「スイール……良いか、この小屋にある書物は人間にとっても貴重なものではあるが、我らにとってもかけがえのないものも多い。それを燃やすなどと……」

妖精族の美しさはよく知られているが、なるほど確かに美しいとアーネストは改めて思う。

わずかに眉を顰め、どこか困惑しているような表情は、見ているだけで眼福だった。いや、どんな表情をしてもその美しさは見惚れるしかないものだろう。

男に美貌などという言葉はそぐわないと思っていたが、確かにこれは「美貌」と言う他ない。

「うん。アーネストもこの本はすごく貴重だっというからちよつと困ってた。でも、じじ様は処分しろって言ったんだよ。処分って捨てたりあげたりして、全部なくしてしまえってことだよね？でも、この本は誰かにあげたりするのはあんまりできないし……」

「そういつわけでもあるまい。全部というのではなく……きつと、長期で留守をするから、家にあるなまものや食べ物などの置いておいたら困るものを処分しろということだろう」

ヴィ・デイルーの言は、かなり苦しい言い訳だ、とアーネストは思う。

「そうかな」

「そうだとも」

「……俺も、そう思う」

アーネストも後押しをした。

スイールの育て親は随分と豪快な人間だったようで、漏れ聞くその言動の端々に、時々不安を覚える。

(いや、豪快っていうか、大雑把?)

ヴィ・デイルーは、大きな溜め息を一つついて言った。

「……そなたが再びこの地に戻るまで、私が封じよう。そうすれば、誰の手にも触れることがない」

「わかった。……ありがとう」

「いや。ここは君の故郷だ。それを守るとは私の喜びだ、我が友よ」

スイールに対する時だけ、ヴィ・デイルーの態度はとても柔らかなものになる。それだけ大切にしているのだと知る一方、自分にとっても大切な存在なのだ主張したい気持も生まれる。

その口から出る『我が友』という単語は、とても大切に発せられていて、聞いているほうが何だかむずがゆさを覚えた。

(あの肩乗り竜がいれば、これが普通の妖精の『我が友』というヤツなのか聞いてみるとこだが……)

どこまで行っているのかしらないが、ガルはまだ帰宅していなかった。

スイールは、ガルとはつながっているから全然平気、と、不在をまったく気にしていない。守護者と対となる魔術師とは、互いの視界すら共有することが可能なのだというから、心配するまでもないのだろう。

「これも、じじさまがおいしいって言った」

スィールが、何本目になるかわからない瓶を抱えてくる。

「いや、もうそろそろ……」

「我が友よ、我ら妖精族は酒に目がない種族ではあるが、さすがにこれは量がすぎる」

いつの間にか、アーネストとヴィ・ディルーの間には奇妙な連帯感が生まれていた。

「そう？遠慮しなくていいのに」

「いや……」

アーネストの視線は泳ぎ、ヴィ・ディルーは明後日の方角を向く。

「じゃあ、最後の一杯ね」

スィールは、残っていた酒を二人の杯に注ぐ。

二人は無言で視線を合わせた。何となく、気持が通じ合っていたような気がしたのはアーネストの一方的な感覚ではなかったと思う。

テーブルの上、杯越しに落ちた光はまるで水面のように揺らぎ、とても美しかった。

ヴィ・ディールの剣(3)

「俺を、呼んだよな？」

夜の中にヴィ・ディールはいた。

その輪郭が淡く光を帯び、姿がぼんやりと闇に浮かび上がっている。

妖精族は種族的な特徴として、男も女も線が細く類稀な美貌を持つ。人間から見れば性別不詳に見えることが多いのだが、ヴィ・ディールは男にしか見えなかった。

別に彼が妖精族には珍しいほどごついとかというわけではなく、ただそれは、彼の持つ雰囲気なのだろうとアーネストは思った。

「ああ」

ヴィ・ディールは静かにうなづく。

「明日の朝でもいいだろうに」

まだ、酔いが完全にさめきれていない。自分の吐く息の酒臭さにアーネストは顔を顰めた。

「それだとスイールが怒るだろう」

おまえは何を言ってるのだという顔で、ヴィ・ディールは言う。

「……………」

(つまり、あんたは、スイールが知ったら怒るようなことをこれか

らするわけだな)

ふっとヴィ・デイルーは空中に手をかざす。

ざくりと音がして、雪の上に剣が二本突き刺さった。

「人の子よ、スィールの騎士を名乗るなら、まずは私と手合わせ願おうか」

剣をとれ、とヴィ・デイルーは静かに言った。

(こんなことになるだろうと……)

予測はしていた。

たぶん、初めて会ったその瞬間から。

手にした剣を無造作に一振りする。アーネストの好みからすれば、少し細いと感じられるものだったが、不思議なことに手にしっくりと馴染んだ。素材に何か工夫があるのか、見た目以上に重さもある。目の前の男の用意したものだから妖精族のものなのだろうが、その割には、シンプルでほとんど装飾がないのも気に入った。

「名を聞こうか」

「アーネストだ。スィールが言っただろう」

雪雲に隠されていた月が姿をあらわし、光が降り注ぐ。

よく、月光をさやかなと表現するが、満ちきつた月の光は決してそんな言葉では表現できない。その圧倒的な光の強さは、陽の光にも劣らぬと思えるほど。それが、雪の照り返しをうけてまるで昼間のような明るさだった。

(まるで、この男が演出したかのようにだ)

妖精族は魔法に長けた種族ではあるが、雲や月まで操れるわけはあるまい。だが、絶妙のタイミングに、ついそんなことを考えてしまう。

このお謎え向きの舞台で、妖精族と打ち合うことになるなんて、これはいったい何のおとぎ話なのだろうと思う。

今のこれは、帝都で不真面目な騎士をやっていた頃には想像したこともない事態だった。

そして、何と云っていいか……アーネストは今のこの状況に心が躍っていた。わくわくしていたと言ってもいい。

「……人の子は、もっと長ったらしい名を名乗るかと思っていたが？」

「アーネスト・エレザール・リュカディア・シュレイヤーン」
「ほう」

青灰色の瞳が細められた。

「何か？」

「……武のシュレイヤーン、我とてそのくらいは知っている」
「それは光栄だ」

家名を妖精族にまで知られているというのに、アーネストは少し

だけ驚いた。

「だが、我が友に必要なのは、名ではなく、ただその強さのみ」

ヴィ・デイルーの眼差しに殺意が閃いた。

(……強い)

最初に一太刀合わせただけで、アーネストはヴィ・デイルーが恐るべき剣士であることを悟った。

その抜き打ちの早さに、避けることができず、剣で応じるしかなかったのだ。

そっくり同じ剣と思っていたので適当に手にとった方を使ったのだが、よく見れば、ヴィ・デイルーが手にしていたのは刀だった。妖精族が好んで使う反りのある片刃の剣だ。

「我らの作る剣は、遣い手の望む形をとる」

ヴィ・デイルーは、まるでアーネストの心の手を呼んだかのように言った。

アーネストは、横薙ぎに払われた一振りを後ろに大きく跳ぶことで避けた。

そこにすかさず斬撃が来る。

自分から一撃いれることで、それを弾いた。手がじんと痺れていた。

(なんて重いんだ……)

再びの斬撃。あわせた刃は鈍い金属音をたて、ギリと力が拮抗する。

妖精族の身体能力は、基本、人間を上回る。ましてや、目の前の男は明らかに鍛えられた武人だった。見た目だけを言うのなら、アーネストの方が力があるように見えるかもしれないが、実際には違う。

妖精族は争いごとや戦を好まぬ種族として知られているし、見た目が繊細な美しさを持つ種族なので勘違いする者は多いが、彼らは戦いを好まぬだけで戦わないわけではない。やむをえぬ場合にはもちろん剣をとるし、また戦士としても非常に屈強で優秀だった。

妖精族の戦士とは、最良の戦士と同義であると言われるのはその為だ。その彼らの得意とするのが剣術だ。

大陸史に名を残す剣士半数以上が、妖精族の血をひくか、あるいは、妖精族に師を持つという。

(だが……)

それでも、諦めてしまえばそこで終わりだった。

試されているのはわかっている。ヴィ・デイルーにはまだまだ余裕がある。

「……甘いつ」

鋭い突きがきた。間一髪、耳元をかすめる。空気の刃に触れ、闇の中に数本の金糸が舞った。

アーネストは小さく舌打ちして、攻撃に転じる。

息つかせぬよう放つ斬撃を、ヴィ・デイルーはわずかな間のみで見切りで避ける。それは、まるで剣圧に押されただけのようにも見え、また、軽やかにダンスのステップを踏んでいるかのようにも見

えた。

斬り、払い、討ちかかり……転じて、ヴィ・ディールの放つ斬撃を受け、あるいは、避け、また攻撃に転じる。

頭の芯が熱かった。

自身の放つすべての剣を避けられ、あるいは軽くないなされていた。

(速く、もっと速く……)

不思議と腕が重いと感じなかった。その斬撃をただ速くすることだけを思っていた。

(来る……)

チリリと頭の後ろが焦げるような感覚。

次の瞬間、それまでとは比べ物にならない早さの刺突が、アーネストを襲った。

(避けられない)

咄嗟に剣をひき、受けたのは意識してのことではなかった。

鈍い金属音を、おそろしいまでの至近距離で聞いた。

「……まあまあか」

二撃目はなかった。

「……参りました」

かすれた声で、告げる。

時折、殺意を感じたにせよ、これは、まさしく稽古でしかなかったのだ。

アーネストは、途中からそれに気がついた。

「あと百年もすれば、我とともに打ち合えよう」

「……それまで、生きてねえよ」

大きく息を吐く。

口惜しかった。これほど口惜しかったことなどないというのに、気分は晴れやかだった。

アーネストは生まれて初めて、全力で戦い……そして、負けたのだ。

(負けたっていつものも恥ずかしいような完敗だが……)

「純粋な剣のみなれば、そなたの方がかるうじて上だ」

「……何の話だ？」

「スィールだよ」

「え？」

「我はスィールに剣を教えた。そなたが、あの子より弱かったら斬り捨てるつもりだった」

護る為の騎士が、護る人間より弱かったら話にならないからな、とヴィ・デイルーは言う。

「そんなに強いのか？」

アーネストの真面目な問いに、ヴィ・デイルーはどこか悲壮な気配すら漂わせてうなづく。

「そんなに強いのだ。……しかもだ、スィールは恐るべき攻撃魔法の達人で、その上に魔術師であるのだぞ？ まったく、ヴィラードはスィールを何にするつもりだったのか一度問いただそうと思ってたのだが……」

その前に死んでしまった、と、苦笑するような表情でつぶやいた。その表情の中には、親しみと敬意と、故人を懐かしむ優しさが入り混じっていて、彼らの距離の近さを感じた。

「……魔法込みだとあんたも勝てないのか？」

「わからぬ。……我とスィールが魔法込みでやりあつたら、この森など簡単に消し飛ぶ」

「消し飛ぶって……」

「事実だ。我もスィールも魔法に長けている。だから、たとえ戯れであれ、稽古であれ、魔法は抜きだった。ましてや魔術など使った日には」

考えたくもないとばかりにヴィ・ディルーは首をすくめた。

「なあ、魔法なしって単純にあんたが負けたくなかったからじゃないか？」

「……それもある」

拍子抜けしてしまうほどあっさりとヴィ・ディルーはそれを認める。

「案外、素直なんだな」

「我らは認めるべきことは認める。自らの劣る点を見定めることができるかというのは、致命的な弱点となろう。曖昧にすれば命取りになる」

「確かに」

真面目な性質の男なのだ、とアーネストは思う。
その真面目さが、どこかウィリアムと似ていると思った。

「だが、我らが殺しあつことはあるまいよ」

その言葉に、更に自分とウィリアムのことを思い出した。
アーネストも、そんなことがあるなんて思ってもいなかったのだ。
だから、問うた。

「なぜだ？」

だが、ヴィ・ディーラーの答えは、アーネストを戸惑わせるもので
しかなかった。

「……我は、あれにだつたら喜んで殺されよう」

莞爾と笑う。それは、その言葉の物騒さとは裏腹のひどく晴れや
かな笑みだった。

パタパタと音をさせて、ガルディアは夜の中を飛んでいた。
月が明るい。

雪が降り積もる森の中は、月光が乱反射して不思議な光景を描き

出している。絵心のある者がみれば、さぞ創作意欲がかきたてられただろう。

(だいぶ、留守にしたな)

先ほどまでは、成体の……通常の竜身であったのだが、小屋の近くにまで来たのでいつもの姿に变じたのだ。

この姿でいることにも大分慣れた。

不恰好であるとは思うが、常に主の傍らに在る為であれば、これくらいのことは何ほどでもない。

(何だ？あれは……)

外で酒盛りをしているバカがいた。

それも二人もだ。

たとえ、今が晴れていて月女神サラムが見守っていたとしても、この季節、外で酒盛りをするなんて正気の沙汰ではなかった。

(アーネストと……妖精だな)

スイールの友であろうとあたりをつける。

だとすれば、放って置いても構わぬだろうと近寄らぬことを決める。

「……おかえり」

ガルディアの出入り口は、スイールの寝室となっている屋根裏の明かり取りの窓だ。

もこもことした毛布を頭からかぶり、窓から上半身を半分だけ出

したスィールが、眼下の光景を眺めていた。

『ただいまかえった、我が主よ』

「寒かった？大丈夫？」

ふわりと微笑む。無表情がちだと思っていたのだが、慣れてしまえばそんなことはまったくない。

ひとりぼっちで暮らしてきたスィールは、他人とどう接するかがよくわかっていないだけだ。

何も言わなかったが、最初の頃は距離間をはかりかねて緊張していたのだろう。慣れた今では、ガルディアにはさまざまな表情を見せる。

『我は偉大なる竜族ゆえ、さほどのことではない。それよりも、ここそ寝台に戻るが良い。今宵は月が出ているとはいえ、まだまだ冷え込む。バカ共に付き合うことはあるまいよ』

「うん。……ねえ、ガル」

スィールはひょいっとガルを抱き上げ、屋根裏の梯子を下りながら、器用に窓を閉める。

『何だ？』

「……ディとアーネストが仲良しになったのは嬉しいんだけど、何か口惜しい」

『そうなのか？』

「うん。そう。……私が寝てるからって、内緒で斬り合いとかはじめるし……」

あんなに強い気がぶつかりあえば目だって覚めるよ、と軽く口を尖らす。

『男というのは、そんなことにも頭が回らぬほどバカなんだ。で、剣を交せば、それでわかりあったような気になってしまふ』

単純なのだ、とガルは説明する。

「私を抜きで酒盛りはじめるし……さつきはすすめてもあんまり飲まなかったのに」

『大方、斬り合うことを想定して制限していたのだろうよ。そんな細かいことは気にせぬことだ、主よ』

「でも、あのまま放って置いたら、そのまま寝ちゃって風邪引いたりとかしないかな」

風邪どころか、そのまま寝入れば、翌朝には凍りついた彫像となっ
っているだろう。

スィールの心配そうな顔に、ガルディアはにっこり笑って告げた。

『案ずるな、主よ。バカは風邪をひかないと言っ』

ものすごくいい笑顔だった。

「そうなんだ」

なので、スィールはあっさりとそれで納得した。

そろそろ眠気が襲ってきたこともある。

『そうだと』

ガルははっきりにきりきりぱりとうなづいて、ダメ押しする。

「ガル、口惜しいから一緒に寝てね」
『構わぬぞ』

スィールは、ガルディアをぎゅっと抱きしめる。
そうすると、何だか安心するような気がしたし、よく眠れるよう
な気がした。

『……おやすみ、我が主よ』

言葉には魂が宿る。それは、言魂と言われる。

我が主と彼が口にするたびに、その言魂が目には見えぬ呪となり、
ガルディアとスィールを繋ぐ。だから、ガルディアは不自然なくら
いそれを何度も繰り返し口にするのだ。自分とスィールとが更に強
固に繋がるように。

「おやすみなさい、私のガル」

その言葉に、ガルディアは雷にうたれたような衝撃を覚える。
それは、喜びだった。

爆発するような喜びが、ガルディアの全身を駆け巡り、心の中を
暴力的なまでに荒れ狂う。

「私の」というその言葉。たった四つの音！

それがこんなにも喜びをもたらすものだとは！！

ガルディアは、かつて、縛られることを何よりも嫌った己とは思
えぬ心地がしていた。

(だが……)

自分は変わったのだ、と思う。

今であれば、彼は何度でもその言葉を乞うだろう。たとえそれが、彼を従属させるものだったとしてもだ。

それほどに、その言葉はガルに喜びをもたらした。元の竜身であれば、思う存分咆哮をあげ、周囲を綺麗さっぱり焼き払っていたかもしれない。

驚くほどの寝つきのよさで眠りの世界に入ったスィールは、ガルのぎゅっと抱きしめる。

(この世界に、我ほど幸福な守護者はいないだろう)

それは、とてもとても幸せなことだった。

ヴィ・ディールの剣(4)

「バカだと思う」

「バカである」

大変気の合った一人と一匹は冷ややかな眼差しで二人を見やる。

「スイール、もう少し声を小さく」

起き上がって頭を押さえているヴィ・ディールはまだマシで、アーネストにいたっては完全に沈没だ。

途中で小屋の中に場所を移したらしく凍死は免れていたが、朝起きたスイールが見たのは行き倒れの野良犬2匹だ。

室内はまるで部屋中にワインをぶちまけたのではないかというくらいアルコール臭かった。

「デイのそんなとこ、はじめてみた」

くすりとおかしげにスイールは笑う。

「そうか？」

「うん。偉い人モードな時と私にもものすごく優しいモードの時しか知らないから……アーネストと随分仲良くなったんだね」

「……人間にしてはまあまあだ」

冷やかな口調ではあったが、それは、ヴィ・ディールにしては最大級の褒め言葉だ。

それに、アーネストを見る眼差しには険がない。

「このまま精進するなら、君の騎士として認めてもいい……」

「えらそー」

「当然だ。私はヴィなのだから」

「そんなの知ってるよ」

ヴィ・ディールは、懐の小さな皮袋から取り出した葉を口に含む。エデュアルの葉だ。香草茶の材料にもなるが、口の中がすっきりとして意識を明瞭にする作用がある。

「……で、それは？」

視線は、まるでぬいぐるみがごとく、スイールに抱きしめられている謎の生物に向けられた。

それは、ヴィ・ディールをして、初めて見ると言わしめる生き物だった。

「ガルは、ガルディアだよ。私の守護者」

「……君は、いったい何を守護者にしたんだね、我が友」

どう反応すればいいのかわかりかねるといった口調で、ヴィ・ディールは問うた。

昔から、スイールには変わったところがある。

普通の女の子が興味を示すようなものにはまったく興味を示さず、一番遊ぶ遊びがちゃんばらごっこだった。それがこうじて、スイールの剣術の腕はあがったのだが、それが良かったのか悪かったのか未だによくわからない。

ヴィ・ディールにしてみれば、魔術師であるスイールに剣は必要なかったのではないかと思えるのだ。

そもそも、これ以上強くなってどうする！と言うのがヴィ・ディ

ルーの本音である。

「ガルは、竜だよ」

ガルディアという名前には聞き覚えがあった。

人は過去の英雄にあやかかって同じ名前をつけるが、竜族は逆で、決して過去の偉大なる先人の名をつけることはない。つまり、ガルディアという名前は、ただ一頭の竜のものである。

「漆黒の竜王ゲーディア？」

「そう」

スイールはこくりとうなづく。

「……これが？」

子竜を縮めて丸めたような不思議な生き物は、はっきりいって不恰好だ。

ヴィ・ディルーが、この世界で最も美しい生き物だと思う竜とはちよつと……いや、かなり違っている。

「そう。ガルは、剣に封じられていたんだって……」

「それは……」

「魂の一部なのかもしれないし、記憶の一部なのかもしれない。ガルだってそれは自覚してるの。でもね、ガルはガルで、私の守護者だから」

細かいことはどうでもいい、とスイールは笑う。

ヴィ・ディルーは小さく溜め息をついた。スイールは、育て親に似て大雑把なところがある。

魔術師にとって、守護者は同じ命を生きる特別な存在だ。細かいところまで気にするべきだと突っ込みたいのをヴィ・デイルーは我慢した。

言ったところで、スイールは話は聞いてもまったく気にしないに違いない。

(まあ、スイールを守るに足る力はあるから……)

その不恰好な生き物には、ヴィ・デイルーにも量りきれぬ力を感じる。

原初の竜たる古代竜の王ゲーディアの欠片であるというのならば、それも道理であろう。

「我が友の守護者たるはじまりの王よ。我は、境界の守人たる妖精族に生まれし、二本目の枝を持ちし者。どうぞ、ヴィ・デイルーとお呼び下さい」

ヴィ・デイルーは優雅な仕草で礼をとった。中身は二日酔いのダメな人だったとしても、その仕草は実に優美だ。

『冴え凍る銀月のごとき妖精族の次の王よ、丁寧な挨拶いたみいる。我が名はガルディア。ここなるスイールの守護者だ。今後よしなに頼む』

ヴィ・デイルーの『ヴィ』は『次』あるいは『二番目』という意味だ。

妖精族において、それは次の妖精王に与えられる敬称だということとを、ガルは知っていた。

人間の世界で言うのなら、王太子とか皇太子ということになるのかもしれないが、血統で王位を継ぐことのない妖精族においては

『次の王となるべき者』という意味でしかない。

「ご丁寧にありがとうございます」

ヴィ・デイルーは軽く頭を下げる。

『したが、次の王たる身でありながら、このようなところに居て良いのか？』

「良いのです。スイールは我が友なのですから」

『妖精族は、あいも変わらず友情に厚いのだな』

「勿論。友は『永遠』なのですから」

当然だというように爽やかに笑った。

人間と違い、個を重んじる妖精族に人間の言う『家族』という関係は存在していない。なので、「血は水よりも濃い」という人の感覚は、彼らにはまったく理解ができない。

彼らは、氏族という単位で自らの属する集団を明らかにし、それに対する帰属意識と誇りとを強く持つものの、血縁ゆえの情や絆というものをほとんど意識することがない。

自らの氏族の伝統を継ぐ子を残す為のパートナーとして伴侶を迎えるが、それは人間で言う『結婚』や『婚姻』とはまったく違っていて、まずはじめに契約を交し、それに則り、生活を共にすることもあれば、閨を共にするだけということもある。

稀に、長期間の婚姻契約を交わす者もいるが、大概の場合、その契約は子供が生まれるまでということが多い。

なので、妖精族にとって『伴侶』とは、人生を共にする相手ではない。

だが、『友』は違う。

妖精族にとって友との絆は永遠だ。永い人生をともに生きる存在、それが『友』である。たとえ、一方が死んだとしてもその絆は変わらない。

妖精族にとって、友は一人残らず大切な存在には違いないのだが、彼らが『我が友』と呼ぶのは終生ただ一人だけである。

そして、『我が友』こそ、命を賭けて守るものであると妖精達は口をそろえて言う。

(……我を『我が友』と呼んだディーザ・リューンは、どうしただろうか……)

人の子に殺され、その身を裂かれた記憶はある。だが、その後のことはよく知らない。

刀に封じられた身であったせいだろうか、思考に何かブロックでもかかっていたかのように、今まで、一度もこんな風にディーザ・リューンのことを考えなかったことにガルディアは気付いた。

(少し落ち着いたら、ディーザ・リューンのことを調べてみよう)

スイールとヴィ・ディルールの親密な交流を考えれば、この先も妖精族と接する機会には恵まれるに違いない。

(確か、我らはケンカをしていたのだな……)

おぼろげな記憶を辿る。

よく覚えているおらぬが、くだらぬケンカだったような気がする。

まさか、そのまま別れることになるだろうとはどちらも思っていなかった。

(よく考えれば、我もまたあれのほかに友と呼べるような存在はい

なかった……)

彼は王であった。

王は孤独であり、かつてのガルディアはそれを孤独とも思っていなかった。

そして、彼が横に立つことを許したのはディーザ・リューンだけだった。

あれからどれほどの時がたったのかガルディアは知らない。

竜族には時を計るという意識がないのだ。

だが、そんなガルディアでさえも、長い時を経たと感じられるほどの時間が経ったのだという認識は持っていた。

長命種であることを知られる妖精族ではあったが、もはや当人は生きてはおるまい。

(だが……)

だが、彼と身近に接した者は未だ健在だろう。

妖精族に墓はない。

だが、代わりに彼らには氏族の中に必ず『語り手』と呼ばれる役目の者が居て、その血に連なる者の何らかの逸話を語り継ぐことで、故人を偲ぶ縁としている。

彼の種族の語り手に会い、その後のディーザ・リューンの人生の一端なりとも知れば良い、とガルディアは思った。

それが、ガルディアを『我が友』と呼んでくれた相手に対する誠意でもあり、彼を偲ぶことになるだろう、と。

そして、ガルディアは自身を我が友と呼んだ相手を思い出しなが

ら、目の前の、どこか初々しいカップルのような二人を生暖かい眼
差しで見守っていた。

ヴィ・ディルールの剣(5)

「ところで、スイール、その髪はいつたいたどうしたんだ？」

ヴィ・ディルールは、そつと手を伸ばし、髪に触れる。

大切に伸ばしていたはずのスイールの髪は、かろうじて刈り上げていないというくらいの長さしかなくなっていた。

それは、ここ数年は肩より短い姿を見たことがないヴィ・ディルールに、非常に強い違和感を感じさせた。

「……何かおかしい？」

「いや……君がそんなにも髪を短くするのは久しぶりじゃないか。

……何かの術に失敗でもしたのかい？」

最初から気になっていた、と言ってくしゃりと頭を撫でる。スイールはそうされるのが嫌いではなかったので、触れるに任せていた。その光景を目にしていたガルディアは、ふむ、と考え込む。

(異性を『我が友』とするのは、人間で言う恋人と変わらんように見えるものなのだな)

ヴィ・ディルールのスイールに対する態度はどこまでも甘い。そして、スイールもまたそれを許容している。

だが、彼らに「恋人同士なのか」と問えば、違つとどちらも否定するだろう。

むしろ、そんなことを問えば、ヴィ・ディルールは侮辱されたと感じるに違いない。

妖精族の『我が友』との絆というのは、すべてを超越する崇高な

絆であるとされている。

それは決して肉欲や情欲といったものを伴わないものだ。そもそも、妖精族はそういった欲望が薄い傾向にあったし、『我が友』にそのような欲望を覚えたとするならば、それを誰かに知られたりしたら、それだけで自害しかねないのが、彼らの種族的なメンタリテイだ。

「術は失敗しなかったよ。あのね、アーネストを助けるのに、ガルは自分が代償になるって言ったの。でも、私はガルと一緒にいたかったから」

だから、ガルを代償にする代わりに自分が代償を支払った、とスィールは笑みを浮かべる。

「どういう意味だい？っていうか、そもそも、どういう経緯であれを自分の騎士にしたの？」

あれ呼ばわりだったが、これでもヴィ・ディルーの中でアーネストの地位はだいぶ向上している。自分からアーネストについて問うだけでも大進歩というものだ。

「死にかけていたのを助けたの」

スィールはあっさりと答えた。

（端折りすぎだ、我が主よ）

『我が友』というのは、大概は同族、それも同じ氏族間の同性を相手に結ばれることが多い。

なので、竜であるガルディアとディーザ・リユーンとが絆を結ん

だことはとても珍しいことだった。

とはいえ、竜族もまた長命な種族であり妖精族とはとても友好的な絆を結んでいたので、珍しいとはいえ彼ら以外の例がなかったわけではない。

だが、ヴィ・ディルーのように異種族の……それも、『人間族』の『異性』を友に選ぶことはかなり珍しいだろう。ガルディアでさえも他の例を知らない。

「……髪だけで、足りたのかい？」

少し考えていたヴィ・ディルーが、確認するように丁寧に問いかける。

「えつと……」

視線が泳いだ。

(主よ、それでは、バレバレだぞ)

スイールはヴィ・ディルーにほとんど隠し事をしたことがない。妖精族の言う『我が友』の定義はスイールにはわからないことも多いが、少なくとも『我が友』であるヴィ・ディルーに対して、変に隠し事をしたり、嘘をつくというのはいけないことだと思っっているからだ。

言えないことがあれば言えないと言うし、内緒ならば内緒だと告げる。けれど、ヴィ・ディルーに言えないことなど、スイールにはすぐに思いつかない。

「スイール？」

ヴィ・デイルーはいかにも優しい表情を浮かべて、話をうながす。

「んーとね……その……」

「足りなかつたんだね？」

言葉に強い響きがこめられた。

「……結論から言うと、そうなるかも」

珍しくスイールの歯切れが悪かった。

「スイール、私は君に何て願ったかな？」

「えーと……術の代償の肩代わりは絶対にするな」

本来であれば、術の代償の肩代わりはできない。スイールの場合
は裏技のようなものだ。

「わかつてるじゃないか。なのに、それをしたのかい？」

「私だつてタダでそんなことしないよ。……ちゃんとそれに見合つ
代償は得たもの」

やや怒りを帯びたヴィ・デイルーとは対照的に、けろつとした表
情でスイールは言う。

「代償？何を？」

「ガル」

「意味がわからないな」

(主よ、気付くが良い。言葉を重ねれば重ねるほど、そなたの友の
表情は険しくなっていくぞ)

「あのね、最初、ガルがアーネストを助けるのに自分を代償に
って言ってたのね。だけど、私がガルを欲しいと思ったから」

だから、ガルをもらう代わりに私がその代償を支払ったの。とス
イールは幾分、自慢げに告げる。

自分を欲しかったと言われたガルディアはその言葉の響きにうっ
とりとし、すぐに自分の脳裏で何度もそれを繰り返した。それは彼
にとつて、どのような愛の告白にも勝る甘い響きだった。

だが、そんなガルディアをよそに、ヴィ・ディールの表情は険し
さを増す。

「で、髪の毛には何を代償にしたんだい？」

「……血をちよこつと」

「血を?!」

魔術的に良く鍛えられた……彼らはそれを磨きぬかれたと表現す
ることが多い……魔術師とは、その存在自体が魔力の塊である。

髪や爪といったその身体の一部は、とても高い価値のある触媒や
代償になるのだが、中でも、その『血』は最上級の代償だ。

「ちよこつとだよ」

スイールは親指と人差し指でごくわずかな量を示す。

「……スイール、ちよつと話をしようか」

につこりとヴィ・ディールは爽やかな笑みを浮かべた。

この笑顔が曲者だということをスイールはよく知っていたが、
何でそうなったのかがまったくわかっていなかったのはいささか警

戒心に欠けていた。

「何を？」

話すべきことは全部話してしまったし、隠していたこともついで話してしまっただのですっきりしたスイールは、軽く首を傾げる。

守護者たるガルディアはうっとり自分の脳内記憶を反芻していたので、迫り来る危機からスイールを救う役には立たなかったし、スイールの騎士であるはずのアーネストといえば、未だ、床に転がっている状態だったので更に役に立たなかった。

「君がどんなに大切な身の上であるか、をだよ」

「心配させるようなことしたっけ？」

きょとんとした表情で見上げる。

「今日は、もうどうせ出発できないだろうから、ゆっくりと話をしようか、スイール」

ヴィ・ディールの笑みが更に深いものになった。

そして、その日、スイールは自分には二人目の小姑がいることを知ったのだった。

ヴィ・ディールの剣(6)

旅立ちにふさわしいよく晴れた日だった。

「頭いてえ」

『当然だな』

ガルは冷ややかに言う。

相変わらずの扱いにアーネストは少しだけ笑った。

主大事なガルは、アーネストに対して、顔を合わせたその瞬間からいろいろと手厳しい。だが、決して自分を嫌ってのことではないことが何となくわかっていった。

おそらく、ガルディアは腑抜けている自分が大切な主の騎士になったことが気に入らないのだろう。

(つまりは、そこに何らかの期待を抱いているわけで……)

だからこそあたりが厳しいのだと思える節が多々ある。まあ、期待されているとまで思うのは願望かもしれないが、そもそも、スィールに彼の真名を受け取るように言ったのはガルディアだったのだ。大事な主にどうでもいいような人間は近づけないだろう。

「ねむい。まぶしい。頭がくらくらする」

隣に立つスィールは吹けば飛ぶといった力ない様子で、外套のフードを深くかぶる。

『……主よ、そんなに夜更かしをしたのか?』

「12時間耐久コースだった……ひどいよ、ガルもアーネストも！」
助けてくれないなんて、と口を尖らせる。が、疲れているのだから。その声にはハリがない。

「いや、主と友は非常に仲睦まじい様子だったからな」
「嘘。ガル、ぼーっとしてたし、そのうち一人で夢の中いつちゃうし！」

フードの陰からのぞく目つきが非常に悪くなっていた。

「アーネストは寝てるし！」

「あー、あれは寝てたんじゃなくて、潰れてたって表現すべきだな」

「そんなのどつちでもいいよ。助けてくれなかったのは同じだもん」
「……悪かった」
「すまぬ」

一人と一匹は、揃って頭を下げる。

「大変だったんだから」

スィールはそつと小屋の方に目をやった。

既に小屋は、すべての扉と窓が閉ざされている。今は、ヴィ・デイルーが封印しているところだ。

「デイはしつこいんだよ。絡み酒だし！」

その姿が見えないことを確認してでないと文句も言えないほど12時間耐久説教はこたえたらしい。

「絡み酒なんだ？それほど絡まれなかったけど……」

「それはまだまだ余裕があるってこと。でも、耐久説教の時とか言葉遣い変だったから、まだ酔いが残ってたんだと思うけど」

「あれでかよ……」

アーネストは酒に弱い方ではない。むしろ、かなり強い方だというのにヴィ・デイルーは更にその上を行くらしい。

「妖精族は基本、お酒に強い。ものすごく！」

「へえ」

「あとね、辛いものためなんだよ。だからね、頭来た時はスープに黒リムの実をすっていれとくの」

黒リムの実はするとすごく辛くなるんだよ、とスィールは言ったが、アーネストにはまったくどんなものかわからなかった。だが、スィールが話しているのを聞いているだけで、何だか満足した気になるから不思議だ。

それは、スィールが彼の真名を握る主であるからなのか、あるいは、それ以外の何かがあるのかはわからない。

だが、それをつきつめる必要は……今はない、とアーネストは思っていた。

(急がなくていい……)

彼らはまだ出会ったばかりで、お互いに何も知らないに等しかった。

だから、日々の生活の中で少しずついるんなことがわかっていくのが楽しかったし、そうやって距離が縮まっていることがわかるのもまた、楽しいと感じられることだったのだ。

「辛いもの食べるとどうなる？」

「人によって違うけど、ヴィ・デイルは怒って気絶する」

「……怒るんじゃないじゃねえ？目が覚めたら、また耐久説教くらうんじゃないのか？」

「大丈夫。気絶した後はだいたい忘れてるから」

「記憶、とぶのかよ……」

それは本当に大丈夫なのか？とアーネストは不安に思う。

「でもそれは最終手段で、記憶が残っていると、私も怒ってるから。

すっごい大喧嘩になる。そのせいで、じじ様に二人でお説教されたこともある」

「……そっか」

一生懸命話してくれる様子にアーネストは自然頬が緩んだ。

当初、ガリガリでさほど可愛いとは思っていなかったものの、こうして近しくなった現在は、スィールほど可愛い子供はいるまい、とさえ思っている。

半ば以上、どこかの親ばか保護者みたいな気持ちになっている自分が、アーネストはそれほど嫌ではなかった。牙を抜かれているような気がしつつも、そんな現状が心地よい。

スィールは、眠い、とつぶやいてあくびを一つかみ殺した。

「……疲れたら言え。背負ってやるから」

アーネストは、フードの上から頭を撫でた。スィールの頭は小さかったので、傍目には、撫でるといふより掴んでいるように見えたかもしれない。

「ん。ありがとう」

こくんとうなづく仕草が妙にかわいらしい。ドキッとさせられて、そんな自分にアーネストは苦笑した。

(まあ、この年齢は男と女の区別がつきにくいしな……)

学校に行き、異性に接するようになれば変わるだろうとアーネストは思った。

スイールが知れば、きっと余計なお世話だと思うに違いなかったが、この時はまだ、アーネストは、スイールの騎士であるというより代理の保護者になったという気分が強かったのだ。

「終わったぞ、スイール」

「ん。ありがとう、デイ」

こうして並ぶと、その身長差は頭二つ分に近い。

ヴィ・ディルーとアーネストはアーネストの方が心持ち低いかなといったくらいなので、アーネストとスイールの身長差も同じくらいある。

ヴィ・ディルーは雪の上に片膝をついて、スイールと目線を合わせた。

「デイ」

スィールは、そんなヴィ・ディルーにぎゅっと抱きつく。ヴィ・ディルーもまたその小さな身体をそっと抱きしめた。

「……気をつけて」

言いたいことはその何百倍もあるはずなのだが、ヴィ・ディルーの口から出たのはそれだけだった。

「平気だよ」

スィールは微笑う。

視線を交わす二人は、まるで口付けするような近さだった。なのに、そこには目をそむけたくなるようなベタついた甘さなどはなく、見ているアーネストが何かもやっとしたものを感じる深い何かがあった。

それが嫉妬であることを、アーネストは既に自覚していた。

「君が、心配だ」

スィールは、安心させるように、こつんと自分の額をヴィ・ディルーの額につける。

キスをしていると見間違えるほどの近さで、その瞳をまっすぐと見て、告げる。

「大丈夫だよ、デイ。アーネストも、ガルもいる」

ヴィ・ディルーは、首を横に振る。

「……………こういつとときにいつも思うのだ、なぜ、私はヴィなのかと」

目の前の男が、どれほどスイールと共に行きたいと思っているかを、今のアーネストは知っていた。

だから、余計な邪魔はしないよう、少しはなれたところで二人を見守る。

「バカだな、デイ。私はルウだよ？」

「……………わかっている。だが、心配するのは私の正当な権利だ、我が友」

「しょうがないなあ」

呆れたように、スイールは笑った。

恋人同士の別れというのでもなく、さりとして、家族の別れというのでもない。だが、その場を満たす空気は、どこか濃密であり、そして、同時に爽やかでもあった。

そして、その腕の中から抜け出たスイールは、ふわりと笑って言った。

「じゃあね、デイ、いつてきます」

「ああ」

それから、ヴィ・デイルーは一度目を閉じ、それから、深く息を吸ってその言葉を紡ぎはじめた。

「……………君の歩む道が平坦であらんことを」

それは旅人の出発を寿ぐお決まりの聖句だ。

ヴィ・デイルーは当然のように、空に魔法印を描きだす。

「善き事と出会うことを」

やや複雑な印は、光を帯びる。

「幸いに満たされんことを願う」

そしてスイールの頭上で光の粒子を放って消えた

精霊とごく近しい種族である妖精族は、生来、魔力に長けている。人の魔法士が呪文や呪印を使って発動させる魔法を、彼らは無言のままその意思一つで発現させることができる。

その妖精族の、それも次の王たるヴィ・ディルーが聖句を口にし、印を描きまでしたその聖なる願いは、スイールに確かな守護を与えるだろう。

「ありがとう」

スイールは柔らかく笑みを浮かべる。

「いや」

(まだ、早い)

ヴィ・ディルーは叫び出したい気持ちをこらえる。

正直、スイールが森を出るのはまだあと2年は余裕があってもいいだろうと思う。スイールは年齢以上に聡明な子供ではあったが、子供は子供でしかない。

だが、どうせその2年がすぎれば同じようにまだ早いと自分は思うに違いないという確信もあった。

すでに年齢を数えることをやめてしまったヴィ・ディルーに比べれば、たった14年しか生きていないなど、赤ん坊といつてもいいようなものだ。人間が齢をどれほど重ねようとも彼を追い抜くことはない。

結局のところ、彼は自分がスイールを過保護にこの森の中にしまっておきたいだけなのだ。

それがわかっていいたからヴィ・ディルーはスイールを止めない。

(スイールはルウなのだから……)

ヴィラードの養い子でその後継者たるスイールは、森だけではなく、もっと広い世界を知らねばならない。それはある意味、義務でもある。

「ガル」

パタパタとアーネストの周囲を飛んでいる守護竜を呼んだ。

『いかがしたのだ？主よ』

「そろそろ行こうと思って」

『そうか』

「偉大なる古の竜王よ、どうか、我が友を頼みます」

『そなたに頼まれるまでもない。我は守護者だ。安心するがよい』

ガルディアは胸をはる。

ヴィ・ディルーは苦笑をもらし、そして、アーネストを振り返る。

「……人の子よ」

「何だ」

ヴィ・ディルーが何かを投げてよこしたので、アーネストは反射的にそれに手を伸べて掴み取る。

それは、細い銀環だった。何の装飾もないただの環……スィールくらいならば、ちょうど腕輪になるサイズである。

「それを、おまえに貸してやる」

「いや、おれはこんなものを借りても……」

「ありがとう、ディ」

アーネストは装飾品やその類に一切興味がなかった。唯一興味があるとすれば武具の類だったが、それも、魔剣の主であった為に収集するまでは至らなかつた。だが、断りかけたアーネストの言葉をスィールが遮り、にこやかに礼を告げる。

「それは、おまえではまだ解放できまい。できるようになるまで、スィールに解放してもらおうのだな」

「……解放？」

首を傾げるアーネストにスィールは言う。

「これは、剣だから。ディ……いいの？ディの剣なのに」

「かまわない。私は君を守れない。せめて、私の剣が私の代わりに君を守ることを望む」

「……うん」

スィールはこくとうなづいた。

少しだけ泣きたいような気分になったのは、旅立ちへの不安からだったのか、それとももつと別な理由だったのかはわからなかつた。

「せいぜい精進するがよい、人の子よ。我から一本取れるようにな

「つたら、それはおまえにくれてやる」

「……その言葉、忘れるなよ」

「忘れぬとも。我は物忘れの激しい人の子とは違う」

ふん、とヴィ・デイルーはひどく尊大な表情を見せた。だが、どういうわけか、ヴィ・デイルーにはそういう表情がよく似合っているとアーネストは思う。

（こつこついうの、何て言うんだっけ？）

騎士団の友人が何か特殊な用語を駆使していたのだが、アーネストは思い出せなかった。

「行こう」

「ああ」

アーネストは、差し伸べられた手を取った。

それが、彼らの最初の旅の始まりだった。

エピソード

「……随分と面白いことになったものだね」

男はこらえきれぬように、くくつと喉の奥で笑う。

玉座に掛け、足を組み、略式の皇帝冠を指にひっかけてくるくと回している不真面目な姿は、目の前に立つ老人には見慣れた姿だ。

「笑い事ではございませぬ」

見慣れているからといって怒りを覚えぬわけではない。だが、それも毎日のこととなるとだんだんとその怒りが麻痺してくるような気がするから不思議だった。

(それに……)

公式の場において、目の前の主は、老人の知るどの皇帝よりも皇帝にふさわしい態度をとり、誰もが平伏さんばかりの威厳を發揮する。その神々しさに、老人は何度涙を覚えたかわからない。

それを思えば、多少の不真面目さには目を瞑ることができる。否、彼に仕えたこの十五年の間にそう諦めることができるようになった。

「仕方がなかるうよ、近年まれに見る笑劇だ」

押し殺した笑いを漏らす男の肩口から、つややかな漆黒の髪がこぼれ落ちた。

帝国貴族は、基本的に男であっても必ず結える長さの髪を維持している。公の場では髪を結うのが正装とされているからだ。

高い位置で一つにくくつただけの皇帝の髪は腰よりも長く、また、

すべてが真っ白くなった老人の髪も肩よりも長い。

「笑劇などではございませぬ！武のシュレイヤーンの、それも魔剣の使い手が、たかが一介の従騎士風情に遅れをとり、その姦計に陥れられて行方不明なのですぞ！」

いい物笑いの種だと老人は語調を強める。

「確かに武のシュレイヤーンの面目が立たないな」

「いかにも」

「……彼を団員にしていた黒竜騎士団の面目もだ」

「陛下っ……！」

老人……鉄壁宰相とも呼ばれるグスタフ・イオニア「エスラーデ」レーベルアーダ公爵は、ぎりりと奥歯を噛み締めた。怒り心頭とあったその表情は、幼い子供が目にしたらトラウマになりそうなほど恐ろしい。

だが、皇帝は、それを見て声をたてて笑った。

「笑い事ではございませぬ……！」

「そんなに怒ると血管が切れるぞ、グスタフ」

「そんなにか弱い血管はしてございませぬ！」

宰相のその切り返しがおかしい、と更に笑う。

「陛下っ……！」

「グスタフ、おまえ、本当に信じてるのか？あのシュレイヤーンの不良息子が、本気で自身の従騎士などにやられると？」

ありえないな、と、尚も笑い続けながら、皇帝は目元を拭った。

「それはどういう意味でしょう？」

「アーネスト」シユレイヤーンは、護国騎士<ル・レグザータ>でもないのに、剣を解放した護国騎士<ル・レグザータ>を相手に互角に戦う腕の持ち主だぞ？どれほど不意を衝かれたとしても、あの従騎士の腕では及ぶまい」

護国騎士<ル・レグザータ>とは、他国で言う魔法騎士に近い。剣姫と呼ばれる魔法士と一対で凄まじい魔力を帯びた武具を操る。

その存在は文字通り一騎当千。戦場を一人で圧することもできる帝国最強の武人たちだ。

「では、こたびのこの一件には裏があるか？」

「少し考えればわかることだ」

皇帝は、にべもなく言った。

「しかし、陛下、ウイリアム」デルスークは、庶子とはいえアヴェラルド候の子息ですぞ。その上、アーネスト」シユレイヤーンとは、周囲も認める親友同士だと……」

「余は、ウイリアム」デルスークが真犯人だとは一言も言っておらず、グスタフ」

どこか笑いたげにも見える表情をしている皇帝に、レーベルアーダ公爵は軽く眉を顰めながらも告げる。

「犯人とされている従者が犯人ではないのならば、彼を犯人と名指しし、唯一戻ってきた人間が真犯人であるのは自明の理です。魔剣の使い手とて、友には油断もしましょう」

「ああ、そうだと。そのとおりだ。……おまえは、それがわかっ

ているのに、反論するのだな」

常にどこか他人事のように冷ややかな皇帝の瞳が、不可思議な熱を帯びる。

(「ご自身の過去を重ねてらっしゃるのか……」)

「理解することと納得することは違います、陛下」
「年よりは理屈っぽくていけないな」

皇帝は嗤った。

反論しようとしたレーベルアーダ公爵は、その表情を見て口を噤んだ。

それが、どこか獯猛さと狂気とを感じさせる笑みだったからだ。元々武人であった皇帝は、顔立ちは整っているものの繊細な美貌とはほど遠い美丈夫である。そして、そういった表情をしている時の彼は、『皇帝』が人から逸脱した存在であることをより強く感じさせた。

このエシユリア帝国において、死後、皇帝は神として神殿に祀られる。それは決して故なきことではない。

「さて、シュレイヤーンは次に如何なる手をうつか……、アヴェエラルドはどう出るか、見物だな」

「陛下は、これが皇太子の座を巡る権力闘争の一環であるとお考えか？」

「……おそらくは違うであろうよ。だが、それすらも利用するのが帝国貴族という生き物だ」

「陛下」

「もっとも、それをも利用するのが皇帝であるのだがな」

皇帝はこらえきれないという様子で笑いをもらした。押し殺したような笑い声が、豪奢ではあるが寒々しく感じられるほど広い室内に響き渡る。

公爵は、失礼にならない程度に軽く頭を下げた。

「皇帝は狂気を持つ」

これは、帝国にとっての常識だ。

一般市民ならいざ知らず、貴族と名がつく地位にある者ならば誰もが知っている。

どのように穏やかで、どのように理性的であったとしても、玉座についたその瞬間から、その血に流れる狂気はその身の裡で芽吹く。それは発作のようなものであり、そして同時にその身が常人ではないことの証左でもある。

「誰も彼も踊るが良いのだ。所詮、この世界は血で贖われた泡沫の夢に過ぎぬ」

皇帝は更に高らかに笑い続け、そして、ぱたりとそれが止んだ。公爵は、ふと顔を上げる。

皇帝が、ゆらりと玉座から立ち上がった。

「陛下、どちらへ」

「……後宮」

当代皇帝の後宮に納められている美姫はいない。美姫どころか、誰一人として居住していない。

そこは、彼が玉座についた直後から、豪奢な廃墟と化している場所である。

「……アーネスト」

公爵は嘆息とともに小さな呟きをもらす。ぴたりと、皇帝が立ち止まった。

皇帝は玉座に着いたその瞬間から、個人としての名を喪失する。

『陛下<ヴェル>』という敬称か、『皇帝<レガート>』という称号のみで呼ばれ、死後は神号でもある諡で呼ばれ、そのほかの呼ばれ方をするのではない。

「……その名は、もう私のものではないのですよ、伯父上」

静かな低い声音で、囁くように男は言った。

そして、頭の片隅で、「私」という音を口にしたのは随分と久しぶりであると思い、そう口にしていた過去を想った。

彼はしばしそこに佇み、だが、結局、振り返ることなく歩み去る。

老宰相は、その後姿に恭しすぎるほど深く頭を下げた。

初めの旅の始まりの夜

小屋から森の入り口までは魔術で転移した。

ヴィ・ディルーがにこにこ笑いながら手を振り、なぜ手などを振ってるのだ、と思っていたら突如として術が発動した。

スィールは、よほど大掛かりで特別な……アーネストを助けたよ
うな……術でない限り、杖も呪文も必要とせずに発動させる。それ
は、まるで呼吸をするかのように自由で、自在だった。

眩暈のような感覚がしたと思ったらその次の瞬間には森の入り口
において、アーネストもガルディアも一瞬、何がなんだかさっぱりわ
からなかった。

(いや、我の方がまだアレよりはわかっているだろう)

魔術を礎に築かれた帝国のその中心たる選帝候家の一員であり、
最高位の金位の魔法士でありながら、アーネストのそちら方面の知
識は一部をのぞけば、一般貴族より少しマシな程度でしかない。

だが、竜族は魔法を呼吸するがごとく使う。否、魔法と意識する
ことなく使う。たとえば、竜が空を飛ぶというのは、自力飛行だけ
ではなくごく自然に魔法の助けを使っているのだ。そして、長命種
である為に、蓄える知識の量も人とは比べ物にならない。

そういう意味では、スィールはまるで竜族のようだと思う。その
魔力量も、魔法……スィールの場合は魔術……の使い方も。そして、
師から知識を継いでいるという点もだ。

アーネストは、スィールが何となくすごい魔術師であるというこ
とはわかっているかもしれないが、それがどれほどのものなのか正
確にはわかっていないに違いない。

「あのね、あれが麓の村」

森の入り口から、眼下に見下ろした集落は本当に小さかった。それでも、何箇所からか煙があがっていて、そこには確かな人の営みがあるのだということがはつきりとわかった。

「ダース」

スィールは手元の地図をみせて、村の名を告げた。

その手書きの地図は、スィールの育て親が若いころに使っていたものだという。一般的に地図などに使われているラーチ紙は、ラーチイスという繊維質の多い草で作られているのだが、スィールのそれは布製だ。

布製はかさばらないし、使いやすい。多少値段がはるが、魔術師や魔法士と呼ばれる人間の大半は、布の地図を選ぶ。特殊な染料を使った地図は、魔力に反応し、書き換えが容易に可能だからだ。

「最果ての村？」

「そう言う人もいる」

アーネストの言葉に、スィールはこくりとうなづいた。

沈黙の森から最も近いその集落ダースは何もない村だ。だが、帝国の最辺境にある村であるということ、その名だけは帝都でも知られている。

「ここからだとか村まで2時間くらいかな」

「わかった。……さつきみたいに魔術だか魔法だかで行かないのか？」

「行かれるけど、でも旅をするんだから。……旅は、転移の魔術はできるだけ使わないんだよ」

それが、旅のルールなんだから、とスイールは当たり前前のことのように言った。

「……そうか」

誰が言ったのかは、何も言わなくてもアーネストにもガルディアにもわかったのでそれ以上は何も言わなかった。

スイールが定期的に薬草や毛皮などを売りに来ていたダース村には、宿屋兼酒場兼食堂が一軒だけある。その隣が、薬草でも毛皮でも何でも買ってくれるこれまた一軒きりの雑貨屋だ。

小屋から持ち出した旅に携帯するには適さないさまざまな食品……酢漬けの野菜や、残りわずかな野菜や肉を売り、干し肉やアロサという旅人の為の携帯食料と交換するのだとスイールはアーネストとガルに説明をした。

「……こんな時期に生の野菜は貴重だから、もう一声」

「でもよ、旅に出るなら邪魔になるよな？」

「隣の宿の女将さんなら、きつとたくさんのアロサとか干し棗なんかと替えてくれるよ？」

スイールは、いつそ無邪気にも見える様子で首を傾げる。

その腕に抱かれたガルも大きな荷物を背負ってきたアーネストも、

先ほどからまったく口を挟む隙がなかった。

というより、スィールの独壇場だった。

アーネストが交渉したとして、スィールより上手にできるとは思えなかった。

一人で生活をする、ということは、ありとあらゆることを自分でしなければならぬということなのだ、アーネストは改めて認識する。

「あー、坊主にはかなわんな、ほれ、おまけだ」

雑貨屋の瘦せこけていくせに背は高い親父は、台の上のアロサのつまった袋の中身を更にひとつかみ増やし、干し棗の小袋を加えた。

「ありがと。それから、次はこれ。アルベの小さいのを塩漬けにしたやつ」

スィールは、アーネストが背負っていた背囊から壺詰めを出す。雑貨屋の親父は壺のふたを開けて目を細めた。

「味見していいよ」

「どれどれ」

いそいそと箸をもってくる親父は、一切れつまんで口に入れる。

「相変わらず、坊主んとこのアルベはうまいなあ」

「丁寧に下処理してるから」

アルベという川魚は、内臓がおそろしく苦いので綺麗にとりのぞかなければならないのが手間なのだが、冬は軽く脂がのっけていてと

でもおいしい。アルベの加工品は人気があり、帝都では高級珍味として知られている。

「……何と交換したいんだ？」

「乾燥したラチエス」

ラチエスという種類の草を干したものはタバコ草とブレンドすると爽やかな後味のある煙草ができあがる。

このあたりの土地は痩せているのでほとんどの作物が育たないが、このラチエスだけは別だ。寒冷地でもちゃんと育つし、そのほかの作物よりも、地域ごとに微妙に味が異なるとかで、この地方のものはすつきりとした後味があるとかで人気が高い。

「それならちょうど良かった。去年収穫して干したやつを一昨日出したばかりだ。草のままでもいいな？」

「その方がいい」

草のまま、使う直前に刻むほうが香りが高くなる。生の草から搾り出すオイルはクスリとしても取引されているという。

驚きの目でそれを眺めているアーネストとガルをよそに、スイーは次々と目的のものを手に入れてゆく。それは手馴れたもので、彼らが口を挟む隙はない。

（俺の出る幕じゃねえ……）

アーネストは心底そう思っていた。

年上の……成人した男であり、スイールの保護者という感覚でいたアーネストだったが、この第一段階で自分の考え違いを思い知らされる。

「……おじさん、いつもいっぱいおまけしてくれてありがとう」
「ったく、坊主には敵わないな」

淡々とした口調で交渉を進めつつ、最後にはにかんだ笑みを見せるところなどは絶妙のタイミングだ。

目の前の雑貨屋の親父は満更でもない様子だし、おまけのリムの実が追加されている。

笑顔というのはいつものこにこ振りまいているよりも、ここぞという時に見せられたほうが破壊力が大きい。

「……どうしたの？アーネスト」

「いや。慣れたもんだと思ったんだ。ラチェスなんて何に使うんだ？」

「あんまり荷物にならないし、街で高く売れる。……田舎は物々交換が基本だけど、帝都ではお金が必要になると思うし」

何度も繰り返す思うことだが、この年齢の子供とは思えない。
その生活力の高さに思わず頭が下がりそうだった。

「……スイールは、旅に出たことがあるのか？」

「少しだけ。……あと、ちょっとだけ街で暮らしたこともある」

その時のこと思い出しながら、いろいろ準備した、と告げる表情に気負いはない。

（何ていうか……落ち着いてるなあ）

自分がスイールの年齢のときはどうだったんだろうか？と考えて、アーネストは思い出せるような記憶が一切なくて愕然とした。

記憶喪失というわけではない。単に、覚えていられるような特別

な記憶がなかったのだ。

その頃の年齢なら、おそらくは騎士団に居て従騎士をやっていた頃だと思っただが、何度考えてみても記憶に蘇ってくることはない。

(特別なことがなかったんだろうな……)

開き直すこともできず、どうしていいか悩み続けていた時期でもあった。

「坊主、旅に出んのか？」

「うん」

交換しているものを見れば、それは一目瞭然なのだろう。

「気をつけていけよ」

「ありがとう」

「これをもてばいいか？」

「うん」

だいぶ空になった背囊に、交換した品を詰めていく。

「今夜は隣に泊まるのか？」

「そう」

「今日は蕪のシチューだっけって言ってたぜ」

雑貨屋の親父のその言葉にスミールは小さな笑みを浮かべた。

「しかし、真冬に旅するなんてねえ」

「大丈夫。雪には慣れてるし、魔法も使える」

「そついや、あんたは魔法が使えるんだつたね。……いつものじいさんはどうしたんだい？最近、姿を見ないけど」

宿兼酒場兼食堂の貫禄のある女将は、気安い口調で話しかける。

月に一度くらいのペースで村を訪れていたとスイールは言っていたが、それなりに顔見知りではあるらしい。

「……じじさまは、遠くに行ったの」

「遠く？」

「空の向こう」

空の向こうには天の国があると言われている。

そこはエシユリーダ女神の治める地であり、死者はそこで次に生まれるまでの時間を過ごすのだと教会は教えている。

「悪いことを聞いたね」

「ううん。いいの。じじさまは長生きだったし、寿命だったから」

しみりとしそうな雰囲気だったが、スイールは明るく続ける。

「あのね、蕪のシチューと黒麦のパンにする」

「……それだけか？」

「えっと、デザートにリムの実。ガルと分ける」

「そうか」

「アーネストも好きなの食べて。あ、でも、お酒はだめ！」
「昨日の今日で飲むか！」

「だいたい、まだ周囲には酒臭さが漂っている気がする。アーネストはそこまで節操がないわけではない。」

「むしろ、しばらくは禁酒しよう」と心に誓ったのだ。

「だって二人で仲良く酒盛りしてた」

「あれで、仲良いわけねーだろ」

「でも、デイは人間嫌いだし、そもそも、気難しいからあんまり友達いないんだよ。あれなら仲良しの部類にはいるよ」

「あの綺麗なーちゃんが聞いたら泣き濡れそうな、嬉しくねえお言葉をありがとうよ」

「どづいたしまして」

ヤケクソなセリフにスィールにはにつこり笑って返す。自分の真意は絶対に伝わっていないとアーネストは思った。

「ほら、シチューだよ。たーんと食べるんだよ」

「わあ」

立ち上る白い湯気。食欲をそそる匂いにスィールが笑みを漏らす。

「はい、ガルの分」

『つむ』

女将の心遣いか、大き目の木椀にたっぷりと盛られたシチューを、

スィールはガルと分けあう。

二人分とつてもかまわなかつたのだが、当人同士が分け合うこと前提で話をしていた為、アーネストは何も言わなかつた。

魔術師と守護者の絆が強固なものであることは昔から言われていることだが、目の前の二人を見ているとそれもなるほどとうなづける。

ガルの世界はスィール中心に回っており、誰に対してもさほど強い感情を抱かないように見えるスィールもガルにだけは心を寄せる名を捧げているとはいえ、未だ己の立ち位置を決めかねているアーネストはやや置いてけぼりだ。

「熱いから気をつけてね」

「大丈夫だぞ。かつて、我は天をも焦がすと言われていたデイスリ才火山の焔を喰らうていたのだからな」

「すごいね、ガル」

「うむ」

何がすごいのかまったくわからんと思つたが、口を挟むことははばかられた。

ガルディアのように全てをスィール中心に考えることができれば良いのだ。だが、スィールが主であるのだと頭では理解しているのに、アーネストはどうあつてもシュレイヤーンの候子である自分から抜け切れない。

主を得た喜びを覚えたのは確かであり、そのことに一時は解放されたと思ひながら、結局はまた元の自分に戻っていて、どう接していいかわからぬまま曖昧な態度を取り続けている。

スィールのせいにするわけではないが、スィールがアーネストを自身の騎士として扱わないせいもあるだろう。貴族ではないスィールは、騎士がどういふものかわかっていないのかもしれない、とも思う。

「……ガルは、人間の食いモンで足りるのか？」

脈絡のない問いを口にする。

あまり突き詰めて考えたくなかった。

(俺は、逃げているのかもしれない……)

『我は何も食わずとも生きていける。主、ある限りな。守護者とはそういう生き物だ』

「守護者ってより、守護竜って言うべきじゃないのか？」

『そうだな。まあ、呼び方などどうでもいいのだ……ああ、使い魔などという名で呼ばれることは御免被る』

何が嫌なのかガルディアはぶるりと身体を震わせた。

『人の食べるものは我にとって本来の意味で栄養にはならぬ。だが、そうだな……我は、共に食す主との絆を感じながら、作り手の気持ちというものを食べていると思うのだ。きっと、その気持ちを美味と感じるのだろう』

そう言っつて、ガルディアは蕪にカブリつく。スイールはにこにこしながらそれを眺め、そして、自分も木匙を口に運び、おいしいと呟いてさらに笑みを重ねた。

それは何だか見ているだけで幸せな光景だと思い、アーネストの頬も自然に緩む。

「私もガルやアーネストと一緒に食べると、前よりずっとごはんがおいしく感じる」

それまでが孤独すぎたからだ、といおうとして、アーネストはやめた。

スィールは、自身の孤独を孤独であると認識することすらできていない。口に出したところで軽く首を傾げるだけだろう。

『……かつての我が今の我を見れば、飼い馴らされたと思うのやもしれぬ。だが、我は今の我を案外気に入っているよ』

ガルディアは呟くように言い、そして小さくゲップをした。その姿が何だかユーモラスで、アーネストは笑った。

初めの旅の始まりの夜 それは、それぞれに何度も思い出す
幸福な記憶となった。

プロローグ

いつか絶対こんな村出て行く。

男なら、誰だって一度や二度、そう思うことがあるはずだとリドは思う。

(まあ、オレは毎日思ってるけど!)

「リド、さっさと水汲んできな」

「わかってるよ」

「それが終わったら、薪割りだよ」

「わかってるってば!」

苛立って声をあげる。

「まったく、さっさとやらないと日が暮れちゃうよ」

父のグレイとともに宿を切り盛りする母のアイラは、リドに追い討ちをかけるように更に用事を言いつけた。

「薪割りが終わったら、エル爺の店でナムの粉を10セト頼んできとくれ」

リドは文句を言う気すらなくして、溜め息をつく。

(どうして、オレばっか、こんなに毎日、毎日……)

手伝いをしなきゃいけないのはわかる。

リドの家はこの村にたくさんある宿屋のうちの1軒で、料理がう

まいことでちよつとは知られている。それほど大きくないし、正直、人を雇う余裕がないことは子供のリドにもわかっていた。けれど、13歳のリドにとって、手伝いだけで毎日が過ぎてゆくのは、苦痛でしかない。

(こんなの、本当のオレじゃないんだ……)

水汲みとか、薪割りとか、おつかいとか……そんなことは自分のやる仕事じゃないとリドは思う。

リドは宿屋の親父になんかならないし、料理人にもならない。

(オレは剣士になるんだ)

最強の剣士になって、魔法使いと僧侶を仲間にして、大陸中を冒険して回る。それがリドの夢だ。

(それで、そのうち、護国騎士<ル・レグザータ>になってくれて迎えが来てさ……)

美しい剣の姫をパートナーにし、帝国の危機を救う帝国最高位の騎士……護国騎士<ル・レグザータ>は、いつだって憧れの存在だ。リドの思い描く未来予想図の中で、リドはいつだって無敵の剣士で、最高のヒーローだった。

(けど……)

それがただの夢でしかないことに、リドだって気付いている。農民の子に生まれたら農民に、商人の子に生まれたら商人にしかなれないのだ。よほど特別なことがない限り……。

薪割りと言っても、リドができるのは短く切り分けられた丸太を使いやすく八つ割りにすることだ。

今年の誕生日に、リドは良く切れる山刀をもらった。薪を割るのにも使えるし、枝を払ったり落としたりするのも簡単にできる切れ味の良いもので、グレイが街で買ってきてくれたものだ。

(本当は、ローグみたいに剣が欲しかったんだけど)

薪割りはなかなかコツのいる作業で、最初はなかなかうまくできなかったのだが、そのうちにリドは気付いた。

丸太にはうまく割ることの出来るラインのようなものがあり、そこに刃をいれてやると、たいした力も使わずに割れるのだ。

今では、半刻もあれば一週間分くらいの薪が割れる。

(まあ、この山刀も悪くないけどさ)

よく切れる山刀は、実は密かに自慢だったりするのでリドは大切にしていた。

けれど、やはり剣が欲しかったと思う。

(……ただの宿屋の息子じゃあ、やっぱり騎士になんかなれないのかな……)

はあと大きく溜め息をついたリドの耳に、カン、カンと木が打ち合わされる音が聞こえてきた。

(あ、ローグが修行してる……)

思わず立ち上がった。見に行きたいのだが、躊躇う。まだ言いつけられたことは全部は終わっていないのだ。

(でも……ちょっとだけだし……)

ローグは三軒向こうの家の、元騎士の父を持つ3歳上の友達だ。優しい性格のローグは、本当は騎士になどなりたくないのだとよくぼやくのだが、なりたくてもなれない……未だにちゃんと修行すらできないリドにしてみれば贅沢だと思う。

「すまない。このあたりに銀のスプーン亭という宿はないだろうか？」

薪を積み、ローグの家に駆け出そうとしたリドに、その人は問いかけた。

着ているものは村の人間たちとそう変わらなかったし、他の旅人に比べて特におかしいところがあったわけでもない。

けれども、リドはその男は特別な人間なのだとすぐにわかった。

言葉遣いもそうだが、醸し出す空気が、他の人間と違っていた。

何よりも、その手……まだ新しい薄皮の手袋は、剣を持つ者特有の擦り切れがあった。

「……それは、ここです」

「そうか、ありがとう。……スィール、着いたぞ。スィール？」

男は少しほっとしたような表情をし、そして背後を振り返る。

ついてきていると思っていた人間の姿がなかったのだろう、いさ

さか大げさとも思える絶望的な表情で男は周囲を見回し、そして絶叫した。

「スィールっっ!!」

村中に響くような絶叫だった。

迷子と竜の祠(1)

アーネストが絶叫を響かせたのと同じ頃、スイールとガルディアは、勿論、同じ村の中にいた。

『どうしたのだ？我が主よ』

「……………今、誰か呼んだ？」

『ふむ。そういわれればそんな気も……………』

「……………まあ、いいや」

あっさりとそれを切り捨てる。

今のスイールには、それ以上に大事なことがあった。

「それより、こっちだよ、ガル。こっちから気配がするの」

『うむ。我も感じるぞ』

スイールは気配のするほうへ足を向ける。

周囲を見回せば、どうやら村のはずれにまで来ているらしい。

「強くなってる……………たぶん、この奥なんだけど」

『そのようじゃな』

ラカータに入るとすぐにスイールは不思議な気配を感じた。

強く、そして、弱く……………揺らぐその気配は、なぜか放っておけない気がした。まるで点滅して警告を発しているかのように感じられたのだ。

もっと強くその気配を感じ取ろうとして立ち止まり……………そして、気配の方角を探知し終えたときには、目の前にあったはずのアーネストの姿はなかったのだ。

「アーネスト、どこに行っちゃったんだろうね」

『そうだな。あれは昔からフラフラしすぎなのだ』

「そうなの？」

『ヤサグレテおつたからの。まあ、あれもいい年齢の大人だ。迷子になったところで一人で帰れぬというわけでもあるまい』

「そうだよね」

アーネストが聞けば、迷子なのはおまえらだ！と怒鳴るに違いな
言い分だったが、スイール達は大真面目だった。

アーネストにとって極めて不幸なことに、スイールたちの主観か
らすればいなくなったのはアーネストであり、従って迷子になった
のもアーネストだった。

「大人だから、探しに行かなくていいよね？」

『構わぬであろう。だが、我らだけで良いのか？』

「大丈夫だよ。あんまり奥まで行かなければいいし、おかしかった
ら出直せばいいし。それに、入り口の座標も覚えてるから……いつ
でも跳べる」

『うむ』

更にアーネストが不幸だったのは、独立独歩、一人で生きてきた
スイールには、アーネストを待つとか、アーネストと一緒にいくと
いう発想がまったくくないことだった。

加えて、連絡をいれるという発想も欠片もなかったので、当人は
まったく知らなかったものの、結果としてアーネストは一人置き去
りにされることとなった。

「ラカータは竜の祠があるんだって。その祠なのかな？」

『どうであろう？かつて、竜族はこの世界のどこにでも居たのだから、竜を祀る祠がどこにあっても驚かぬが、このようなおかしい気配がするようなものに心当たりはないぞ』

「そっだよな」

この時代、竜族もまた妖精族のようにゆっくりと衰退しつつある。

『竜』が、単体としてこの世界の生命連鎖の頂点に立つ生物であることに変わりはないが、種族としてであるならば、竜族はもはや頂点を争うことなどできぬほどに数を減らしてしまっている。

一番の原因は、これまた妖精族と同じで子が生まれにくい事だ。

竜族、妖精族を問わず、長命種は子が生まれにくい。妖精族よりはるかに早くそのことに気付いていた竜族はあらゆる手段を尽くしたが、その衰退をとどめることはできなかった。

竜族の中の貴族とも言うべき古代種はすでに絶滅に瀕しており、天竜種と呼ばれる数種族が細々とその血脈を伝えてはいたが、大陸で最も良く見られる竜は、魔力も言葉も持たぬ地竜種……人間が飼いならし、乗騎とする飛竜がほとんどだった。

「……術の気配なんだよね」

『魔術のか？』

「そう。……んー、なんか嫌な感じなの」

『ならば、行かぬほうが良いのではないか？』

「でも、変な風に暴走しているのだったら止めないと」

『なぜ、主が？』

「私はじじ様の弟子だもの」

じじ様はね、いつも言ってたよ、とスィールは弾んだ声音で語る。

「魔術師は、世界の天秤の担い手。誰かが天秤を傾けるようなことをしていたら……もし、それを知ることになったら、全力でそれを止めなさいって」

『……主よ、主は、正義の味方にでもなるつもりか？』

「うっん、全然」

あっさりと首を横に振るので、ガルディアは安心した。

「じじ様は、わざわざ自分から首を突っ込みに行く必要はないって言ってた。けど、道を歩いててそれにぶつかったら、それは運命なのだから、仕方ないから頑張りなさいって。その時は手段を選ばなくていいからって」

気が遠くなるほどの時を生きてきたガルディアであっても、何ともコメントに困る言い草だった。

『……主のじじ様は、変わり者だな』

かろうじて、それだけ述べる。

「そうかなあ？」

『そうだと』

よくは知らなくともそれだけは断言できる、と力強くうなづく。

(それに、手段は選んだほうがいいと思うぞ)

だが、ガルディアはあまりおしゃべりなほうではなかったの、思っていたことを口に出すことはなかった。

「なあ、兄ちゃん、兄ちゃんはどうしてウチのこと知ってたんだ？」
「俺の従騎士がこの村に来たことがあったんだ。それで話を聞いたことがある」

「へえ、兄ちゃん、本物の騎士なんだな。すげえ！」

「別にたいしたことではない。今は、騎士団も休んでいるようなものだし」

「騎士団？すげえ！」

アーネストは、宿の女将の息子だという少年の案内で表口へと回る。

騎士に憧れているらしい子供は、あまりに何度もすげえを連発するのでアーネストは苦笑した。

「兄ちゃんの、その、じゅう……えつと、じゅう……」

「従騎士」

「そうそう。じゅうきしって人は俺んちのことを何て話したの？」

「ああ……。メシが最高にうまかった、と」

とりあえず、宿を取るのが先決だった。スイールにも宿の名は告げている。闇雲にさがしても行き違いになるだけだし、探すにしても拠点を決めてから探すほうが楽だろう。

「へえ。それは嬉しいな。うちの父ちゃんの料理は最高にうまいんだぜ！俺のオススメは鳥だな。鳥を焼いたのを塩とニンニクのソースで食べるヤツ。皮がパリッパリなのに、肉はジューシーでさ。塩でさっぱりしてるから一羽丸ごとだって食えるよ。麦酒にだってぴったりなんだぜ」

「へえ、それはうまそうだ」

ぜひ、夕食にはそれを食べようと決める。

現在、一行の財布を預かっているのはアーネストだ。スイールいわく、大人が持っていた方が安全だからということに任された。

財布の中身は意外に潤沢で、多少の贅沢をしても許される余裕があった。

(それに……)

少し大きい街に行けば、アーネストが身につけていたカフスなどの装飾品を売ることも出来る。そうすれば、生活費のことでスイールをあれこれ悩ませることもないだろう。

「母ちゃん、お客さん」

「あいよ……。ほら、あなたはさっさとエル爺のここに行ついで」
「わかつてるよ。じゃあね、兄ちゃん。……あ、途中で兄ちゃんの連れだつていうヤツ見たら、うちにいるって言ってやるよ。どんな格好してんの？」

「深草色の外套を着て、こつ……空を飛ぶ不恰好なトカゲみたいな生き物と一緒にいる」

「空を飛ぶ不恰好なトカゲ？」

竜の生息地は限られている。辺境で暮らす一般人に小さくして丸

くしたような竜と言ったところで通じるとは思えなかったので、ついで説明に苦慮する。ガルディアが聞けばさぞ怒るだろうとは思っているが、他に適切な表現がみつけれなかった。

「……見れば、わかる」

「うん。わかった」

アーネストは駆け出す少年の後姿を見送る。

「お客さん、連れてっていったけど……」

「ああ、子供が一人いる。同じ部屋で構わないんだが、部屋はあるか？」

「大丈夫だよ。食事はどうするんだい？」

「夕食と朝食を頼む」

「じゃあ、二人分で銅貨12枚だ。部屋は二階の一番奥。延長するようだったら言っとくれ。割引するからね」

「ありがとう」

金と引き換えに鍵を受け取る。鍵といってもたいしたものではないので、貴重品を部屋においておくことはできない。これはどの宿でも一緒だ。宿の人間がどうこうというわけではなく、不特定多数の人間が出入りする為だ。

(さて、どうするか……)

アテがあるわけではなく、ここで探しに出たところで、行き違いになる可能性が高い。

(迷子だとすれば、動かずに待っていてくれるのが一番良いのだが……)

スィールの場合、あまり待っていないような気がした。

(いや、しかし、どんなに落ち着いてはいても、まだ14歳の子供だ。こんなところで連れとはぐれれば心細くて仕方がないだろう……)

アーネストには、いささか夢見がちなところがあった。

「あれ、お客さん、出かけるのかい？」

「ああ。……行き違いになるかもしれないが連れを探してくる。もし来たら、部屋に通してやってくれないか。スィールという名の子供だ」

「あいよ」

アーネストは、外套の襟元の紐をきつちりと結びなおして外に出る。冬の日差しは意外に強く、フードを目深にかぶった。

(とりあえず、村の入り口のほうから探すか……)

小さな村であっても、人一人を探すのはそんなに楽なことではない。
い。

(世間知らずな子だから……どんなに心細く思っていることか)

脳裏をスィールの心細げな顔がチラつく。

アーネストの足は自然と速まった。

極めて残念なことに、アーネストは、まだ己の主の性格をまっただ

くわかっておらず、相互理解の道は果てしなく遠かった。

迷子と竜の祠(2)

「……………変だね」

『うむ』

強く嫌な気配を発していたはずなのに、近づけば近づくほど、その気配は薄れてゆく。

というよりは、むしろ……………。

「……………浄化されているのかな」

『そのようだな』

「……………んー、たぶん土地に染み付いた穢れが何かで、祠か小さな神殿があつて、そこで術が今でも動いているんだと思う」

『随分と具体的だな』

「そういう例がたくさんあるから。昔からの神殿とか祠っていうのは、人がたくさん死んだ処刑場とか、戦場の跡地とかに建てられることが多いんだよ。穢れた地は人の精神を蝕むから、そうやって祠とか神殿にして隔離して浄化するの。何箇所か見たことあるの」

『ほお』

「前にじじさまとちよつとだけ旅したことあるって言ったでしょ。そついう調査の旅だったんだよ」

じじさまは古代遺跡の研究者だったから、とスィールは言う。

『遺跡というのは、こんなにも人気のない場所にあることが多いのか？』

どんとんと村の中心地から離れていくが、スィールはまったく気にしない。雪はかなり積もっているが、常に軽く浮いているスィー

ルにしてみれば、どれほど積もっていたとしてもあまり関係がない。しかも、ちゃんと人の通れる道が存在しているのだからまったく問題ないといっつていい。

「元は中心地にあつたり、街道沿いだつたりすることも多いよ。でも、穢れた地つていうのは、どれほど栄えていたとしても、どういうわけか自然と人氣がなくなっていくの。何となく嫌だなあってみんな思うみたい。隔離しているわけだからその方が都合がいいこともあるんだけどね」

『人間は、意外に敏感なのだな』

「当たり前だよ。人は……弱いんだから」

この世界には多くの種族があるが、その中でも人間ほど弱くもろい種はないとスィールは思う。人間の中にも幾つかの例外はあるがそれは突然変異にすぎない。

どれほど鍛えても純粹に肉体的な強靱さは竜族を越えることはなく、魔力量的に妖精族を越えることもない。更に、平均寿命は100歳には到底届かない。

何一つとして、頂点にたつ能力を持たないのが人という種だ。

『確かにひ弱な種族だな』

「でも、心は誰よりも強くなれるんだつて、じじ様がよく言つてた」

そう言つた時の老人の誇らしげな表情を、スィールは今でもありありと思ひ出せる。

あの横顔を思い出すたびに、スィールも自分もそう思えるようになりたいと思う。

『心、か……』

「私も強くなりたいんだ」

『主は、充分強いと思うぞ』

魔術師に一番必要なのは強い意志力だ。世界を従える意思の力……それは、強い心から生まれるものだ。

あれほどの魔術を行使する以上、スイールの心が弱いはずがない。

「そうかなあ？」

『そうだとも。そもそも主は、そんなに強くなってどうするのだ？』

「大切なものを守るようになりたいの」

『大切なもの？』

「うん。……今はね、ガル。それから、アーネスト！」

満面の笑みでスイールは言う。

その言葉に、ガルディアは一瞬凍りつき……あろうことが羽をうごかすのを忘れて墜落しかけた。

それほどまでに、スイールのその笑みは強烈だった。

一点の曇りもなく澄んだ笑み それが自分に向けられた

のだとそう思うだけで、身体が震えた。

「……どうしたの？ガル」

墜落しかけたガルディアを抱きとめ、ぬいぐるみのように腕に抱えたスイールは軽く首を傾げる。

『……いや、何でもない。大丈夫だ。案ずるな、主よ』

だがそう口にしてる自分がだいぶ舞い上がっていることにガルディアは気付いていた。

だが、永きに渡る生において、初めてといえるほど心を傾けている主に、守りたい大切な存在だと言われて舞い上がらぬはずがない。

『我は最強の竜族ぞ。これでも強さには自信がある。アーネストも…… たぶん、大丈夫だ』

「知ってるよ。でも、他に何も無いもん」

スィールの一番大切なものはもうない。だから、ガルディアとアーネストが大切だった。

『あの妖精族の次の王がいるではないか』

ガルディアにしてみれば、純粹に不思議だった。

ヴィ・ディールとスィールは、ガルディアやアーネストより付き合いはずっと長い。ましてや、彼らは妖精族言うところの『友』であり、特別な絆を結んでいる。

だが、スィールは意外なほどそっけなく言った。

「ヴィは私を守らないし、私もヴィを守らないよ」

(……仲睦まじいように見えたのだがな)

不思議に思うガルディアを知ってか知らずか、スィールは少し間を置いて、そしてつけ加えた。

「……背中は預けるけど」

その言葉に込められた確かな信頼と絆。

ガルディアが思うよりもそれはずっとずっと深いもので……。

(ああ……)

ガルディアは心の中で嘆息する。

(……私は、初めて他者を羨ましく思ったかもしれぬ)

その言葉に、いや、その言葉を与えられたヴィ・ディルーを、ガルディアは心底、羨んだ。

身を焦がすようなその感情を、どうしてよいかわからなかった。最強であるがゆえに誰よりも自由である竜族の、その王であった自身がそんな感情を持つことに苛立ちを覚え、だが、それ以上に主を……スィールをかけがえない大切な存在なのだと感じる気持ちが上がった。

『我は……主に守られるより、主を守りたいと願う』

そして、口に出せたのはそれだけだった。

「ガルは私の守護者だもんね」

スィールは、時折見せるはにかんだような照れているような笑みをみせる。

ただそれだけで、ガルディアの心は喜びに揺れた。

『もちろんだ』

「じゃあ、私もガルを守るけど、ガルも私を守るの」

それっていいよね、とスィールが笑う。

だから、ガルディアも笑った。

『ああ……それがいい』

どのくらい歩いただろうか。雪深い森を抜け、しばらくすると、山肌を穿つようにして建てられた石造りの祠が目の前に現れた。

「……やっぱり祠だ」

スィールの声に喜色が混じる。ある意味、予想通りといってもいい。

『ふむ。確かにこの奥から匂いがするな』

ガルディアはクンクンと鼻をうごめかせる。

魔術には独特の匂い、のようなものがある。本当に匂うというのではなく、気配のようなものを匂いとして感じているにすぎない。

「そうだね。……奥で術が動いているみたい」

目を閉じたスィールは、意識を凝らした。

透視くとおみくと言われるそれは、ある種の魔術的な視界で、特殊技能の一つだ。別名を妖精眼とも言うように、妖精族はほぼ全員がこの視界を有するのだが、人間においては血統による特殊技能である。

だが、育て親の老人はもちろん、自分も、そしてヴィ・ディールも当たり前のように普通に使っていたスィールにとって、それが特殊技能である意識はない。

『何かあるのはわかるのだが……』

魔力が高くとも、竜族は透視くとおみくと呼ばれるほどはつきりとした魔術的視界を有さない。竜族の魔法はいわば力技が多く、ガルドディアはあまり細かいことはよくわからなかった。

「洞窟になってるの。その奥の方で術が動いてる」

堅く封印されているため、その術に遮蔽されてなかなか見えにくいものの、奥深くで魔方阵が淡い光を放っているのがわかる。

「……わざわざ入り口をふさぐ形でこの祠を建てたんだよ。こういう形に建てられた祠はそれほど珍しくない。ここから少し東にあるクレッティエンっていう町の郊外にもあるし、帝都にもいくつかあるよ」

『詳しいのだな』

「だって、じじ様は遺跡の研究者だったんだもの。こういう祠も勿論、守備範囲だよ」

『遺跡の研究とは、どういうことを研究するのだ？』

「主に、旧帝国時代とそれ以前の遺跡が専門で……構造とか建てられた目的とかそういうの。あとね、遺跡って魔術やそれに類するものの宝庫なんだよ。そういうものを見つけて自分の魔術に役立てるの。昔から稼動してる術の術式ってすごい勉強になるんだよ」

スィールはとことんまで魔術師気質なのだろう。魔術のことに関する、いつもより少し饒舌になる。

『主も、遺跡の研究者になるのか？』

「……そのつもり。だから、ガルは助手になってね」

『こんなナリで助手ができるのか？』

「飛べると便利だよ」

『ふむ』

「あ」

石造りの扉に触れた瞬間、びりっと小さな火花が飛んだ。

『主よ、大事ないか？』

ガルディアは慌てた。

「うん、大丈夫。魔力に反応しただけ。別に封印を破ろうとしたわけじゃないから。ただの警告だよ」

石の扉には魔術言語による警告と封印の術式が浮かび上がり、淡く発光している。

術に気がつかなかった……とつぶやきながらも、その術式をくいているように見つめている。

『どうするのだ？』

「んー……本当は、中に入って詳しく術を解析したいけど……」

今回はやめておく、と、スィールは軽く肩をすくめる。

『良いのか？』

「うん。本当はすごくすごく見たいけど。でもここまで嚴重に封印してるってことはそれだけ隔離したいってことだし……それに、下調べとかしてないし……」

『下調べとは何をするのだ？』

「この祠がどういう祠なのかとか、どういう言い伝えがあるのかとかを地元の人に聞くの。伝説とか神話に由来してたりするけど、それも手がかりになるんだよ。……それから地形を調べたりとか。それに、穢れに対する備えもまったくしてないし……」

個人差はあるが、魔術師は常人より繊細な感覚を持つ。それは、穢れに対して敏感であるということでもある。敏感ではあっても耐性は強く、侵されにくくはあるのだが、それなりの対策はもちろんな必要だ。

「機会があれば、またくればいいし」

『「この座標も覚えたのか？」』

「うん」

『では、村に戻るとするか』

「そうだね。アーネスト、探さなきゃ！」

のんびりと元来た道を辿る。

雪の上についている足跡は消えかかっている一つだけだ。こんな外れの祠にはほとんど来る者もないのだろう。

『宿屋におるのではないか？』

「宿？そういえば、ごはんおいしいとこ知ってるっていった！」

『そうだったな』

「シチュー食べたい」

『主はシチューが好きだな』

「うん」

『だが、最近少し食べられる量が減ったのではないか？小姑がうるさすぎるか？少し黙らせようか？』

「……んー、別にアーネストはいつものことだからもう慣れたけど

……アロサ、嫌い……」

元々食が細い方だ。携帯食になるとそれがさらに細る。

アロサというのは旅人なら必ず持つているだろう携帯食で、麦の加工品だ。嵩張らずに栄養価も高く、火を通しても、そのままでも食べられることから重宝されている。

スイールはこれが好きではなく、ついつい食べる量が少なくなるので、アーネストは食事のたびにうるさい。

だが、食べられないものは食べられない。そして、アーネストが聞いたら更に怒るかもしれないが、小言じみたそれも毎日言われれば慣れるもので、最近は言われてもまったく気にならない。というか、最初からスルーしている。

『自分で買ったのに？』

「じじ様がそうしてたように揃えただけ。……やってみたいとわからないことつていっぱいあるね。昔食べたときはそんなに嫌いとか思わなかったのに」

スイールは溜め息をつく。

どんなにいろいろな知識があっても、自分で実感できない限り、それは自分のものではないのだと改めて思い知った。

『以前、我が剣主であつた者は、干した果物と一緒にミルクで煮て食べていたぞ』

「甘くなれば、食べられるかなあ……………」

『試してみるがよい』

「うん。……ありがとう、ガル」

『いや』

他愛ない会話を交わすだけで満たされる自分を、ガルディアは奇妙なものだと思う。

「話してたらおなか減ったから、急いで帰る」
『うむ』

スイールはガルディアを抱いたままとん、と地面を軽く蹴る。と同時に指先で小さく呪を描いていて、それを足元に落として発動させた。前回はわからなかったが、気にして観察してみれば、極めて簡略化されていたがきちんと魔術行使の手順を踏んでいる。

（この術だけでも、主が優秀な魔術師であると誰もが認めるであろう）

いささか主自慢がすぎるかもしれない、と思いつつも、ガルディアは心の中でそう思うことをやめられない。

「え？」

「うわっ」

転移が終了したその瞬間、スイールは背中に衝撃を感じ、バランスを崩した。

迷子と竜の祠(3)

「す、すみません」

半ば突き飛ばされる形で雪の塊に突っ込んだスィールは、雪の上
にぺたりと座り、雪を振るい落とすように首を大きく振った。目の
前の相手が手を伸ばそうとするのを避け、雪の上で後ずさって距離
をとる。

「いえ、大丈夫です」

勢いですつ飛んだガルディアは雪の塊に突き刺さったままだ。じ
たばたとする後ろ足にスィールは小さく笑みを浮かべ、優しく抱き
上げるようにしてガルディアを救出した。

何かなんだかわからないガルディアもまた、雪の上でスィールが
そうつたようにふるふると首を振る。

『何だか酷い目に遭った気がするのだが……』

「ごめんね、出会い頭の事故。道からはずれたところに転移したの
に、転移先の至近に人がいた」

『ふむ。で、あれが、加害者か』

「うん」

『変態だな』

「……変態ってなあに？」

『ああいう変なヤツを言うのだ』

一人と一匹、気の合う主従は、ある意味、加害者となる相手をじ
っと見つめた。

「えっ、あ、その……」

何を話していたかはわからなかったらしいが、突然見つめられた青年……そう、少々違和感があるものの二十歳をいくつか過ぎた青年であるとスイールは認識した……は、わたわたと奇妙な動きをし、それから、こほんと咳払いを一つして口を開く。

「すみませんでした。あんまり人に見られなくなかったものですか
ら……」

努めて柔らかな声をだしている。もし、彼の格好が完璧であればそれも必要なことであつたかもしれない。

「……それは別にいいんだけど……」

スイールは口ごもった。

「何か？」

少しひきつったような笑みを浮かべ、彼は首を傾げる。

スイールは迷った。こういう時どうしたら良いかは、物識りのじ様だつて教えてはくれなかった。

なのでスイールはちよつとだけ考えて、それから少しの親切心を発揮した。

「……あの、カツラ落ちてますよ」

「え？あ？」

指差した先には、彼がかぶっていた栗色ストレートロングのカツラが落ちてている。

「あれ？」

青年はしきりと頭のあたりに手をやるが、その手に触れるのはクセのある赤みの強い紅茶色の自毛だ。

そう。違和感の正体とは、それ……彼が、女性の服装をしていることだった。

「いや……これは、理由があつて、その……」

女装青年はカーッと真つ赤になって、ますます挙動不審になる。

スィールとガルディアは、生温い視線を向けた。

差別をするつもりはないが、多少、含むものがあつても仕方がないというものだ。

「……じゃあ、これで失礼します」

とりあえず変な人には近づかないでおこう、とスィールは回れ右をする。勿論、ガルをしつかり抱えることは忘れない。

好奇心旺盛な世間知らずであるスィールだったが、変な人にほいほいと近づくほど能天気ではない。

「ちよつと、まっただ」

カツラをかぶりなおした青年は、慌ててスィールを引きとめた。

その手は勢いよく外套のフードを掴み、はからずも、その場から逃亡しようとしていたスィールの首元をぎゅつと絞める。うきゅつという奇妙な声を発し、スィールはガルディアを抱いていた手を離した。

ガルディアは翼を動かし、空中でバランスをとる。

勢いよくひっぱられた反動で、スイールのやせっぽっちの身体は女装青年の腕の中に仰向けでおさまった。

『主に何をする。この無礼者っ』

反射でガルディアが焰を吐こうとするのを、スイールが手を大きく振って止める。この距離では一緒に巻き込まれて被害甚大だ。

「くるし……」

「すまない。……首をしめるつもりはなかったんだ」

緩んだ腕の中から抜け出て、思いつきり睨みつける。

心底すまなそうな様子で神妙な顔をしている青年は、その格好をのぞけば極めて普通に見える。だが、その格好が格好なので、その様子が一層の違和感を醸し出していた。

スイールは、数回、深呼吸をくりかえし、それから警戒心も露に問うた。ガルディアもいつでも焰を吐く体勢をゆるめない。

「何かご用ですか？」

言葉遣いこそ丁寧だったが、その声音は冷ややかだ。そのことをガルディアは不思議に思う。

（もしかして主は、人見知りが激しいのだろうか？）

アーネストを受け入れたのが早かったのであまりそんな風には思わなかったが、これまでの旅の間のことを考えると案外それが正解だという気がしてきた。

ここに来るまでの旅の間、あまり人には出会わなかったが、スイ

ールはほとんど自分からは口を開かなかった。スィールが自分から積極的に話をしたのは、何度も買物に来ていたという最初のダール村くらいだ。

「用、というか、誤解して欲しくなくて……」

女装青年の言葉に、スィールはあっさりと返す。

「別に女装趣味を咎めるつもりはないですし、誰かに言いふらしたりもしません」

「ないから！女装趣味なんて絶対にならないから！」

「でも……」

強く主張されても、目の前に現物がある状態ではいささか信じ難い。

外套こそよく見る灰色のものであるが、外套の裾からのぞいているのはあきらかにスカートの裾である。それも光沢のある柔らかな桃色の生地で、裾からのぞく控えめなレースが上品だ。

更に、履いている長靴も女性物で少しヒールがあるし、つけている香水も花の香りでも女性物的だ。

やむをえず女装するにしても、なかなか難易度の高い服装だと思っうのはスィールだけではあるまい。

「ちょっと悪いやつに追われててね。えーと、変装っていうか……」

「別にあなたの事情を知りたいわけではないです」

「いや、そうかもしれないんだけど、でも、見ず知らずとはいえ、女装趣味の変態とか思われたら僕が切ないし」

「……………」

「……………ねえ、その沈黙は何なんだろう？」

スィールは、思いつきり不信任な眼差しを向けていた。

「わりと変装うまくいったと思うんだよ」

「……………」

女装青年は、カツラがきちんとフードにおさまっている今の状態ならば背の高い女性に見えないこともない。口を開かなければほとんどの人間が騙されるだろう。いや、口を開いても、気をつければハスキーな声の女性といつても不思議はない。

だが、魔術的視界を有する人間は別だ。

ガルディアは、はつきりとは見えないが、それでも彼が女性でないことはわかる。スィールならば、尚更だろう。カツラがはずれなかったとしても、スィールならばきっと彼が女装していることに気付いたに違いない。

「あ……………っ。私だってこんなのは不本意なんだ。それでも騎士なんだ。剣の腕はたいしたことないけど」

「……………別に私にいい訳しなくていいです」

「たとえ壊滅的につるつぺたで、細いとは聞こえがいいもののは実はガリガリなだけの、見た目少年だったとしても性別はちゃんと女の子に誤解されるのは非常に不本意だ！」

女装青年の言葉に、スィールはむっとした表情をする。

「ガル、この人、失礼」

『主よ、このような変態と関わってはならぬ』

「行く」

ぎゅっとガルディアを抱きしめたスィールは、再び転移の術式を足元に落とす。

「あああああーっ、待って、待って、魔法士殿」
「女装してる変態騎士なんて知らない」

半ば捨て台詞のような言葉だけを残し、スイールは転移する。
転移先はアーネストの近くという曖昧な指定だったが、スイールは今度こそ着地をちゃんと決めた。

「アーネストっ」

村中スイールを探し回っていたアーネストが目にしたのは、何かに怯えるような硬い表情のスイールが転移してくるところだった。

「スイール！」

「アーネスト、変な人がいた!!」

ガルディアを抱いたまま、アーネストの腕の中に飛び込んでくる。普段、こんなふうにはスキンシップを求めてくるような子ではないのでよほど怖い目にあっただろう。

探している間にだんだん、勝手に迷子になった不用意さに腹が立って、再会したらビシッと怒鳴りつけてやろうと思っていたのにも関わらず、無事だった安堵が先にたつ。

「大丈夫か？何もされてないか？」

「平気。早く宿に戻る」

アーネストを見上げる眼差しは幾分甘えの色があるように思える。

「ああ。……どんなヤツだったんだ？」

「……えと……」

スィールは答えを躊躇う。

『女装した変態騎士だ』

代わりに答えたのはガルディアだった。

「女装……」

アーネストは何をどう言っていていいかわからず、視線をさまよわせた。

「ちゃんとした騎士様が、女装なんてするわけないよね」

「え、あ、いや……」

「……アーネストもするの？女装」

腕の中のスィールの眼差しに、どこか怯えるような色が滲む。

「俺は絶対にそんなことしない」

アーネストは一字一句を強調するように告げた。

他の誰に何を誤解されようが、スィールにだけは誤解されたくない。

「そっだよね」

ほっとした表情を見せながら、ぎこちなく笑みをもらす。

「……変な人だったんだよ。女装趣味はないって主張してるくせに、女物の香水までつけてた」

「……………」

『主よ、変態に近づいてはならぬぞ。変態はうつるからな』
「うつらねーよ」

思わずアーネストは突っ込んだ。

『わからないではないか！我は変態に人権は認めぬ！』
「……まあ、確かに変態に人権は認めなくていいけどな」

人権を認めぬと主張しているガルディア自身は竜族で人外なのだ。アーネストにはそれが何だか奇妙な感じがして、おかしかった。

くしゅん、とスィールが可愛らしくしゃみをする。

アーネストは、腕の中のスィールを自分の外套の中に入れた。

「少し冷えてる。……宿に戻ろう」

そつと背に手をやり、歩き出すように促す。

怒鳴りつけようと思っていたことなど、すっかり頭の中から消し飛んでいた。

「うん」

「戻ったら風呂にはいるといい。ここは、温泉地だからすぐに入れ
る」

「温泉？ほんと？」

目がきらきらと輝いている。

あの沈黙の森の奥深くの小屋には、贅沢なことに、小さいものではあったが風呂が備え付けてあった。スイールは風呂好きだったのでほぼ毎日のように魔術で湯をわかし、アーネストもその恩恵に預かっていたのだ。

「ああ。……俺は詳しくはないんだが、水が湧くようにお湯が湧くんだという」

「うん。知ってる……あのね、あっちの山、火山だから。そのせいだよ」

スイールは、先ほどの祠のあった方角を指差した。

「火山があるから温泉になるのか？」

「そう。火山があるから火精があふれてるんだよ。……あのね、温泉とごはん、すっごく楽しみ」

スイールはアーネストに嬉しそうな笑みを向ける。

「そうだな」

アーネストはそつとスイールの頭を撫でた。意識してのことではなく、自然と手が伸びてしまった。

スイールは不思議そうにアーネストを見上げている。

「すまん。……つい」

スイールが実は人見知り癖があることをアーネストは気付いてい

た。

話しかけられれば見知らぬ相手であってもちゃんと受け答えするのでわかりにくいのが、自分から口を開くことはないし、旅に出てからは外ではほとんど警戒心をとくことがない。

基本的に、スイールは他者と必ずある一定の距離を保っている。

(それはたぶん……)

他者が近づくことを容認する距離というよりは、剣の間合いだとアーネストは見当をつけていた。

その内に入ることを許されているのは、ガルは別格として、今のところ、ヴィ・ディールとアーネストだけだ。

「うっん。アーネストは別にいい」

「そうか……」

スイールに、こんな風に自分が特別扱いされるのは満更でもない気分だった。

二人は、ぱたぱたと目の前を飛ぶガルの後をついていくようにして歩く。

「宿のごはんのメニューに、シチューがあるといいな」

すっかりおなかの減ったスイールは、腹の虫を宥めるようにおなかに触れる。

「たぶんあるだろう。宿屋の定番料理だ」

『我は、ホワイトシチューを希望する!』

「あればな」

『鶏肉が希望だ!』

ガルは、すっかり人間の食事に馴染んでいる。

「えー、お肉ー」

『少しは肉も必要だぞ。安心するが良い、主よ。皮と骨は我が食べてやるからな』

「うん。頼りにしてるからね、ガル」

『任せるが良い』

ガルディアは胸を張った。その様子がおかしくて、アーネストは笑った。

「たくさん食べなきゃだめだ。大きくなれないぞ」

「限度つてあるんだよ、アーネスト」

ふう、と溜め息を付く様子はこにくたらしくもあり、かわいくもあつてアーネストの頬は少しだけ緩む。

「……大雪が降るね」

夜空を見上げたスイールが独り言のように言った。

「そうなのか？」

「うん」

うなづいたスイールのその眼差しが何を見ているのか、アーネストにはわからない。

どこか遠い眼差しだと思い、そして、それに不安を覚える。

「スイール」

「何？」

「……まだ、いろいろとうまくできないが、俺はおまえの騎士だ。それだけは忘れないでくれ」

「知ってるよ。……急にどうしたの？」

「いや……俺は、まだ相応しくないからな」

決着をつけねばならないのだ、と思う。

ウィリアムとも、そして、シュレイヤーンとも。

「騎士つてよくわからない。だから、何してもらえばいいのかもわからないけど、でも、アーネストと一緒にいてくれるのは嬉しい」

まっすぐなその言葉が嬉しかった。

「……いつか、俺が相応しくなれたら、おまえを守らせてくれ」

「ガルがいるのに？」

「ああ。……ちゃんと決着をつけたら、改めて誓いを立てさせて欲しい」

「……いいよ」

スイールは、それからいたずらをするような表情で付け加えた。

「でも、私は自分より弱い人に守られたりしないから」

「精進するさ。……あの妖精族のおまえの友に認められるように」

「こだわってるー」

「別にこだわってない」

「えー、こだわってるよ」

降り始めた雪の中にスイールの楽しげな笑い声が響き、ガルディアは目を細めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3534t/>

不良騎士とひとりぼっちの魔術師

2011年8月20日08時07分発行